血濡れの狩人と白兎

ユータボウ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

迷宮都市オラリオにやって来た少年、ベル・クラネル。

多くの【ファミリア】に門前払いされ、途方に暮れていた彼は、神ヘスティアの勧誘により【ヘスティア・ファミリア】に所属することとなる。

そんな彼を待っていたのは――物静かな男と動く人形だった。

これは英雄を目指す少年と血に濡れた狩人、二人の冒険者による【眷族（ファミリア・ミイズ）の物語】。

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 12
第3話 …… 24
第4話 …… 34
第5話 …… 48
第6話 …… 60
第7話 …… 77
第8話 …… 90
第9話 …… 104
第10話 …… 116
第11話 …… 130
第12話 …… 141
第13話 …… 154
第14話 …… 166
第15話 …… 175
第16話 …… 186
第17話 …… 199

第1話

ベル・クラネルは溜め息をついた。突き飛ばされて地面に強打したズキズキと痛む臀部をそっと払い、顔をしかめながらも立ち上がる。

また駄目だった。冒険者に憧れ、故郷の村からこの迷宮都市オラリオに遥々やってきたベルだが、数日経過しても未だに肝心の【ファミリア】に入ることが出来ずにいた。ギルドより渡された探索系【ファミリア】のリストに記された【ファミリア】を当たってみたはいいが、どこもかしこも適当な理由で断られてしまうのである。

ベルは俯き、今の自分を客観的に見つめ直した。真っ白な髪に赤い瞳の組み合わせはさながら兎のようで、その顔つきもまだまだ幼い少年のそれだ。体の方も故郷で農耕をしていたこともあって鍛えられてはいるが、線は細くどことなく頼りない印象を与えてしまう。また、冒険者には必須である装備品も身に付けてはいない。

なるほど、これではどの【ファミリア】にも断られてしまう訳だ。だって自分は明らかに弱そうなのだから。屈強な肉体である訳でもなければ、キチンとした身なりをしている訳でもない。ベルは再度深く嘆息した。

「……やっぱり、僕には無理なのかな？」

英雄となってハーレムを作る。
今は亡き祖父の影響を受け、そんな子供のような願いを今も尚持ち続け、目指しているベル。しかし、非情な現実に打ちのめされた彼は意気消沈してしまい、普段の前向きで明るい性格はすっかり息を潜めてしまっていた。
踵を返し、ベルはふらふらと寝泊まりをしている宿を目指す。まだ太陽は高い位置にあるが、今の彼はさっさと休んでしまいたい気分だったのだ。
眠ってしまえば今の陰鬱な気分くらい忘れられるだろう。そんな思いと共にベルは暗い表情のまま、人々で賑わう通りを歩いていく。
「僕を受け入れてくれる【ファミリア】なんて……あるのかなぁ……」
ポツリと溢れた独り言。それは人々の賑わう声に消えていく……筈だった。

しかし、彼女だけはその声を聞いていた。

「ねぇ君、もしかして【ファミリア】を探しているのかい？」
そんな言葉と共に手を引かれ、ベルは思わずその場で立ち止まる。振り返ると彼の目にふわりと揺れる黒髪のツインテールと、そして浮かべられた満面の笑みが飛び込んできた。

突然のことに困惑するベル。そんな彼に向かって少女――ヘスティアは「もし良かったら……」と言葉を紡ぐ。

「ボクの【ファミリア】に来てくれないか？」

数秒後、ベルはその言葉の意味を理解し、通りの真ん中で大声を上げた。

△▽△▽

「到着だよ。ここがボク達の本拠地（ホーム）、『竈火の夢』さ！」

「ここが……」

ヘスティアにベルが連れてこられたのは、オラリオの西地区に佇む白い教会だった。大きさ自体はそこまで大きい訳ではないが、その壁には汚れや塗装の剥がれの一つもなく、外観は綺麗に保たれている。教会という建物故か、どこか神聖な雰囲気を感じさせる【ヘスティア・ファミリア】本拠地（ホーム）に、ベルは圧倒されてその場に立ち尽くした。

「凄いだろう？　最初はボロボロの廃教会だったんだけどね、ボクの眷族（こ）がヴァリスを貯めて直してくれたんだ」

入りなよ、と。先行して扉を開けたヘスティアがベルに声を掛ける。そこで漸く我に返ったベルは慌てて彼女の後に続いていく。

教会の中は外観同様、シンプルながら美しい造りとなっていた。空から降り注ぐ日光がステンドグラスに反射して教会の内側を照らしている。そんな故郷では見られなかった内装を物珍しそうに眺めるベルに、ヘスティアはふっと微笑んだ。
「さぁこっちだよ。この教会は確かに立派だけどボク達がいつも暮らしてるのはここの奥なのさ」
ヘスティアがそう言いながら教会奥の扉を開くと、白い花の咲く庭に囲まれた邸宅が建っていた。教会の正面からは見えなかった、まるで絵に描かれたような光景に、ベルは今日何度目かとなる感嘆の声を漏らす。
「す、凄いですね……！　もうなんだか、さっきから驚きっぱなしです……」
「ふふっ、そうだろうそうだろう！　そんな新鮮なリアクションをしてくれる子は久し振りだよ！」
ベルの反応に機嫌を良くしたのか、ヘスティアの足取りは普段よりも軽い。鼻唄を歌いながら石畳の上を歩くその姿は誰が見ても可愛らしい少女のそれであり、ヘスティアの纏う『神威』がなければ彼女が神だとは思えなかっただろうとベルは苦笑した。
「さて。少し遅くなったけど、ようこそ『竈火の夢』へ」
「は、はい。お邪魔します」
玄関を通され、ヘスティアと共に『竈火の夢』本邸へと入っていくベル。本邸の中は

豪華絢爛とまではいかないまでも、落ち着いた上品な雰囲気の造りとなっており、内装を考えた者のこだわりを感じさせていた。その様子に目を奪われたのか、ベルはつい忙しなく辺りを見回してしまう。

そんな彼と、彼を微笑ましく見守るヘスティアに近付く影が一つ。

「おかえりなさい、ヘスティア様」

「うん。ただいまマリー君」

現れたのは無機質な表情のまま丁寧にお辞儀をする等身大の人形だった。丁寧な装飾のあしらわれた衣装を着た、しかし球体関節を持つ紛れもない人形が動き、ヘスティアと言葉を交わしているという光景に、ベルはポカンと口を開けて呆然となる。

「ヘスティア様、そちらの方は?」

「おっと、そうだった。この子はベル・クラネル君。【ファミリア】を探してたところを誘わせてもらったのさ」

ヘスティアはふふんと鼻を鳴らして得意気に豊満な胸を張った。人形はそんな彼女にクスリと笑いを溢すと、未だに呆けるベルの前へと歩を進めた。そして、再び丁寧に頭を垂れる。

「はじめまして、クラネル様。私は人形。この【ファミリア】で貴方のお世話をするものです」

「は、はいぃ!?　べ、べべ、ベル・クラネルですっ！　えと、あの、よよ、宜しくお願いしますー！」
「マリー君、ボクはベル君を応接室に案内するから、すまないがお茶でも淹れてもらえないかな？」
「分かりました」
　ヘスティアの言葉に人形は頷く。彼女の背中を見送ったベルはそのまま応接室へと案内された。そこでソファーに腰掛けた彼は意を決し、テーブルを挟んで向かい合うヘスティアに尋ねた。
「あの、ヘスティア様。さっきの人形の方は……」
「あぁ、マリー君のことだね。驚いただろ？　人形が動いて話をするなんて」
「えぇ……とっても……」
　一人と一柱は揃って苦笑する。
「あの子はボクの眷族が作ったんだ。詳しいことは神であるボクにも分からないから何も教えられないけどね。それでも、今じゃこの【ファミリア】を支えてくれる大切な家族さ」
「へぇ～……」
「ふふっ、さあて、じゃあまずはこの【ヘスティア・ファミリア】のことからでも……っ

て、そんなに言うことはないんだけど、それでも構わないかな？」
「あっ、はい。お願いします」
【ファミリア】のことと聞いたベルは背筋をピンと伸ばして真剣な面持ちを作った。
そしてヘスティアもまた一度咳払いをしてから、ベルの目をじっと見つめる。
「まず初めに言っておくけど、ボク達【ヘスティア・ファミリア】には眷族が一人しかいない。つまり、このオラリオの中で最も小さな【ファミリア】なんだ。そこは覚えておいてほしいな」
「え？　でも、この建物やさっきの教会はここの眷族の人がヴァリスを貯めて建て直したって言ってましたよね？　もしかして、ここをたった一人で……？」
恐る恐るといった様子のベルにヘスティアは首を縦に振る。直後、彼の口から驚愕の叫びが響いた。
「す、凄い方なんですね……ここの冒険者さんは。僕、そんな方と一緒で大丈夫なんでしょうか？」
「大丈夫さ！　そりゃ確かに彼は巷じゃ【血の申し子（ブラッドボーン）】なんて物騒な、それも以前の二つ名で呼ばれているけど……彼がとってもいい子だってことは主神であるボクが保証するよ！」
「ふむ、我が主神にそこまで言われるとは光栄だな」

ビクッと、何の前触れもなく耳に飛び込んできた低い男の声にヘスティアとベルの肩が跳ねる。慌てて部屋の扉の方へ振り返った一人と一柱が見たのは、ティーカップの乗ったお盆を支える男とその隣に控える人形の姿だ。ヘスティアの表情が引きつる。

「ヴィ、ヴィンセント君……帰ってきたのかい……？」

震える声のヘスティアに男は肯定の意を示した。

「つい先程な。人形から冒険者志望の客人がいると聞いて来てみたが……少年で間違いはないか？」

「は、はいっ！　ベル・クラネルと言います！」

咄嗟に頭を下げたベルは改めて目の前の男をじっと見つめた。

男の身長はおよそ一八〇、全身には黒一色で統一された装束を纏っている。尖った帽子の隙間からは紅蓮の髪と翡翠色の瞳が覗いており、その視線は真っ直ぐベルの方へと向けられていた。それに気付いたベルは無意識のうちに体を強張らせる。

「心配は無用だ。そう警戒することはない。いくら私が無慈悲な人間であろうとも、初対面の少年を問答無用で殺すような真似はせんよ。かつてならともかく今は、な」

ニヤリと不敵な笑みを浮かべた男はテーブルに近付き、ヘスティアとベルの前に紅茶の入ったティーカップとお茶請けの乗った皿を置いた。引っ掛かる男の言葉はともかく、紅茶から立つ芳醇な香りにベルの中で張っていた緊張の糸が緩んだ。

「おっと、自己紹介がまだだったか。【ヘスティア・ファミリア】団長、ヴィンセント・ローズだ。宜しく頼むぞ、少年」

「は、はい。宜しくお願いします」

差し出された右手に一瞬戸惑うも、すぐさまベルはその手を取って握手を交わした。

怖そうだけど悪い人じゃなさそうだ、ベルは内心でヴィンセントにそんな評価を下す。

「さて……既に言われたことかもしれんが、ここは私とヘスティア、そして人形しかいない小さな【ファミリア】だ。オラリオにはここよりも大きな【ファミリア】は無数にある。それでも、貴公はここを選ぶのか？」

ヴィンセントの言葉にベルは自分の胸に手を当て、すぅと大きく深呼吸をした。そしてその深紅（ルベライト）の瞳でヴィンセントの翡翠色の瞳を見つめ返し、言った。

「僕は、英雄になるためにこのオラリオに来ました。でもどこの【ファミリア】にも門前払いされて、やっぱり僕なんかじゃ駄目なのかなって思って……でも！　こんな僕でもヘスティア様は、神様は【ファミリア】に誘ってくれました！　だから――」

ベルは頭を下げた。そして叫ぶ。

「お願いしますっ！　僕を、【ヘスティア・ファミリア】に入れてください!!」

しん、と部屋に静寂が訪れた。カチカチと時を刻む時計の音がやけに大きく聞こえる。

ベルは頭を上げなかった。いや、上げることが出来なかった。あれだけのことを言ってもし断られたら？　そう考えるだけで彼の体は石のように動かなくなってしまったのである。

そして――静寂を破ったのはヘスティアだった。

「勿論だよベル君！　やった！　やったぜヴィンセント君！　漸く二人目の眷族だ！　今日はお祝いのパーティーだよ！」

「え……え……？」

感極まったヘスティアに肩を掴まれ、ガクガクと揺らされるベル。しかし当の本人は状況を理解出来ていないようで、ただ困惑するだけである。やがてヴィンセントがヘスティアを止めに入ったところで漸く脳が役目を果たし始めた。

「その……いいんですか？　本当に僕なんかが入って……？」

「当たり前じゃないか！　ベル君、君は今日から【ヘスティア・ファミリア】の一員で、ボクの家族だよ！」

「落ち着け神ヘスティア。ベル・クラネル、【ヘスティア・ファミリア】にようこそ。我々

は貴公を歓迎しよう」
「宜しくお願いします、クラネル様」
ヘスティア、ヴィンセント、そして人形の順に歓迎の意を示され、ベルは思わず涙を流しそうになった。込み上げる嗚咽を必死に堪え、溜まった涙を手で擦って誤魔化す。そして再び頭を下げた。
「ありがとうございます！　これから、宜しくお願いしますっ！」

こうして少年、ベル・クラネルは正式に【ヘスティア・ファミリア】の眷族となった。

第２話

ベル・クラネル
Ｌｖ．１
力　…Ｉ　０
耐久…Ｉ　０
器用…Ｉ　０
敏捷…Ｉ　０
魔力…Ｉ　０
《魔法》
【】
《スキル》
【】

「これが……僕の【ステイタス】……」

その夜、歓迎会の後、晴れて【ヘスティア・ファミリア】の眷族となり、ヘスティア

により『神の恩恵（ファルナ）』を与えられたベルは、羊皮紙に書かれた自らの【ステイタス】を見てポツリと呟いた。これで自分も冒険者だと思う反面、『スキル』も『魔法』も発現していないことが少しだけ残念に思った。

「焦らなくても大丈夫だよ、ベル君。どんな人だって最初はゼロからスタートなんだ。これから強くなっていけばいいのさ」

そう言ってニコリと微笑むヘスティア。絶世の美貌を持つ彼女の笑みに、これまであまり異性との関わりのなかったベルは顔を赤くし、慌てて後ろを向いた。バクバクと高鳴る心臓を深呼吸することで落ち着かせる。

「今日は疲れただろうし、もう眠った方がいいよ。明日は冒険者登録とか、色々やることもあるだろうからね」

「はい、神様」

「うん、じゃあおやすみなさい」

ヘスティアは微笑みを浮かべたまま手を振って部屋から出ていった。パタン、と扉が閉まると同時にベルの口から「はぁ～……」と大きな息が溢れる。

「これで……僕も冒険者なんだ」

込み上げる嬉しさを堪えられないのか、ベルは【ステイタス】の書かれた羊皮紙を抱えたまま、ゴロゴロとベッドに転がった。憧れた物語のような英雄になれるかもしれな

い、そう考えるだけで自然と頬がにやけてしまうのだ。
　しかしそんな興奮した状態では寝付くことなど出来る筈もなく、深夜になっても彼は目を開けたままであった。眠れない、そうぼやいたベルはベッドからそっと起き上がると、静かに部屋を後にして外へと出ていく。夜風に当たれば気分も落ち着くだろうと考えたのである。
　しかし、そこには既に先客がいた。
「眠れないのか、ベル」
　月光に照らされる白い花々の咲き乱れる庭、その前の石段に腰掛けていた紅髪緑眼の男――ヴィンセントは、振り返ることなくやって来たベルに尋ねた。
「えっと……はい。なんていうか、憧れの冒険者になれたんだって思うとなかなか眠れなくなっちゃって」
「なるほど。ならば暫しここにいるといい。今宵は心地いい風も月もある、ただ寝て過ごすには勿体ないというものだろうよ」
　ポンポンと、ヴィンセントは自身の横にある空いたスペースを叩いた。それは、ここに来いということなのだろう。ベルは誘われるがままにヴィンセントの隣に腰を下ろした。そして空を見上げ――感嘆の声を漏らす。
　雲の少ない空に浮かぶ月は満月だった。蒼白の光を放ちながら煌々と輝くそれは、ベ

ルの目にこれまで見てきたどんな月よりも美しく映った。ずっと眺めていたらいつか呑み込まれるかもしれないと、無意識のうちにそう感じてしまう程だ。
「……あの、ヴィンセントさん」
「どうした？」
「ヴィンセントさんは、どうして冒険者になったんですか？」
ベルは視線を移し、ヴィンセントに問うた。その深紅（ルベライト）の瞳が彼を捉える。
「ふむ、何故私が冒険者になったのか、か……」
顎に手を当て、考えるような素振りを見せるヴィンセント。そんな彼をベルは無言のままじっと見つめている。
「そうさな、貴公のようにあまり大それた理由ではないが、私が冒険者になったのは神へステティアに恩を返すためだ」
「神様に……恩を……？」
意外な理由に首を傾げたベルにヴィンセントはこくりと頷く。そして彼は語り始めた。
「もう十数年も前のことになるのか、私は神へステティアに拾われた。薄汚い路地に倒れてくたばりかけていたところを、彼女に助けられたのさ。それからも彼女は素性も知れない私のために、何かと世話を焼いてくれたものだよ」

ヴィンセントは浮かぶ蒼白の月を見上げ、ポツリポツリと言葉を紡ぐ。
「最初の頃は何も思わなかった。だがそんな日々が何日も続くうちに、私は彼女に何かを返すべきではないかと感じるようになった。擦り切れたなけなしの人間性しか持たない醜く憐れな獣同然の身ではあったが、それでも私が獣でなくまだ人でいるなら、与えられた恩には報うべきだと。そうして行き着いた先が冒険者だ。幸い、この身は”狩り”に秀でていたのでな」
――いや、”狩り”しか出来ないというべきか
ふっと笑いを浮かべたヴィンセントに、ベルは自分が大きな勘違いをしていたことに気が付いた。しかしそれを口には出さない。本人に言えば、きっと否定するであろうから。
ヴィンセント・ローズ。
彼は、存外にいい人なのだとベルは思った。
「――ありがとうございます、ヴィンセントさん。僕、少しでもヴィンセントさんのことが知れて良かったです」
「そうか、それは良かった」
月明かりに照らされた二人は顔を見合わせ、そしてまた静かに笑った。

▽△▽△

翌日、ベルはヴィンセントに連れられて『ギルド』の本部を訪れた。『神の恩恵（ファルナ）』を与えられ、正式に【ヘスティア・ファミリア】の一員となったことから、冒険者登録を行う必要があったからである。

本来ならばすぐに終わる筈の冒険者登録、しかしベルの所属する【ファミリア】があのヴィンセントの【ヘスティア・ファミリア】だったことや、そしてベルがダンジョンに対してあまりに無知であったがために、担当アドバイザーとなったハーフエルフのギルド職員――エイナ・チュールから指導を受けたことで、随分と長引くこととなってしまったのだ。

結局ベルとヴィンセントが解放された時には、既にお昼時を大きく過ぎる頃合いとなっており、現在二人は中央広場のベンチに座って屋台で購入したじゃが丸君を黙々と齧っていた。男が二人、ジャガ丸くんを無言で食べ続ける光景はなかなかに奇妙な絵面である。

「なんか、凄く疲れたような気がします……」

最後のじゃが丸君を食べ終えたベルは、ベンチに背中を預けながら大きく嘆息した。ギルド職員の中でも熱心な、言い換えればスパルタなエイナから何時間も指導を受けた

のだ。更に今後も定期的に『勉強会』が開かれるともなれば、彼がこうなるのも当然と言えよう。むしろ、途中で逃げ出さなかっただけ誉められることかもしれない。
「知識は必ず役に立つ。覚えておいて損はないさ」
「確かにそうかもしれませんけど……大変だなぁ」
　再度溜め息を吐いて気落ちするベル。そんな彼を見たヴィンセントは「ふむ」と一度唸ると、立ち上がって彼を見下ろした。
「ベル、買い物に行くぞ」
「え？　買い物、ですか？」
「あぁ。貴公の装備を買いに行く」
「なるほど、僕の装備を――って、えええええええええええ!?」
　人目も気にせず叫び声を上げたベルに、ヴィンセントは深く被られた帽子の下でニィと口角を上げた。
「いやいやいや、ヴィンセントさん！　僕お金なんてありませんし、買ってもらうなんて悪いですよ！」
「安心しろ。そんな何千万もする装備を買いに行く訳じゃない。装備は冒険者の実力に見合うものを、貴公のような新米の装備なら五万ヴァリスもあれば揃えられる」
「いや、それでも――」

「ベル」

名前を呼ばれた、たったそれだけのことでビクッとベルの肩が跳ねる。ほんの一瞬だけ放たれた圧力、しかしそれを正面から受けたベルは言葉を失ってただただヴィンセントを見つめた。その頬を冷や汗が伝っていく。

「冒険者である以上、装備を整えるのは当然のことだ。そして私は貴公と同じ【ファミリア】の眷族でもある。先達からの祝いだ、大人しく受け取っておけ。それに、貴公が死ねば神ヘスティアがどうなるか分からん」

そう言われては言い返すことは出来ない。こくこくと何度も首を縦に振るベルに、ヴィンセントは手招きをして彼を呼んだ。

そうして二人がやって来たのは——天高くそびえ立つバベルの八階、【ヘファイストス・ファミリア】のテナントである。

「あの……ヴィンセントさん。【ヘファイストス・ファミリア】って、オラリオでも凄く有名な【ファミリア】ですよね……？」

震える声で尋ねるベルにヴィンセントは短く「あぁ」と肯定の意を示す。

【ヘファイストス・ファミリア】と言えば、オラリオに来てまだ日の浅いベルでも知っている程の高級ブランドである。いくらヴィンセントがいるとはいえ、そんな一流の冒険者だけが来るような場所に来てしまったベルは、凄まじいまでの疎外感に襲われてい

た。その場に縮こまって震える姿は彼の外見も相まってまさに兎であり、そんな彼にヴィンセントは苦笑してその頭を軽く撫でた。

「そう慌てることはない。このフロアにある装備は【ヘファイストス・ファミリア】に所属する、まだ未熟な職人達が作ったものだ」

ヴィンセントはふと目についた一本の槍を手に取ると、それをベルに向かって差し出した。その槍につけられた値段は、八五〇〇ヴァリス。その想像よりも遥かに安い値段――勿論、今のベルにすれば大金であることに違いはない――にベルはポカンとなって、何度も瞬きを繰り返した。

【ヘファイストス・ファミリア】は一流の鍛冶師（スミス）だけでなく、末端の者達にもこうして作った作品を売り出す機会を与えている。勿論下される評価は様々だが、それは間違いなく作った者の糧となる。神ヘファイストスはそう考えているのだろうな」

さて、とヴィンセントは言葉を区切り、ベルの方へと視線を戻した。

「ベル、貴公はどの武器を選ぶ？　ナイフか、直剣か、槍か、斧か、槌か、あるいは弓か。大剣のような大きな得物でも構わんぞ。【ステイタス】があればある程度の武器は使える筈だからな」

「えっと……う～ん……どうしましょう」

ベルはその提案に頭を悩ませた。ヴィンセントの提案は実に魅力的だが、しかしベル

はまだダンジョンで戦闘をした経験がない。そのため、どんな武器を選んでいいのかも分からないのである。

「あの、ヴィンセントさんは僕にはどんな武器が一番合うと思いますか?」

「そうさな。まず貴公が新米であるということを考慮すれば扱いやすいナイフか直剣――それもショートソードくらいの長さが好ましいか。小柄な体格を利用してモンスターを翻弄、そして隙を狙うという戦い方が無難なところだろう。槍もいいがあれは存外に扱いが難しい。慣れるまでには時間が必要だ」

「なるほど……じゃあ――」

そう言ってベルが手に取ったのはごく普通のナイフだ。黒塗りのグリップの飾り気のない無骨なデザインで、鈍色の刀身は魔石灯の光を受けて輝いている。その値段は鞘を含めて九一〇〇ヴァリスとなっていた。

「どうでしょうか?」

「悪くないな。それでいいのか?」

その言葉にベルは笑みと共に頷いた。するとヴィンセントは「少し待っていろ」と一言を残して姿を消し、やがて一本の直剣を手に戻ってきた。厚めの刀身で、かつそれなりの長さもあるその剣は、試しに握ってみたベルの手に馴染んだ。

「ヴィンセントさん、この剣は……?」

「ダンジョンでは何が起こるか分からない、予備の武器も必要となる場合もあるだろう。それに、ナイフでは歯が立たない相手と戦う可能性もあるだろうしな」
「た、確かにそうですね。それに剣一本くらいならそんなに重くなさそう……」
　ナイフと直剣、二つの武器をベルは交互に見つめた。どちらも彼のような新米冒険者が使うには十分な代物で、ダンジョンでも上層と呼ばれる辺りでなら問題なく通用する程だ。
　頑張らなくてはヴィンセントさんに面目が立たないな、と。その後二つの武器に加えて、胸部を守るブレストプレートやサポーターといった防具を祝いの品として受け取ったベルは、内心でそう決意した。

「合計四三〇〇〇ヴァリスか、案外安く済むものだな」
「ええ……僕からすれば全然安くないと思うんですけど」

「安いさ。私なら一日あればその百倍は余裕で稼げる。それに第一級冒険者の装備など優に一億ヴァリスを越えるぞ？」

「ひゃ、百倍と一億ヴァリスって……もうなんだか気が遠くなりそうです……」

第３話

「ヴィンセントさんヴィンセントさん！　漸くエイナさんから許可を貰えましたよ！　１階層なら行っていいって！　これで僕もダンジョンに行けるんです！　やったぁ～!!」

興奮冷めやらぬといった様子で部屋に飛び込んできたベルに、ヴィンセントは読んでいた本から顔を上げ、やれやれとばかりに息をついた。彼はパタンと本を閉じて立ち上がると、肩で息をするベルの頭に軽く手刀を落とした。

「気持ちは分かるが少し落ち着け。浮かれた状態でダンジョンへ行っても痛い目を見るだけだ」

「痛っ……!?　はっ、はいぃ……！」

そんな言葉にベルは涙目になりながら頷いた。一方のヴィンセントはそんな彼を見て、無理もないかもしれんと内心で溜す。

ベルが冒険者となって今日で五日が経過する。しかし、これまで彼がやっていたのは担当アドバイザーのエイナと共に、ダンジョンについて勉強することであり、実際に挑むことは彼女から止められていたこともあって出来なかったのだ。ダンジョンに挑め

るのに挑めない、英雄を目指すベルにはそれがどれだけもどかしいことであったかは想像するに難くない。

それが今日漸く許可が下りたともなれば、先程の興奮も仕方のないことだろう。例え1階層だけでも念願のダンジョンに挑める、お預けを受け続けたベルにはこの上ないご褒美だった。

「少し準備をする。ベル、貴公も準備は必要だろう？　終わり次第、もう一度ここに来てくれ」

「は、はい！」

バタバタと出ていったベルを見送り、ヴィンセントもダンジョンへ行くための準備を始める。いつもの黒いコートに袖を通し、同じように黒の帽子を深く被る。そして腰のポーチには回復薬（ポーション）系を――今回はベルという初めてダンジョンに挑む者がいるためいつもよりも多めに――詰めれば大方の支度は完了だ。

「まぁ、上層ならここまで念を入れる必要はなさそうだがな」

ポツリと呟いたヴィンセントは再び本を手に取った。そのおよそ十分後、先日買い揃えた装備を身に付けたベルが、バタバタと足音を立てて姿を現す。要所をサポーターで守り、腰にナイフとショートソードを下げるその出で立ちは、誰が見ても立派な冒険者のそれだ。

「お待たせしました！」
「よし、では行くか」
　歩き始める二人。向かう先はダンジョンへと通じるバベル――ではなくリビング。そこのソファーで昼食の食休みをしていたヘスティアの下である。
「神様、神様！」
「ん～？　どうしたんだいベル君？」
「僕、漸くダンジョンに行けるようになったんです！　だから今からヴィンセントさんと一緒に行って、その、えっと……頑張ります！」
　目を輝かせ、ヘスティアにそう宣言するベル。そんな彼にヘスティアはふっと微笑みを浮かべると、すぐに真剣な表情となって彼を見つめた。
「いいかいベル君、ヴィンセント君がいるから大丈夫だとは思うけど、無茶だけはしちゃ駄目だぜ？　ダンジョンってところはきっと、君やボクが思っているよりもずっと危ないところだろうからね。だから無茶だけはしないで、絶対に帰ってきてくれよ。君は……ボクの大切な眷族（かぞく）なんだから」
「っ……はいっ！」
　ヘスティアの言葉を胸に刻み、ベルは力強く頷いた。
　家族を失う悲しみはベルも知っている。育ての親である祖父が亡くなったと聞いた

とき、彼は何度も何度も涙を流した。悲しみに明け暮れ、生きる気力もなくしかけた程である。そんな思いを、ベルは敬愛する主神に抱かせたくはなかった。

「神様、僕は必ず帰ります」

ヘスティアと人形に見送られて本拠地（ホーム）を出たベルは、小さな声で新たに誓った。

▽△▽△

「ここが……オラリオの地下迷宮（ダンジョン）……」

地下迷宮1階層。『始まりの道』と呼ばれる大通路に立ったベルは、目の前に広がる薄青色に染まった壁面と天井を見て呆然と呟いた。長く、広く、そして複雑なこのダンジョンに自分は漸くやって来たのだ、と。そう考えるだけでにやけそうになる頬をベルは必死で我慢する。

「さて、まずはモンスターを見つけるぞ」

そう言って歩き始めたヴィンセントの背中を、我に返ったベルは駆け足で追いかける。1階層のマップは全て記憶しているのか、ヴィンセントの動きには迷いというものが見られない。

数分後、辿り着いたルームでは数体のモンスターが『グルルル……』と唸り声を上げ

ていた。鋭い牙と爪を持つ犬頭のモンスター、『コボルト』である。エイナの指導のお陰か、ベルにはすぐにその名前が分かった。

「数は三、初陣にはちょうどいいな。ベル、いけるか？」

「……はい！」

深呼吸をして心を落ち着かせ、ベルはゆっくりと腰の後ろからナイフを引き抜いた。二〇Ｃ（セルチ）程の刀身が光を受けてキラリと輝く。ベルは腰を落とし、低い姿勢のまま一体のコボルトへと気配を消したまま近付いていく。

全てはヴィンセントの教えの通りに。

コボルトが振り返った瞬間、ベルはその喉笛へナイフを突き立てた。そしてそのまま体重を乗せ、コボルトを思い切り地面に押し倒した。

『――ッ！　――――ッ!!』

「くっ……！　このぉ……！」

バタバタと声を出す代わりに暴れ回るコボルト。力負けしそうになったベルは喉に刺さったままのナイフを両手で引き抜き、今度は眉間目掛けて力いっぱい振り下ろした。手に伝わる生々しい感触と共に息絶えるコボルト、しかしベルが安心する暇はなかった。

『『グルァアアアア!!』』

ルームにいた他のコボルト達が目を血走らせて襲い掛かってくる姿に、ベルは「うわぁぁぁ!?」と驚きを露にした。体を反らし、迫る爪をギリギリで避けることに成功するが、勢いのあまり地面をゴロゴロと転がってしまう。しかしベルは素早く立ち上がるとナイフを構え、キッとコボルトを睨んだ。

『ガルルルッ!』

「負ける……かぁ!」

振り下ろされた一撃を体を捻ることで躱し、戻る勢いを利用してコボルトの胸をナイフで斬り裂く。怯んだことで生まれる隙、そこをベルは見逃さず、コボルトの顔面へと握り締めた拳を全力で振り抜いた。

「ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」

『グガァ!?』

殴られたコボルトは綺麗に吹っ飛び、勢いのまま地面を滑っていく。そんな相手にベルはすかさず追い討ちを仕掛けようとする——が、邪魔をするように三体目のコボルトが彼の前に立ち塞がった。思わぬ事態にベルは足を止める。

だがそれも一瞬のこと。短く息を吐いてから膝を曲げ、バネのように飛び出したベルはコボルトに肉薄し、一体目と同じように喉元を一撃で穿った。更にそのまま刺さったナイフを振り上げ、返り血が降り掛かるのもお構い無しにコボルトの顔面をバッサリと

両断する。崩れ落ちる頭の裂けたコボルトの死体、ベルはそれに目もくれず、最後に残った一体に意識を向けた。

『グルル……グルルルル……！』

「はぁ……はぁ……！　お前で……最後だっ！」

鮮血の伝うナイフの切っ先をコボルトに向け、ベルは地面を蹴った。息が切れているのも気にせず細かくステップを踏んでコボルトを翻弄し、腕や胴体へ確実に傷を負わせていく。時折繰り出されるコボルトの攻撃も、ベルは躱すか腕に装備されたサポーターで防いでいた。

その動きはまだ未熟だが初めてダンジョンに挑む者のそれではない。最後の一体だからこそ確実に仕留める、そんな意志が彼の挙動から見て取れるのだ。恐らく誰が見ても彼のことを、まだ冒険者となって五日目の新米だとは思わないだろう。

隙をついてコボルトを蹴り飛ばしたベル。彼はそんなコボルトの掌をナイフで地面と縫い合わせると、馬乗りのままで下げていたショートソードをゆっくりと抜き放った。輝く銀色の刀身に歪んだコボルトの表情が反射する。

そして――ベルはそれをコボルトの胸に突き立てた。

「はぁ……はぁ……」

『ガッ……ァ……！』

急所たる胸の魔石を砕き、無事に最後のコボルトを打ち倒したベル。立ち上がり、血を払ったナイフとショートソードを鞘に納めて息を整えた彼は、ダンジョンに行けなかった間稽古をつけてくれていた師匠の元へと駆け寄った。

「ヴィンセントさん、どうでしたか……？」

「初めてにしては上出来だ。よくやったな、ベル」

ヴィンセントはそう言いながらポンポンとベルの頭に手を置いた。手解きを受けた師より及第点を貰えたことで、ベルもまた破顔してほっと息をついた。

「良かった……。二体同時は驚きましたけど、ヴィンセントさんに比べたら動きも遅いし、どうってことなかったです」

「頼もしいな。しかしベル、貴公は今三体のコボルトを殺した訳だが、”敵を殺した”という今の感覚には早く慣れることだ。ダンジョンでは一々気にしている余裕はないぞ。冒険者とはモンスターを狩る存在、故にそういうものだと割り切る他にないのだから」

そんな言葉にベルは先程まで得物を握っていた右手に視線を落とした。その手にはまだコボルトを刺した時の肉を抉る感触が残っており、また血の匂いがこびりついている。僅かに震えるその手を握り締め、そして振り返れば地面に転がるコボルトの二度と光が宿ることのない目と、彼の揺れる瞳がピタリと合った。

沸き上がる罪悪感に似た感情を、ベルはこれがヴィンセントの言う”慣れるべきもの

”なのだと理解した。目を閉じ、すぅと大きく息を吸って深呼吸を繰り返す。ざわめく心を切り替え、感情を制御し、そして目の前の先達を静かに見据える。

「……はいっ！」

こくりと大きく頷く頃には、その手の震えは止まっていた。迷いの消えたベルの表情にヴィンセントは満足そうに頬を緩める――直後、ピキピキと卵の殻を割るような音が辺りに木霊した。

「な、なんですか……!?」

「ダンジョンがモンスターを産む音だ。ベル、後ろを見てみろ」

ヴィンセントの言葉に慌てて振り返るベル。そこで彼が見たのはモンスターが産まれ落ちる瞬間だった。ダンジョンの壁がひび割れ、そこから緑色の小型モンスター、『ゴブリン』が産声が響き渡る。

ダンジョンはモンスターの母胎である。

エイナとの『勉強会』で知識としては理解していたベルだが、実際にその場を目の当たりにすると思わず目を見開いて動きを止めた。産まれたゴブリンの数は四、威嚇をしているのか、『ウウウゥ……』と唸り声を上げている。それでもゆっくりと、だが確実にジリジリと距離を詰めてくる様子に、ベルははっとなってすぐさまナイフを抜いた。

「連戦だな。ベル、焦ることはない。やり方はさっきと同じだ。一体ずつ確実に、複数を

同時に相手することだけは注意しろ」

「っ……りょ、了解です！」

ベルはパンと頬を叩き、疲れた体に鞭を打ってゴブリン達目掛けて勢いよく飛び出した。そんな彼にゴブリン達も殺意を滚らせ、鋭い爪を天へと掲げてベルへと走り始める。

――英雄を目指すならこのくらいの障害は乗り越えて見せろ

内心で己をそう奮い立たせ、ベルはナイフを握る手に力を込めた。

第４話

「結局、３階層まで行っちゃいましたね」

ダンジョンから帰還しバベルの地下一階へ繋がる階段を歩きながら、ベルはヴィンセントに向かってそう苦笑した。アドバイザーであるエイナからの忠告は無視してしまうことになり、かつ今までにないくらい心身共にボロボロとなったが、しかし彼の心は溢れんばかりの喜びで満ちていた。

３階層で現れたモンスターは１階層で現れたものよりも強かった。同じ『コボルト』でもその違いは明らかである程に。当然ベルは傷も負ったし、危うく大怪我をする寸前まで追い詰められたこともあった。それでも自力でそれらを切り抜け、ヴィンセントから回復薬（ポーション）以外の手助けを一度も借りることなく生き残ったのだから、嬉しくもなれば自信がつくのも当然だろう。

バベル内の施設で汚れを落とした二人は、太陽が沈んで暗くなったオラリオの街を歩いていく。夜の帳が下りたことで酒場の類いが開き出したオラリオの街は、昼間とはまた違った顔を見せており、それにベルは目を輝かせて頻りに辺りを見回した。

「わぁ……！　夜になっても賑やかですね！」

「大通りは、な。ここから少し外れれば夜らしく静かになる」
魔石灯の明かりに照らされながら、二人は他愛のない会話と共に進んでいく。やがて彼等が辿り着いたのは『ギルド』の本部である白い柱で作られた万神(パンテオン)殿だ。そこの入り口をくぐったベルは魔石の入った麻袋を片手に換金所へと足を運ぶ。
「すみません、換金をお願いします」
「分かりました。え～……はい、四八〇〇ヴァリスになります」
窓口の職員から渡されたヴァリスを受け取り、ベルは上機嫌でヴィンセントの下に戻っていく。初めてダンジョンに潜り、そして初めて自分で稼いだヴァリスである。その重みはこれまで使っていたヴァリスとは大違いで、無駄遣いしないよう大切に使おうとベルは心に決めた。
そんな軽い足取りで万神(パンテオン)殿を出ていこうとしたベルに近付く人影が一つ。
「あれ、ベル君？」
「エ、エイナさん？」
ビクッと、突如現れたハーフエルフの女性にベルの肩が跳ねる。それと同時に嫌な冷や汗がつぅと彼の頬を伝った。
彼女と交わした1階層までしか行かないと約束。
それを破ったことに対する罪悪感が、本人を目の前にして一気にベルへと襲い掛かっ

てくる。
「こんな時間にギルドに来るなんて、どうしたの？　何かあった？」
「いえ、その……魔石の換金をしに来た……んです……けど……」
だんだんと小さくなっていくベルの声に反比例して、エイナの纏う雰囲気は徐々にその威圧感を増していく。まずい、その三文字が彼の頭を埋め尽くした。
「へぇ～……こんな遅い時間に魔石の換金に来たんだ」
「は……はいぃ……」
「それで、何ヴァリスになったの？」
駄目だ、バレている。怒気を放ちながら笑うエイナからそれを察したベルは、最早曖昧な笑みを浮かべて誤魔化すことしか出来ない。しかし、そんな真似をこの仕事熱心なハーフエルフが見逃す筈もなく、無言の脅迫にベルは呆気なく白状した。
「よ、四八〇〇ヴァリスです……」
「ふ～ん……四八〇〇ヴァリスかぁ。冒険者になってまだ五日で、今日初めてダンジョンに挑んだ人が四八〇〇ヴァリスもねぇ……」
ふふふふふ、と不気味に笑うエイナにベルは思わず「ひっ……!?」と短く悲鳴を上げた。
一般的にＬｖ．１冒険者が五人集まって一日に稼げる金額は、平均で二五〇〇ヴァ

リスと言われている。つまり一人当たりの分け前は五〇〇〇ヴァリス、しかもこの額は上層の中でも下の階層――6階層以下で稼いだ場合がほとんどだ。凶悪なモンスターが出現する6階層以下でも、パーティを組むことで安全性を確保しているのである。

それを考慮すればダンジョン初日のベルが3階層以上で、それもたった一人で四八〇〇ヴァリスも稼いだことが、どれだけ常識外れなことであるかが分かるだろう。勿論、ベル本人にその自覚はないが。

「……ベル君、正直に答えて。今日、君は何階層まで行ったの？」

「……3階層、です」

ベルが答えるや否や、大きな溜め息が辺りに木霊した。額を手で覆い、天を仰ぐエイナ。そんな彼女にベルは思わず身を竦めて目を閉じた。間もなくエイナの雷が落ちるであろうと、この場に居合わせた誰もが予想した。

しかし、それは現れた一人の男によって不発に終わることとなる。

「ベル、何かあったか？」

「え……あ、ヴィンセントさん!?」

黒い装束をはためかせ、ベルとエイナの下へと近付いてくるヴィンセント。そんな彼の姿にベルは安堵の息を漏らし、対するエイナはビックネームの予期せぬいきなりの登場に「ふぇ……!?」と戸惑いの声を溢した。

「一体何をして……む、貴公はチュール嬢か。どうかしたのか……と……あぁ、なるほどな」

二人の様子を見たヴィンセントは、やがて何やら納得したかのようにこくこくと頷いた。そして、彼はエイナに向かって軽く頭を下げる。

「チュール嬢、ベルが３階層まで行ったのは私も同伴していたからだ。どうかその怒りは静めてもらいたい」

「ロ、ローズ氏も一緒にって……ベル君、それは本当？」

「は、はいっ！」

ブンブンと首を大きく縦に振ったベルをエイナはじっと見つめるが、彼が嘘をつけるような性格でないことは知り合って数日の彼女でも理解していた。やがてエイナは一つ息をつくとベルに向かってずいっと顔を寄せた。二人の距離が縮まる。

「ベル君、今回はローズ氏が一緒だったみたいだから何も言わないけど、一人でダンジョンに行くときは絶対に１階層だけだからね？　仮にベル君の実力が３階層で通じたとしても、これだけは絶対に守ってほしいな」

――冒険者は冒険しちゃいけないんだから

それは普段からエイナが口にしている警句のようなものだ。常に死と隣り合わせの冒険者だからこそ、死ぬことのないように無茶をしてはいけない。冒険者の死というも

のに関わることの多い、ギルドのアドバイザーだからこそ言える言葉であった。そして今日、身を以てダンジョンの恐ろしさを知ったベルは、その言葉を改めて胸に刻み込む。

「まぁなんだかお説教みたいになっちゃったけど、ベル君が無事に戻ってきてくれて良かったよ。今日は頑張って疲れただろうから、しっかり休んでね」

「エイナさん……ごめんなさい。それと、ありがとうございました！」

「チュール嬢、ベルには私からも言っておく。では、我々はこれで失礼する」

ヴィンセントは最後にすっと頭を下げ、コートを翻して去っていく。ベルもまたそれに倣い、エイナに礼をしてから踵を返してヴィンセントの後ろに続いていった。そんな二人の背中を見送ったエイナは、二人が完全に見えなくなったことを確認してからくすりと表情を綻ばせる。

「雰囲気とか外見とか全然違うのに……仲のいい兄弟みたいだったなぁ」

いや、親子だろうか。そんなことをぼんやりと考えながら、エイナは残った仕事を片付けるべく本部の奥へと足を運んだ。

△▽△▽

ギルドの本部から離れ、西地区へと続く通りを進むヴィンセントとベル。そんな最

中、ベルは麻袋から今日の収入である四八〇〇ヴァリスの半分、二四〇〇ヴァリスを取り出すと、それをヴィンセントに向かって差し出した。
「ヴィンセントさん、今日はありがとうございました。これ、良かったら……」
「いや、私と分ける必要はない。そのヴァリスが貴公が稼いだものだからな。貯めて装備を整えるも、美味い飯を食べるも、好きにすればいい」
それと、とヴィンセントは言葉を区切る。
「こんなところで金を出すな。薄汚い盗人に狙われているとも限らん」
「あっ……す、すみません」
ベルははっとなってヴァリスを麻袋に戻し、かつその袋を大切そうに握り締める。そんな姿にヴィンセントは苦笑を溢し、「私がいる以上盗みなどさせぬよ」と彼の頭をポンポンと叩いた。その後も二人はとりとめもない会話をしつつ、人々の流れに身を任せていく。
そして彼等が本拠地（ホーム）である『竈火の夢』のある西地区に到着した、そんな時だ。

ベルとヴィンセントの視界を、薄緑色の髪を持つエルフが横切った。

「リュー」

「……ヴィンス？」

名前を呼ばれて足を止めたエルフ――リュー・リオンは抱えた荷物を落とさぬよう、ゆっくりとヴィンセントの方へと振り向いた。そしてヴィンセントが突然見知らぬ女性に声を掛けたと思ったベルは、小さく「ちょっ……!?」と困惑の声を漏らして彼を見上げる。

「久しぶりだな。今は買い出しか？」

「はい。そういう貴方はダンジョンの帰りのようだ。となると……隣の彼が例の新人ですか」

「へっ!?」

ヴィンセントに向けられていたリューの視線が移動したことで、ベルはすっとんきょうな声を上げた。例の新人、という彼女の言葉がぐるぐると頭を回る。

「あの、えっ、なんで……？」

「店に来た冒険者の方々が噂していました。白髪で兎のような少年が【血の申し子（ブラッドボーン）】の【ヘスティア・ファミリア】に入ったらしい、と。数ある【ファミリア】の中からあのヴィンスの率いる【ヘスティア・ファミリア】を選んだ物好きとして、貴方のことは話題となっているようです」

語られたリューの言葉にベルは困り顔のまま「なんですかそれ……」と呟く。知らず

知らずのうちに自分のことが噂になっていたという事実に、ベルは驚きを隠すことが出来なかった。

しかしオラリオの冒険者達がベルに対して興味を抱くのは当然のことである。ヴィンセントというオラリオで最も異常にして異質な冒険者が束ねる【ファミリア】など、気味悪がって頼まれても入ろうとする者はいない。いくら主神であるヘスティアが優れた神格者であっても、ヴィンセント以外の眷族がいないことがその証拠だ。

そんな【ファミリア】に初めて入ったという者が現れたとなれば、一体何者なのかと気になってしまうのはごく自然なことと言えるだろう。そしてそんなベルの存在には冒険者だけでなく、一部の神さえも興味を示していた。

「気苦労もあるかと思いますが、頑張ってください」

「あ、ありがとうございます。あっ、僕はベル・クラネルと言います。えっと……リューさん？　で、合ってますか？」

「ええ、リュー・リオンです。宜しくお願いします、クラネルさん」

お互いにペコリと頭を下げるリューとベル。しかしリューは頭を上げるや否や踵を返し、スタスタと先に歩き始めてしまった。そして最後に、怪訝そうな表情のベルと普

段通りのヴィンセントに向かって振り返り、静かに笑った。
「すみませんがおつかいの途中なので失礼します。ヴィンス、クラネルさん、機会があれば『豊饒の女主人』に来てください。私で良ければ話し相手くらいにはなりましょう」
そう言い残し、リューの背中は完全に人混みへと消えてしまった。取り残されたベルがその場に立ち尽くす一方、ヴィンセントは何も言わずにただふっと微笑を浮かべる。
「……また、顔を出すとするか」
「？　ヴィンセントさん？」
「なんでもない。さて……ベル、突っ立っていては邪魔になる。早く帰るぞ」
「へっ!?　ちょっ、待ってくださいよ～！」
何も分からないままベルはヴィンセントの背中を追いかける。人々の間を縫うように歩く彼の足取りは先程よりもほんの少しだけ軽くなっていた。

▽△▽△

「おかえりぃぃぃぃぃぃぃ!!」
「うわぁあああああああ!?　か、神様っ!?」
『竈火の夢』本邸の扉を開けた瞬間に飛び出してきた黒いツインテール。それを正面

から受け止めたベルは完全な不意討ちだったこともあって、石畳に背中から思い切り倒れ込んでしまった。【ステイタス】のお陰で怪我こそないものの衝撃は殺すことは出来ず、結果として彼は飛び出してきたヘスティアを胸に抱いたまま、「うぉぉぉ……！」と悶絶することとなる。

「どうだった!?　無事に終わったかい!?　怪我はないかい!?　ベル君に何かあればボクはショックで死んでしまうよ～！」

「か、神様……！　ちょっ……離れ……どいてくださいぃ……！　ぁあああああ!?」

「ど、どうしたんだベル君!?　まさか、どこか痛いところでもあるのかい!?　た、大変だよヴィンセント君！　早く万能薬（エリクサー）を持ってきておくれ！」

「いや違っ……！　ひいいいいいいいいいい!?　誰か、助け……！」

ヘスティアは抱きついた体勢のままペタペタとベルの体を触り始める。そんな行為に女性への免疫のない彼が耐えられる筈もなく、羞恥のあまりその顔をトマトのように赤く染めた。逃げ出そうにも力ずくとなればヘスティアが怪我をするかもしれず、ただ甘んじて受け入れることしか出来ない。ある意味で今の彼はダンジョンにいた時よりも追い詰められていた。

そんなベルが助けを求めたのは当然ヴィンセントである。そして助けを乞われてはヴィンセントも断る訳にはいかない。彼は溜め息をつきながらベルにくっつくヘス

ティアに近付き、彼女の腹に腕を回して一気に引き剥がした。そのまま彼女を米俵のように担ぎ上げる。

「わっ!?　ちょ、ヴィンセント君！　何をするんだ！　ベル君は怪我をしているかもしれないんだよ！」

「していれば私がとっくに治療している。それよりも少し落ち着け」

ウガ～！　と怒りを露にし、バタバタと手足を動かすヘスティアは、そのままヴィンセントによって連れていかれる。一方、拘束より解放されたベルは石畳から身を起こすと、そのまま荒れる息をゆっくりと整え始めた。そんな彼に、今まで傍観に徹していた人形が歩み寄る。

「おかえりなさい、クラネル様。ご無事のようで何よりです」

「あ……ありがとうございます、マリーさん」

差し出された人形の手を掴み、ゆっくりと立ち上がる。その際に感じた無機質特有の冷たさに、ベルは改めて目の前で微笑む彼女は本当に人形なのだと実感する。

「初めてのダンジョンは如何でしたか?」

「う～ん……。正直、思ってたよりもずっと凄かったです。モンスターもそうなんですけど、迷路みたいな階層とか、モンスターの産まれる瞬間とか、ダンジョンの持ってる全部の要素に圧倒されたっていうか。ヴィンセントさんがいてくれたから良かった

ですけど、一人だったらどうなってたか……」
人形に話しながらベルは一人でダンジョンに挑む自分を想像した。
何が起こるか分からない地下迷宮で、頼れるものは自分の腕と知識、そして勘のみ。警戒を怠ることは一秒も許されず、常に神経を研ぎ澄まし続けなければならない。
そんな状態にまだ未熟な自分が置かれたとしたら？
「（うん、間違いなく死ぬ）」
子供でも分かる簡単な答えにベルは嘆息した。どうやら彼の目指す英雄（りそう）への道は、まだまだ長く険しいようだ。
「頑張らないといけませんね。今よりももっと強くなって、一人でも戦えるようにならないと」
ベルは自分に言い聞かせるように呟く。深紅（ルベライト）の瞳に確かな意志を宿し、彼は人形と共に『竈火の夢』本邸の扉をくぐった。

ベル・クラネル

Lv.1

力　：I　61→94

耐久：I　80→H　111

器用：I　73→H　107

敏捷：I　76→H　105

魔力：I　0

《魔法》

【】

《スキル》

【】

第５話

キィン、と。まだ太陽の昇り切らない晴天の下で、『竈火の夢』の庭に甲高い金属音が木霊した。

「はぁっ！」

右手に握られたナイフを構え、短く息を吐きながら振り抜くベル。しかしその刃は相手に届くことはなく、またしても空を切るだけに終わった。距離にして僅か数Ｍ（メトル）、しかしたったそれだけの距離が今はあまりにも遠い。

「どうした、終わりか？」

「まだまだ……いきます！」

バベルで購入したロングソードを片手に挑発するヴィンセントへ、ベルは再び地を蹴って前に飛び出した。二度、三度と瞬くナイフの一撃は躱されるかロングソードによって防がれる。

だがこの程度でベルは焦らない。【ステイタス】や技量面でヴィンセントに敵わないことは承知の上だ。また今行われているのは実戦ではなく訓練であり、彼を必ずしも打ち負かさねばならないという訳でもない。持てる力を全て使ってヴィンセントにぶつ

かる、それがベルのやるべきことなのである。

「っ……ここだ！」

剣撃の間を通すようにベルが蹴りを放つ。が、それは難なくヴィンセントの左手によって受け止められ、次の瞬間にはベルはその左手一本によって放り投げられていた。視界が反転し、地面に背中から落下した彼は「がはっ……！」と肺の空気を吐き出す。

「今の蹴りはいい一撃だ。スピードさえあれば大抵の相手には通用するだろう」

「げほげほっ……！　簡単に防がれちゃあんまり実感は出来ませんけどね……」

よろよろと立ち上がりながらベルは苦笑を溢す。そして彼はナイフを左手に持ち変えると、腰に下げられたショートソードを引き抜いた。その切っ先をヴィンセントへ向け、逆手で握られたナイフを持ち上げる。

「もう一回、お願いします」

「ああ。掛かってくるといい」

深紅（ルベライト）の瞳に闘志を滾らせ、ベルはヴィンセントに何度も肉薄する。得物が違えば間合いや振り方も当然異なってくるのだが、ベルはショートソードをナイフと同様、まだ拙さが残る部分がありながらも上手く使いこなしている。また、逆手のナイフを使った肉弾戦も考えているのか、時折そういった素振りを見せることもあった。

「貴公の一撃は軽い。真っ正面から当たろうとするな。足を動かして敵の側面に回り込

め。翻弄し、隙を見極めろ」
「はいっ！」
　応酬の最中にもヴィンセントの指摘はやって来る。自分から反撃せず、ベルの動きを観察していたからこそ出来ることだ。そしてベルもその言葉に従い、左右へのステップを動きに組み込み始めた。キィン、キィンと金属音が鳴り響く。
　全力で食らいつくベルと、そんな彼を翻弄するヴィンセント。二人の眷族（かぞく）を庭の外から眺めるヘスティアはその頬を緩ませつつ、紅茶の入った美しいカップをゆっくりと口に運んだ。その眼差しは優しく、そして温かい。
「……どうかされましたか？」
「ふふっ。いやね、子供達が頑張る姿ってのはいいものだなぁって思ってさ。ヴィンセント君もベル君も、凄く一生懸命なんだから」
　訓練を続ける二人へと慈愛に満ちた視線を向けつつ、ヘスティアは人形と問いにそう答えた。嬉しくて嬉しくて仕方がない、今の彼女からはそんな雰囲気が漂っている。
「狩人様はクラネル様を随分と気に入られているようですね」
「うん。やっぱり自分以外で初めての眷族だからなのかな。正直、ボクも彼がここまで面倒を見てくれるとは思わなかったよ」
　それはヘスティアにとって嬉しい誤算だった。元々、外見に反して気遣いの出来る

ヴィンセントなら新人のベルを邪険に扱うような真似はしないと思っていたが、装備を揃えて一緒に特訓をする程の関係に一週間足らずでなるとは、流石のヘスティアにも予想外のことだったのだ。勿論、それは彼女にとって望ましいことであるので素直に喜んではいるのだが。

「やっぱり、子供達は変わるものなんだね。不変のボク達とは大違いだ……」

感慨深げに呟いたヘスティアの脳裏に浮かぶのは今から十数年前、【ファミリア】を結成したばかりの頃のヴィンセントだ。無口で、無愛想で、何日もダンジョンに潜って帰ってこなかった日もあれば、他の【ファミリア】の冒険者と問題を起こすことも多々あった。Ｌｖ．１の頃に絡んできた複数の第三級冒険者（Ｌｖ．２）を一人で叩きのめした、自身から盗みを行った犯人をその場で半殺しにした等々。彼の起こした騒動では度々、オラリオ全体がそれなりの騒ぎとなった程だ。

返り血にまみれた”暴力”の体現。

ヴィンセントが神々より【血の申し子（ブラッドボーン）】と言われた由縁である。

そんな、所謂”問題児”の彼が、今は新人冒険者の指導を行っている。更にその新人から懐かれ、尊敬の念を抱かれているともなれば、彼の主神としてこれ以上に嬉しいことはない。子供の確かな成長を感じるヘスティアだった。

そんな一柱と人形が静かに見守る中、今度は攻守が入れ替わってヴィンセントがベル

を攻撃し始めるようになった。Ｌｖ．１のベルでも反応出来るよう、抑えられた力と速さで振るわれるロングソードを彼は懸命に避け、両手の得物で捌いていく。
「……少し上げるぞ。ついてこい」
「はいっ……って、うわわわっ!?」
ギンギンギンギン、と先程よりも金属音の響く間隔が短くなり、ベルの表情が驚愕でいっぱいになる。その直後に突き刺さる鋭い蹴り。避けることも叶わず直撃を受けたベルの体は宙を舞い、やがて数Ｍ（メドル）程離れた地点まで吹っ飛ばされていった。
「がっ……！　ぐぅ……！」
「ふむ、今のスピードでは無理か。すまんなベル、少し加減を誤ったようだ」
「いえ……そのままで、もう一度お願いします！」
無理と言われたことが悔しかったのか、ベルはヴィンセントの言葉に首を横に振った。この程度で挫けていられないと立ち上がる彼の姿に、ヴィンセントはくつくつと笑いを押し殺し、ヘスティアが「やりすぎちゃ駄目だからね～！」と外から注意を促した。

その後、ベルが地に伏せた回数は過去最高となり、午後からエイナとの『勉強会』へ出掛けていく彼の足取りは、端から見ても不安を煽られる程であったという。

▽△▽△

ベルがエイナと『勉強会』を行っているそんな時、ヴィンセントは一人『大樹の迷宮』と呼ばれる中層を彷徨いていた。青い光を放つ苔がそこら中に繁茂する、まるで大樹の中を思わせる地面を彼は踏み締め、時折襲い来るモンスターを手にした《ノコギリ鉈》で手際良く解体していく。

「(……思えば、一人でダンジョンに行くのも久しいな)」

解体したモンスターの残した魔石を回収しながら、ヴィンセントはふとベルがやって来てからの日々を思い出す。純粋無垢で一途、小さく臆病でお世辞にも冒険者には向かないと感じていた少年が、しかし確固たる勇気を持って懸命に戦う姿に、ヴィンセントは密かな期待を寄せていた。

それこそ、覚悟さえあれば自らにも追い付くかもしれないと、かつて『夢』の中で幾人もの狩人を見てきた彼が思う程に。

「(元来『生まれるべきではなかった』と蔑まれた身ではあるが……存外、『助言者』として動くのも悪くない。ベル(あれ)は原石、磨き方次第で石ころにも宝石にもなる)」

そんな独り言を内心で溢し、ヴィンセントは宛もなくこの２４階層を進んでいく。ただ、その翡翠色の瞳だけは忙しくダンジョンの壁や地面へと向けられていた。

彼の目的はこの『大樹の迷宮』に自生する回復薬（ポーション）の材料となる薬草類、そして宝石樹と呼ばれる文字通り宝石を実として宿す樹だ。前者は【ディアンケヒト・ファミリア】や【ミアハ・ファミリア】のような医療系【ファミリア】に、後者は宝石店などに、どちらも然るべき組織に渡せば高値で取引される物なのである。

そして更にもう一つ――欲求不満（フラストレーション）の解消だ。

ここ数日、ベルの特訓やダンジョン攻略に付き合ってばかりだったヴィンセントは、”狩り”に対する欲求が大きく膨れ上がっていた。しかし彼が満足するようなこととなると、ダンジョンの深層で一日中戦い続けるくらいのことはしなければならず、故に便利な素材も手に入り、かつ出現するモンスターもまぁまぁ強いこの中層で妥協したという訳だ。

『ガァァァ！』

『グルルルル……！』

『ヴヴヴ……！』

ただ、そのまぁまぁ強いという評価はあくまでヴィンセントの主観だ。今現れた『ホブ・ゴブリン』、『リザードマン』、『デッドリー・ホーネット』といったモンスターは、一般的に見れば十分強いモンスターの部類に入る。特にデッドリー・ホーネットは『上級者殺し（ハイ・キラービー）』とも呼ばれ、第二級冒険者であっても命を落とすこともある凶悪なモンス

ターだ。
　そんなモンスター達がおよそ十、ヴィンセントの前に立ちはだかっている。
「ほぉ……悪くない」
　ニヤリと獰猛な笑みを浮かべ、ヴィンセントはノコギリ鉈を構えた。空いた左手は腰のホルスター、そこに掛けられていた《エヴェリン》を掴む。弾丸は装填済みで引き金を引けばすぐにでも水銀弾が放たれるだろう。
　唸るモンスター達とヴィンセント、先に動いたのはヴィンセントの方だ。大きく一歩を踏み出しノコギリ鉈を真横に一閃、それだけで最寄りにいたリザードマンの腹部が引き裂かれた。ブチブチと肉が千切れる音が響き、傷口からは鮮血が飛散する。
『ギャッ!?』
　リザードマンから短い悲鳴が上がるがヴィンセントはこれを無視し、更にそこから流れるような連撃を叩き込む。ノコギリの特徴であるギザギザの刃は硬い鱗をもろともせず、ものの数秒でリザードマンを血にまみれた物言わぬオブジェに変えた。崩れ落ちる死体をヴィンセントは踏みつけ、ギロリとその鋭い眼光でモンスターを睨む。
　それが合図だった。弾かれたように動き出したモンスター達が、一斉にヴィンセントへと襲い掛かった。
「クッ……クハハハ……!　そうだ、その調子だ。さぁ殺せ、貴様らの持つ全てで以てこ

の私を殺して見せろ。だがその代わり――」

ガシャン、と音を立てたノコギリ鉈が展開し、折り畳まれた刃が伸びる。元の倍程度まで伸びたノコギリ鉈、その遠心力を利用した一撃が迫るデッドリー・ホーネットを頭から両断した。そんな彼の背後で、ホブ・ゴブリンが好機とばかりに爪を振り上げる。

しかしホブ・ゴブリンが爪を振り下ろすより早く、ヴィンセントのエヴェリンが火を吹いた。その恐るべき早撃ち（クイックドロー）に攻撃の瞬間を射抜かれたホブ・ゴブリンはバランスを崩して膝をつく。そして顔を上げたホブ・ゴブリンが見たのは――ニィと口元を緩めながら右手で手刀を作るヴィンセントの姿だった。

直後、その手刀がホブ・ゴブリンの腹を貫き、体の内側を強引に掻き回した。夥しい量の血と内臓が辺りにぶちまけられる。

「私も貴様らを殺そう。一切の容赦なしで、だ」

――さぁ、〝狩り〟を始めよう。

引き抜いた魔石をペロリと舐め、ヴィンセントは虚空より新たな得物を掴んだ。それは《教会の石槌》と名付けられた石の塊。ヴィンセントはそれを細腕で軽々と振るい、寄せ来るモンスターを一体、また一体と叩き潰していく。大質量の生み出す衝撃はまさに凄まじいの一言に尽き、グシャグシャになった死体が地面を転がった。

「ハ――ハハ――ハハハハハッ」

『ヴヴヴヴヴヴ!』

しかしダンジョンでは何が起こるか分からない。教会の石槌を振り回しモンスターを蹴散らすヴィンセントを、天井から産まれたばかりのデッドリー・ホーネットが頭上より強襲した。勝ち誇ったかのような声色で鳴くデッドリー・ホーネットだが、ヴィンセントはその突撃を紙一重で躱すと石槌の持ち手を素早く分離させた。露になるは穢れなき銀の剣、ヴィンセントはそれを構えると再度突撃を敢行するデッドリー・ホーネットを真っ正面から斬り裂いた。

「惜しかったな」

笑いを噛み殺し、既に聞こえていないであろうその言葉を口にしながら、ヴィンセントは教会の石槌を別の仕掛け武器に切り替える。分厚い金属の刃が重なった鉈状の凶器――《獣肉断ち》。重い鈍器である筈のその武器は仕掛けによって伸縮し、多数のモンスターを一振りの下に薙ぎ払った。二度、三度とヴィンセントが獣肉断ちを薙ぐ度に、彼へ向かっていくモンスターの数は減っていく。そして――、

「……なんだ、もう終わりか」

血飛沫と死体が散らばる赤黒い地面を眺め、ヴィンセントはポツリと呟いた。その惨状と呼ぶに相応しい光景であるにも関わらず、彼は平然として顔色一つ変えることもない。それどころか、帽子の下の表情に失望の念を滲ませる程だ。

「（……いや、元よりこうなることは承知の上。今は魔石の回収が先か）」
　短く溜め息を吐き出し、ヴィンセントは無惨な有り様となった死体から魔石を抜き取っていく。頭を潰され脳漿を撒き散らしたもの、下半身が別れ内臓の溢れたもの、魔石を残して大部分がグシャグシャになったもの、その種類も様々だ。それは死体など飽きる程見てきた冒険者でも顔をしかめるであろう状態、しかしヴィンセントにとっては見慣れたものである。
　そして何より、彼はこれよりもおぞましく醜悪なものを知っていた。
「さて……行くか」
　コートに付着した血糊を振り払い、ヴィンセントは首をコキコキと鳴らしながら歩き出す。彼の目的はまだ果たされていない。今の戦闘もまだまだ前菜に過ぎないのだ。

△▽△▽

　ダンジョン探索を切り上げ、地上へと戻ってきたヴィンセント。彼がバベルを抜ける頃には夜更けとはいかないまでも、夜が深まりつつある時間帯であった。
　空に輝く星々と賑わう通りや酒場。それらをぼんやりと見つめたヴィンセントは、やがてふっと微笑んでからゆっくりと足を踏み出し――、

「こんばんは、ヴィンセント」

目の前に現れたローブの女と巨漢に向けて、躊躇いなくエヴェリンを抜いた。

第６話

「ふふふっ。こんばんは、ヴィンセント」

全身をローブで覆ったその女は、唯一フードの隙間から露になっている口元に妖艶な笑みを浮かべた。それは誰もを惹き付けるような甘い笑み、しかしヴィンセントは普段見せないような険しい表情のまま、エヴェリンの銃口を女へと向けている。

「……」

「そんな怖い顔をしなくてもいいじゃない。私がここにいるのは散歩の帰り、貴方を見つけたのは本当に偶然なの。どす黒い血を集めに集めて、それでいて尚満ち足りない穢れた魂……分からない筈がないわ」

その言葉にヴィンセントはチラリと彼の後ろにそびえ立つバベルを見上げた。天を穿たんと伸びる白亜の塔、その最上階が目の前の女――女神フレイヤのプライベートルームであることは、このオラリオでは周知の事実である。

フレイヤの言葉に嘘はないと判断したのか、ヴィンセントは一度忌々しげに舌打ちをしてからエヴェリンを下ろした。しかしホルスターには戻さず左手に握ったまま、いつでも撃てるように引き金から指を放してはいない。彼はまだ目の前の女神に対して警

戒を続けているのだ。
「……何の用だ？」
「あら、用がなくては話し掛けてはいけないのかしら？　見つけたから声を掛けた、それだけで十分でしょう？」
「下らん。私は貴様に構ってやる程暇ではない」
「……相変わらずね、貴方は。でもそう……一つだけ貴方に聞きたいことがあるの」
クスクスと笑いを漏らすフレイヤ。フードに隠された鈍色の瞳がすっと細められる。
「貴方、最近新しい子が【ファミリア】に入ったらしいわね。数ある【ファミリア】の中から貴方のところを選んだなんて一体どんな子なのか……少し興味があるわ」
「私がそれを教えると思うか？」
ギロリとヴィンセントの鋭い眼光がフレイヤを睨み付けた。同時に放たれる凄まじい怒気に、フレイヤの後ろに控えていた巨漢の猪人（ボアズ）――オッタルが静かに背負っていた大剣に手を掛ける。
フレイヤはオラリオに下りた神々の中でも随一の美貌を持つ『美の女神』だ。彼女の『魅了』は人々だけでなくモンスター、そして神すらも虜にする程の代物であり、また彼女自身が人間（こども）の魂の色を見ることが出来ることから、気に入った相手を『魅了』して自らの【ファミリア】に引き込んでいるのである。例えそれが既に【ファミリア】に所属

している者であっても。

　気に入った相手を取り込むためならば手段を問わない、そんなフレイヤの口振りからベルが『魅了』されることを警戒したヴィンセントは、迷わずエヴェリンに『骨髄の灰』を装填し、その手に《獣狩りの曲刀》を呼び寄せた。既に辺りには人の影は一つもなく、両者の間に一発触発の空気が漂い始める。

「ふふふっ、貴方がそこまで気にするなんて、余程その新しい子に入れ込んでいるようね。あぁ、気になるわ……！　【血の申し子（ブラッドボーン）】と蔑まれ、恐れられた貴方がそこまで気に入るなんて……一体どんな子なのかしら！」

　ペロリと艶かしく唇を舐め、恍惚の表情を浮かべて身悶えするフレイヤ。そんな彼女にヴィンセントは嫌悪感で顔を歪め、ペッと唾を吐き捨てた。

「……浅ましいな。そして気色の悪い。人を誑かす薄汚い売女が。やはり貴様は神などではなく、ただの飢えた下劣な雌に過ぎん。かの”星の娘”の方が余程美しいというものであろうよ」

「ヴィンセント貴様っ……!!　フレイヤ様を侮辱するかっ!!」

　この世の何よりも敬愛する主神を侮辱され、オッタルは目を血走らせて激昂する。オラリオ最強の冒険者が放った常人ならば当てられただけで気絶する程の怒声と殺気、しかしヴィンセントはそれすらも鼻で笑い、大きく両腕を広げて彼を挑発した。

「吠えるなよ畜生。Ｌｖ．７という冒険者としての高みに在りながら、矜持なき下僕に成り果てた愚か者が。獣は獣らしく、そこな雌にでも尻尾を振っておけ。卑しい貴様にはそれが似合いだ」

その言葉でオッタルの中にあった何かが切れた。

「……フレイヤ様」

「ふふっ、いいわよオッタル。遊んであげなさい。ヴィンセント、また会える日を楽しみにしているわ」

ヴィンセントの隣を通り過ぎる際にそう言い残し、フレイヤはバベルの入口へと消えていった。彼女によって人払いされたバベル前の広場、そこで二人の冒険者が対峙する。

「フレイヤ様を侮辱したこと、あの世で後悔するがいい……！」

「口を開けばフレイヤフレイヤと、馬鹿の一つ覚えだな。全く、何が貴様をそこまで駆り立てるのか……」

――哀れだよ。炎に向かう蛾のようだ

ヴィンセントはオッタルを嘲笑する。その顔にある感情は嘲りと軽蔑、そして確かな

失望と憤りである。

Ｌｖ．７というオラリオの頂点に立つ男が一女神の付き人という地位にあり、ましてやその地位を甘んじて受け入れているなど、そんなことは断じてあってはならない。他者を寄せ付けない圧倒的な力を持ちながらもそれを腐らせ、それでいて平気な顔をしているこの【猛者（おうじゃ）】を、ヴィンセントは到底許すことが出来ないでいるのだ。

かつて、自分に並び立つやもしれぬと彼にある種の期待を抱いていたが故に。

「行くぞ……！」

「狩られるのは貴様の方だ。獲物が狩人に敵うものかよ」

オッタルが飛び出し、ヴィンセントが迎え撃つ。瞬間、空気が爆ぜ、衝撃がオラリオ全体を包み込んだ。

△▽△▽

【ディアンケヒト・ファミリア】治療院。冒険者に必須な回復薬（ポーション）等のアイテムを販売しており、朝及び昼間は多くの冒険者が足を運ぶ建物だ。しかし夜になった現在では客の姿もなく静寂に包まれていた。

「ふぁぁ……」

そんな可愛らしい欠伸がカウンターに立っていた少女、アミッド・テアサナーレの口から溢れる。普段は整った顔立ちと淡々とした態度から精緻な人形とも思われている彼女だが、半分目を閉じながら迫る眠気、そして体の怠さと格闘する様子は外見相応な少女のそれだ。アミッドは暫しの間、そのまま眠たそうにゆらゆらと体を揺らす。

そんな時である。今日はもう開かれることはないだろうと思っていた扉がゆっくりと開かれた。

「ん、いらっしゃいま……せ……」

「邪魔をするぞ」

現れたのは全身を赤く染めた黒衣の男。その姿にアミッドのアメジスト色の瞳が驚愕で見開かれる。数秒後、我に返ったアミッドはカウンターを飛び出すと、すぐさま男の下へと駆け寄った。その取り乱し様は尋常ではない。

「ヴィンス!? しっかりしてください! どこが痛みますか!? すぐに薬を――」

「落ち着けアミッド、半分は返り血だ。それと傷の方ももう治っている」

薬品棚に向かおうとしたアミッドの手を男――ヴィンセントは掴んだ。その言葉に一瞬きょとんとしたアミッドだが、やがてペタペタと彼の体を触り始める。そして今の行動が自分の早とちりだったと分かるや否や、その陶器のような白い頬を赤く染めた。そんな彼女にヴィンセントは苦笑すると、その細い白銀の長髪をそっと撫でた。

「し、失礼しました。ですがヴィンス、何故そんな格好に……」
「【猛者】と少々殺り合っただけだ。大したことではない」
「あっ……。そ、そう言えるのはこのオラリオでも貴方くらいですよ」
　ヴィンセントの手が離れるとアミッドの口から名残惜しそうな声が漏れる。同時にアミッドは合点がいった。少し前まで感じていた空気の震えは、彼と【猛者】オッタルがぶつかり合っていたことが原因なのだと。戦闘の衝撃がこの治療院まで伝わってくるとは一体どれだけ壮絶なものだったのか、考えるだけで軽く戦慄を覚える。
「……一先ず、ご無事のようで何よりです。それで、今日はどういったご用件でしょう？」
「『大樹の迷宮』で薬草を採ってきた。買い取りを頼みたい。値段はそちらに任せよう」
　そう言ってヴィンセントがアミッドに渡したのは複数の袋だ。その中には回復薬の材料となる薬草類が入っており、また各袋毎に種類が分けられている。それらの量は決して多い訳ではないが、回復薬は冒険者にとって必需品であり、その原材料は【ディアンケヒト・ファミリア】を筆頭とした医療系【ファミリア】に、非常に高い需要があるのだ。
「分かりました。少々お待ちください」
　袋を持ったアミッドは店の奥へと消えていく。やがて戻ってきた彼女の手には薬草

の袋の代わりにヴァリスの入った袋が握られていた。
「合計で二五万ヴァリスになります。どうぞ」
「あぁ、感謝する」
「……それとヴィンス、貴方にこれを」
アミッドが差し出したのは二本の試験管。その中は回復薬（ポーション）でも万能薬（エリクサー）でもない、真っ赤な鮮血が丁寧に密封してあった。
「……自分を傷付けるような真似はやめろと言った筈だが」
「ええ。ですが私に出来ることはこれくらいしかありませんので」
二人は立ち尽くし、無言のままお互いを見つめ合う。そして先に折れたのはヴィンセントの方だった。彼は一度嘆息すると試験管を受け取り、それをポーチへと大切そうにしまった。
「……つくづく不思議なものだよ。貴公程の女が私のような男に尽くしてくれることがな」
「貴方は命の恩人です。あの『赤い月の夜』、私は貴方に救われた。ならば貴方に尽くす理由など、それで十分でしょう？」
表情を綻ばせ、穏やかな笑みを浮かべるアミッド。普段の無表情ぶりからは考えられないその微笑みは、恩人（ヴィンセント）だけに見せる特別なものである。そんな彼女にヴィンセント

は身を屈め――、

その唇を重ねた。

「また来る」

「はい。お待ちしています」

最後に短く言葉を交わし、ヴィンセントは治療院を後にする。そしてその背を見送るアミッド。その頬にはうっすらと紅が差しており、溢れる吐息は確かに熱を帯びていた。

△▽△▽

『豊饒の女主人』は今日も多くの冒険者で賑わいを見せていた。それぞれのテーブルでは冒険者達が料理と酒を肴に会話に弾ませ、女将であるミア・グランドの指示に合わせてウェイトレス達が忙しく動き回る。時折飛ばされる怒声も、この店では最早ありふれたものだ。

「お待たせしました、本日のおすすめと醸造酒（エール）になります」

席に座るヒューマンの二人組に料理を運んだリューもまた、この『豊饒の女主人』で働くウェイトレスの一人である。テーブルとテーブルの間を縫うように移動し、ミアの料理を盆に乗せては再度運んでいく。そして、彼女が入口付近を通り過ぎたその時だ。

「(――『月の香り』……)」

風に運ばれた微かな香りがリューの鼻腔をくすぐった。チラリと目をやった入口、やがてそこには一つの人影が訪れる。その姿を目の当たりにした瞬間、リューの表情が喜色で染まった。

「いらっしゃい、ヴィンス」

「あぁ」

やって来たヴィンセントはリューの言葉にこくりと頷くと、そのままカウンターの一番端の席に座った。騒がしかった店内が彼の登場によって一瞬だけ静まり返り、そしてまたすぐに戻った。

「久しぶりだねぇヴィンセント。今日は何をご所望だい?」

ヴィンセントにニヤリと豪快な笑みを浮かべたミア。彼は先程アミッドから渡された袋から三〇〇〇ヴァリスを取り出すと、コトンとそれをカウンターに置いた。

「これで出来るだけの料理と酒を」

「よぉし任せな!」

注文を受け、意気揚々とばかりにミアは厨房へと姿を消す。残されたヴィンセントは頬杖をつきながら料理を待ち、彼の様子をリューは給仕の役割を果たしながら横目で観察する。その無駄に器用な動きの裏には、かつて彼女が冒険者だった頃の経験が存分に生かされており、そんな彼女に同僚の猫人（キャットピープル）が思わず「ニャにやってんニャ……」と引き気味で呟いていた。

「ほら出来た、たんと食べなよ！」

やがてヴィンセントの前に『豊饒の女主人』特製の料理がずらりと並ぶ。串に刺さった肉、彩り豊かなサラダ、芳醇な香りのパスタ、具だくさんのピザ、魚介類のスープ、グラスいっぱいの酒。周囲の客達がその量に困惑の眼差しを向ける中、ヴィンセントはゆっくりとフォークを手に取った。そして食らう。

「……美味いな。流石だ」

「そうだろうそうだろう。リュー、休憩がてらこいつの相手してやんな。たくさん食わせて、がっぽり金を落としてもらうんだよ！」

「……はい！」

ミアの言葉にリューはすぐに頷くと、店の端から丸椅子を用意してヴィンセントの隣に運び、そこへちょこんと腰を掛けた。ニコニコ、とまではいかないまでも口元を緩めて食事の様子を眺めるリューの姿を、ヴィンセントは食事の手を止めることなく一瞥す

る。

「ヴィンス、今日は何を？」

「午前中はベルの鍛錬に、午後からは２４階層まで行ったな」

リューの問いに答えたヴィンセントはぐっと酒の入ったグラスを傾ける。

今日一日何をしていたのか、リューがヴィンセントの相手をする際、最初に尋ねるのは必ずこのことだった。ヴィンセントもそれを理解しているのか、その口からは淀むことなく言葉が出ている。

「２４階層……ということは、宝石樹と薬草ですか？」

「その通りだよ。尤も、宝石樹の方は見つけることが出来なかったが。あぁ、それと地上に上がってからはオッタルを半殺しにしたな。相も変わらずつまらん男だった」

さらりと流された言葉に聞き耳を立てていた周りの冒険者達は思わず耳を疑う。しかしヴィンセントは何食わぬ顔のまま串に刺さった肉を噛み締め、スープを口に流し込んだ。そしてそんな彼にリューはやれやれと言わんばかりに嘆息する。

「ヴィンス、あまり無茶なことはやめてください。いくら貴方が強くとも相手はかの【猛者（おうじゃ）】なのですよ？」

「冷静さを欠いた獣程御しやすいものもない。傷も腹に一撃受けただけ、パワーとタフさだけの輩ごときに遅れは取らんよ」

「それでもです。貴方の身を案じるこちらの気持ちも考えてください」
リューはヴィンセントの頬を撫で、その首を自分の方へと向けた。必然的に二人は見つめ合うような形となり、ヴィンセントの翡翠の瞳にリューの空のような蒼色の瞳が映る。
「ヴィンス、どうか死に急ぐような真似だけはしないでください。貴方が死ねば私は悲しい。いえ、神へスティアやクラネルさんも悲しむでしょう。貴方は孤独じゃない。ですから、どうか……」
真剣な表情でリューに見つめられ、ヴィンセントは「……善処はしよう」とばつの悪そうに呟いた。強大なモンスターやオラリオの頂点に立つＬｖ．７が相手にも怯まず、むしろ嬉々として殺しにいく彼でも、彼を想う者からの純粋な願いには流石に分が悪い。気を紛らわすように酒を飲み干し、空っぽになったグラスをぼんやりと眺めた。
「リュー、酒を追加だ。今宵は付き合ってもらうぞ」
「はい、喜んで」
ニヤリと不敵な笑みを浮かべたヴィンセントにリューも微笑みを返した。

△▽△▽

翌日、『竈火の夢』にて。

「神へステイア、【ステイタス】の更新を頼む」

「あれ？　珍しいね。昨日何かあったのかい？」

「昨日【猛者（おうじゃ）】と殺り合った。まぁ、だからといって大した伸びがある訳でもないだろうが……」

「はぁ……。詳しいことは聞かないでおくよ。とりあえず【ステイタス】を更新しようじゃないか。大体一ヶ月ぶりかな？　一体どれだけ伸びたんだろうね」

ヴィンセント・ローズ

Ｌｖ．７

力　：Ｄ　５６７→５７０

耐久：Ｆ　３４２→３４４

器用：Ａ　８８４→８８８
敏捷：Ａ　８９１→８９２
魔力：Ｅ　４７３→４７６
狩人：Ｅ
鍛冶：Ｅ
耐異常：Ｇ
神秘：Ｆ
調合：Ｇ
気配遮断：Ｈ

《魔法》

【ヴィラ・ブラッド】
・付与呪詛（エンチャントカース）。
・自傷により発動。
・血属性。
・行使中は罰則（ペナルティ）により、出血し続ける
・詠唱式【我は血族。穢れた血を啜り、異端として教会に仇なす者也。凡百の俗物よ、カインハーストの業を知れ】

【ハンターズ・ベル】

・使役魔法。

・古い狩人を呼び出す。

・強さは詠唱時のイメージに依存。

・詠唱式【夢を失い、だが狩りを忘れぬ古狩人よ。かつて刃を交え、眠りについた偉大な狩人よ。託せし思いがあるならば、この鐘の音に応えるがいい。獣を狩れ。敵を殺せ。死体が転がり、獣血の匂い立つ惨状こそ、汝の居場所に相応しい。さぁ、今こそ狩りを始めよう】

《スキル》

【狩人之業（ハンテッド・ナイトメア）】

・狩人の業。

・仕掛け武器、獣狩りの銃器、狩装束を召喚する。

・秘儀を使用する。使用時、精神力（マインド）消費。

・任意発動（アクティブトリガー）。

【鮮血医療（フィアー・ジ・オールドブラッド）】

・痛覚遮断。

・血を体内に取り込むことで体力を回復し、攻撃力が上昇する。

・血によって快楽を得る。また血に酔う。
・血に酔った状態で一定以上の血を取り込んだ場合、獣化する。
【戦闘狂喜（バトル・バーサーク）】
・敵と戦闘する場合、『力』と『敏捷』のアビリティ強化。
・対象の強大さにより効果上昇。
【叡瞳先触（エンライトメント）】
・世界を正しく認識する。
・啓蒙の量により効果上昇。
・発狂しやすくなる。
【秘文字（カレル）】
・効果選択：アイテムドロップ率アップ。
・効果選択：状態異常耐性。
・効果選択：損傷（ダメージ）軽減。
・効果選択：スタミナ回復速度上昇。

第7話

前方よりドタドタと足音を立てて迫る三体の『コボルト』。それらを迎え撃つ少年は一度すうと深呼吸をすると、その目を鋭く光らせ得物であるナイフを構えた。少年は襲い来る爪を寸前で躱し、握られたナイフが素早く振るわれる。ナイフが瞬いた回数は合計で三回、それと同じ数の斬撃がコボルトの腹、胸、喉に叩き込まれた。

『ガァ……!』

『グルルルル!』

『グガァ!』

崩れ落ちるコボルトの陰から後続のコボルトが飛び出す。二体同時の強襲、しかし少年は焦ることなくナイフを逆手に構え直すと、真っ先に飛び掛かってきた一体の鼻っ面を蹴り、もう一体の腕へナイフを突き刺した。少年はそれを引き抜くことなく手を離すと帯びていたショートソードを抜刀、怯んだコボルトを袈裟斬りで斬り捨てる。深々と肉を抉った刀身は胸の魔石を確かに捉えていた。

コボルトが灰に還ったことで抜けたナイフを拾い上げ、少年は先程蹴り飛ばしたコボルトを一瞥する。そして地を蹴り、一閃。鉛色の刃が喉笛を斬り裂き、確実にコボルト

の息の根を止めた。滴る血を払い剣を納刀した少年は、やがて大きく息を吐いて脱力した。

「ふう……コボルト相手にもだいぶ慣れたなぁ」

倒れた死体から魔石を回収し、少年ベル・クラネルはゆっくりと立ち上がる――直後、上から聞こえたピキピキという音に彼は反応し、ナイフを鞘から抜きながら後ろに跳んだ。そして落ちてくる蜥蜴のモンスター、『ダンジョン・リザード』。ダンジョンの壁や天井に張り付き、冒険者を奇襲することで知られるモンスターだ。

しかし奇襲が失敗したとなればその脅威は半減したも同然である。結局、ダンジョン・リザードはベルのスピードに翻弄され、その目を潰されてから首を断たれて絶命した。別れた首には目もくれず、ベルは慣れた手つきで体から魔石を取り出す。

「……よし、もう４階層も大丈夫かな」

魔石を巾着にしまいつつベルはぼんやりとそんなことを呟く。そうして歩き出した彼の先にあるのは緩やかな階段、すなわちダンジョンの５階層へ至る道である。

『ウォーシャドウ』は６階層から、『キラーアント』は７階層からだから５階層は問題ない……筈」

エイナとの『勉強会』で培った知識を改めて思い出すと、ベルは真剣な面持ちで５階層へと続く階段を降りていった。

少年ベル・クラネル。
彼が冒険者となって、今日で半月が経過する。

▽△▽△

おかしい。
5階層に降りて探索を始めたベルが抱いたのはそんな違和感だった。目の前に広がるトンネルのような通路、薄暗く嫌でも警戒心を抱かせるそこからは、モンスターの気配が微塵もしない。
本来現れる筈のモンスターが現れない。
そんな明らかな異常にベルの頬を冷や汗が伝った。
「……戻った方がいいのかな」
忙しく辺りを見回しながらベルはより警戒を強める。まるで嵐の前の静けさとも言うべき静寂だ。ゾクゾクと背筋を悪寒が走る。嫌な予感とは恐らくこういうことを言うのだろうと、初めての感覚にベルはどこか落ち着かない心をなんとか鎮めんとし、一旦立ち止まって息を整えた。

そうして進むこと数分――ベルの前にそれは現れた。

その大きさはおよそ数Ｍ（メドル）、屈強な肉体を有する牛頭人体のモンスターだ。歩く度にズゥン、ズゥンとコボルトのものとは比べ物にならない程、重く低い足音が響く。時折、荒い鼻息がその大きな鼻から吐き出された。

ベルはこのモンスターの正体を知っていた。故に動きを止め、目を疑ったのだ。５階層（こんなところ）で出会うことなどあり得ない、何故中層のモンスターが上層にいるのか？　疑問が頭を一瞬で埋めつくし、動き出すのが僅かに遅れた。

『ブモォオオオオオオオ!!』

「っ！」

轟き渡る『咆哮（ハウル）』にベルの体が硬直する。恐らくほとんどのＬｖ．１冒険者ならば心を折られ、逃げるどころか動くことももも出来なくなるそれを受けて、しかしベルはすぐさま踵を返すと、今まで進んできた道を全速力で引き返した。

彼が動けた理由は単純明快、先のモンスターよりも遥かに強い男を知っているからだ。しかし体が動いても頭がついていかないのか、訳が分からないと言わんばかりの形相でベルは走り、叫ぶ。

「な……なんで!? なんでこんなところに『ミノタウロス』がぁ!?」
『ォオオオオオオオオ!!』
後ろから響く足音と唸り声にベルは顔を青くする。しかし足は止めない。止まれば待っているのは無慈悲な死で、生きるためには走り続けるしかないのだ。
ミノタウロスのレベルは2。Ｌｖ．１のベルには文字通りレベルが違う相手である。真っ正面から戦って勝つことはまず不可能、ならば残された道は逃走の一択だ。幸いにもミノタウロスは足の速いモンスターではなく、ベルの『敏捷』でも追い付かれない程度には逃げることが出来ていた。
「はぁ……はぁ……！　でも、このままじゃ……！」
しかし無限に等しい体力を持つミノタウロスに対し、ベルのスタミナは有限だ。逃げ回るだけならばいずれ捕まってしまう。ベルもそれは分かっているのか、走りながらも必死に目を動かして他の冒険者の影を探す。押し付けるのではなく、助力を借りるために。
そんな彼を嘲笑うかのように、やがて現れたのは行き止まりというあまりに無情な現実だった。
『フゥー……フゥー……！』
「そんな……」

直面した黄土色の壁。そして後ろには息を荒らげるミノタウロス。絶体絶命の四文字がベルの頭を過った。最早これ以上逃げることは叶わない。

ここでベルに残された選択は二つ。諦めるか、それとも戦うかだ。前者は言わずもがな、後者もまた生き残る選択として見れば絶望的と言えるだろう。ベル・クラネルではミノタウロスを倒せないのだから。

「(僕は……)」

後ろで鳴り響く足音が近くなる。それに比例して心臓の拍動も早まった。

死が近付いてきている。

「(それでも、僕は……)」

ベルは振り返り、腰から下げられたショートソードを抜き放つ。鈍く輝く切っ先をミノタウロスへと向け、右腕に左手を添えるように置いた。その手にはナイフが逆手で握られている。

「(倒す必要はない。目を狙って怯ませて――その隙に逃げるしかない)」

目を伏せ、静かにベルは覚悟を決めた。恐怖で体は震え、構えた刃が左右にぶれる。込み上げる弱音に蓋をして、やるしかないのだと自分に言い聞かせる。

例え自分にはどうしようもない相手であっても、最初から諦めるなんて真似は絶対に出来ない。希望を捨てずに、精一杯抗うのだ。

ベルの理想である英雄達ならば、きっとそうするであろうから。

『オオオオオオオオオオオオオオ！』

雄叫びを上げたミノタウロスが右腕を振りかぶる。それを見たベルが真っ先に感じたのは、思っていたよりも大きいということ。それでも見切れない程速いという訳でもなく、ベルは恐怖を押し殺しつつミノタウロスの懐に飛び込むようにして回避すると、その脇腹をショートソードで思い切り斬りつけた。そして驚愕する。

「なっ……硬っ!?」

渾身の力で振り抜いたにも関わらず、薄皮の一枚も満足に斬れなかったことに、ベルはぎょっと目を見開いた。恐ろしい程強靭な筋肉だ。脇の下をすり抜けるように離脱したベルは、その手に握られた二本の得物を交互に見比べた。

「(参ったな……。さっきの一撃が駄目なら、この二本じゃあいつに傷はつけられない。それにこっちは一発でも食らえば致命傷だ。これがＬｖ．２のモンスター……)」

なんという理不尽な差なのだろうと、ベルの口から乾いた笑いが溢れる。しかしそんな彼などお構いなしにミノタウロスは何度もベルを襲った。大樹の幹のような豪腕から繰り出される必殺の攻撃、それをベルは鍛えられた動体視力と反射神経で以て紙一重で回避していく。じわじわと削られていく体力と蓄積する疲労に、ベルの額にじわりと汗が滲む。

「（まずい……このままじゃ本当に……！）」
　ベルはミノタウロスの腿目掛けてナイフを突き立てる。が、刃は通らず歯が立たない。思うようにいかないことに対するもどかしさだけが募っていく。
「くぅ……畜生っ……！」
　状況に進展はなく、ただただ追い詰めれていくだけ。一か八か、やがて痺れを切らしたベルはバックステップで距離を取り、深呼吸をして全神経を研ぎ澄ませる。そして――、
『ブモォオオオオオオオオオオオオオオオ!!』
「っ！」
　地面に叩きつけられた腕を踏み台にして跳んだ。ミノタウロスの表情に初めて動揺が走り、ベルの握り締めたナイフの切っ先が光る。
「ここだぁあああああああああああああああああ!!」
　振り下ろされる鈍色に煌めいた刀身、それがミノタウロスの左目に深々と突き刺さった。刹那、ミノタウロスの絶叫がダンジョンに木霊する。
『ゴァアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』
「がっ……!?」
　それはミノタウロスにとってはなんてことない、目の前を飛ぶ虫を払うかのように手

を振るっただけなのだろう。だが、たったそれだけの行為はベルをあっさりと吹き飛ばし、勢いを伴ったままダンジョンの壁へと叩きつけた。彼の口から血反吐が溢れる。

地を這ったベルは突然のことに混乱していた。何故傷を負わせて優位に立った筈の自分が死にかけているのか？　出血と痛みのせいでろくに働かない頭で考えようとして――直感に任せて体を強引に捻った。瞬間、彼の体が凄まじい衝撃と痛みによって宙を舞う。

「ぁ……が……」

ズザザザと壁にぶつかることなく地面を滑り、ボロ布の切れ端のようになって転がったベル。直撃は躱したものの、ミノタウロスの蹴りを受けた体は至るところが内出血と打撲で赤紫色に腫れ上がり、また装備していたブレストプレートやサポーターは盛大にひしゃげ果てていた。恐らくもう二度と使い物にはならないだろう。骨折した箇所も多く、特に最初の一撃と蹴りを受けた左腕は完全にイカれていた。流れる血で赤く染まり、本来ならば曲がる筈のない向きに曲がっている。

徐々に体の感覚が失われていく状況で、ベルは初めて明確な”死”を理解した。最早ミノタウロスの唸り声すらも遠く、視界もぼやけて何も見えないに等しい。僕はここで死ぬんだろうなと、ベルはどこか他人事のように思った。

「（……嫌だ……死にたくない）」

――だって、僕はまだ何も成し遂げちゃいない

悔しさで胸がいっぱいになり、ベルは涙を流した。熱い雫が頬を伝い、地面に落ちては消えていく。

そんな彼の上を、一陣の風が通り抜けた。

ベルはそれを確かに見た。

黄金色の髪を揺らす一人の少女がミノタウロスを瞬殺する姿を。

自分を虫けらのようにあしらった強大なモンスターが、成す術なくやられている。

その姿はまるで、憧れた物語の英雄達のようで――、

死に瀕していたベルの胸に深く刻み込まれた。

「（――凄い）」

そして少女が振り返り、どこからか知らない青年の声が聞こえ始めたところで、ベルは意識を手放して目を閉じた。

▽△▽△

「ベートさんっ！」
「ちっ、分かってる！」
　ミノタウロスを倒して剣を納めたアイズ・ヴァレンシュタインは珍しく声を張り上げ、今しがた追い付いてきた狼人（ウェアウルフ）の青年――ベート・ローガの名を呼んだ。ポーチより素早く高等回復薬（ハイ・ポーション）を取り出した二人は、地面に転がった瀕死のベルにそれを振り掛ける。その後脈を確認、辛うじて命を助けられたことが分かるとその口からは安堵の息が溢れた。
「良かった……」
「はぁ～……ったく、あと十秒遅れてたら死んでたぞ、このガキ」
　切れた息を整えながらアイズとベートは血に汚れたベルの顔を覗き込んだ。高等回復薬（ハイ・ポーション）を複数本使ったお陰か、傷自体は既に癒えて塞がっている。だがベルの意識がなく、またミノタウロスが５階層まで上がってきた原因が彼女達にあるとなれば、このまま危険なダンジョンに放置していく訳にもいかない。そこまで考えたアイズが起こした行動は――所謂、おんぶであった。
「あぁ？　アイズ、そのガキ連れてくのかよ？」

「……ミノタウロスが逃げたのは私達のせいですから」
「身の程も弁えねぇ雑魚に構うんじゃねぇよ。ミノタウロスごときに死にかけるような奴が、この先も生き残れるとは到底思えねぇがな」
　ギロリとベートの鋭い目がアイズを捉えた。しかしアイズも譲らず、両者の間には暫し沈黙が流れる。
「……」
「……」
「……」
「……ちっ、勝手にすりゃあいい」
　結局、先に折れたのはベートの方だった。彼は最後にアイズに抱えられたベルを一瞥すると、不機嫌そうに鼻を鳴らしながら来た道を戻っていった。アイズもまたそんな彼の背中を見送ると、散らばったベルの装備を可能な限り回収し始める。そして彼女が大量の灰に埋もれたナイフに手を伸ばした、その時である。
「(このナイフ、ミノタウロスの目に……)」
　先程仕留めたモンスターの姿を思い出し、アイズは自分の背中で眠る少年に視線を移す。あの場にはベル以外に冒険者はおらず、必然的にミノタウロスへの傷は彼がやったもので間違いない。

Ｌｖ．１と思わしき冒険者がミノタウロスに重傷を負わせた、その事実にアイズは乏しい表情ながら驚きを露にした。彼女がまだ５階層に挑むようなＬｖ．１の時には、そんな真似はきっと出来なかったであろうから。

「……凄いんだね、君は」

ベルに向かってそう呟いたアイズは目の前のナイフに手を伸ばした。

第８話

光があった。
一方は暖かく、眩しい黄金の光。
もう一方は底知れない、真っ黒で穴のような光だ。
どちらの光もあまりに遠い。
ぼんやりとしたおぼろ気な意識の中で、ベルはその光に手を伸ばした。
当然その手は届かない。掠りもしない。
それでもベルは構わなかった。
――いつの日か、あの憧憬（ひかり）を……
瞬間、光が広がって辺りを白で埋め尽くす。その奔流にベルは身を任せ、ゆっくりと目を閉じた。

▽△▽△

「目、覚めた？」

意識が覚醒したベルが最初に見たのは知らない天井……ではなく、彼を覗き込む金髪金眼な美少女の姿だった。まだ夢でも見ているのだろうか、ベルはそんなことを考えながらごしごしと目を擦るが、目の前にいる美少女が消えることはない。ついでにベルはその美少女が気絶する寸前に見たあの冒険者であると気付き——そこで漸く、声にならない悲鳴を上げた。

「～～～～～～～～～～～～～～!?!?!?」

「……大丈夫?」

大丈夫じゃないです！　と、ベルは盛大に言ってやりたかったが、恥ずかしさが勝って布団の中に潜り込んでしまう。バクバクと高鳴る心臓と熱い顔面、今の自分はトマトみたいに真っ赤なんだろうなぁと、半ば現実逃避気味にベルは思った。先程からやけに左腕が痛むということも、彼はすっかり忘れてしまっている。

それから暫しの間、無言の時が流れる。状況が飲み込めず混乱しているベルは勿論のこと、彼を看ていたアイズもどう対応していいかが分からなかった。とりあえず声を掛けてみるべきか、団長であるフィン・ディムナや幹部であるリヴェリア・リヨス・アールヴ、ガレス・ランドロックを呼ぶべきか、そんな考えが彼女の頭を巡る。そんな時だ。

「アイズ、私だ。入っていいか?」

コンコンと控えめなノックと共に、アイズが今まさに思い浮かべていた女性の声が耳

に入る。これ幸いとばかりに彼女は許可を出すと、深緑色の長髪を揺らすエルフの麗人が部屋に入ってきた。女性はベッドの横に用意した椅子を座るアイズと、ベッドの上で饅頭のようになった布団を一瞥すると、やがて小さく溜め息を漏らした。

「アイズ、これはどういう状況だ？」

「……分からない？」

こてんと首を傾げるアイズ。彼女からしてみればベルが目覚めた直後に突然慌て始め、布団に潜って動かなくなってしまったのだから、どうしてと聞きたいのはむしろ彼女の方だったのだろう。

アイズの様子からおおよその予想をつけた女性――リヴェリアは、やれやれとばかりに肩を竦めながらベッドに歩み寄った。そして新しい人物――しかも女性――が部屋に来たことを気配と声で理解したのか、布団を被ったベルはびくびくと体を震わせる。

「少年、そう怯える必要はない。それより少し話をしないか？　君の疑問にも答えよう」

「……話、ですか？」

恐る恐るといった具合に布団から顔を出すベル。その顔はやや落ち着いたようだがまだ赤く、神さえ嫉妬すると言われるリヴェリアの美貌を目の当たりにして、ほとんど反射的に後ろを向いた。異性に対して免疫のない少年にとってリヴェリアと、そしてアイズは些か眩しすぎたのだ。

「あの……すみません。ちょっと、慣れてなくて……」
「……いや、君がそっちの方が話しやすいなら構わない。あぁそうだ、まずは自己紹介をしておこう。私の名前はリヴェリア・リヨス・アールヴ、そしてこっちがアイズ・ヴァレンシュタインだ」
「ベ、ベル・クラネルです……」
お互いに自己紹介を交わすベルとリヴェリア。その後、リヴェリアは一度咳払いをして仕切り直し、ベルに現状とこうなった経緯について話し始めた。

曰く、今ベルがいるのは【ロキ・ファミリア】の本拠地（ホーム）、『黄昏の館』にある客室の一つであり、時間帯は既に夜の遅い時刻となっている、と。
曰く、本来中層にいる筈のミノタウロスが上層に現れたのは、『遠征』帰りの【ロキ・ファミリア】から逃げ出したからである。つまり、ベルがミノタウロスに襲われた原因は【ロキ・ファミリア】にある、と。
曰く、謝罪の意も込めて【ロキ・ファミリア】はベルが目覚めるまで保護することを決め、本拠地（ホーム）へと彼を運び込んだ、と。

「――以上が一通りの経緯だ。我々の不手際に君を巻き込んでしまって、本当にすまな

い」
「や、やめてください！　僕なんかに頭を下げるなんて……。ていうか、助けてもらったのは僕の方ですから、だから、その……こ、こちらこそありがとうございました！」
　頭を下げたリヴェリアに対してベルも彼女に向き直り、倣って同じように頭を下げる。ミノタウロスに襲われた原因が【ロキ・ファミリア】にあると言えど、命を救われたこともまた事実だ。そして、ベルはその恩を棚に上げて【ロキ・ファミリア】を糾弾するような人間ではない。その後、二人の間には謝罪の言葉が飛び交った。
「……なかなか強情だな、君も」
「あはは……すみません」
「まぁ……それらの話は明日、我々の団長や主神を交えてでも構わないだろうか？　今日はもう遅いからな」
「は、はい」
　感謝する、そう言ってリヴェリアは優しく微笑むと無言を貫いていたアイズに声を掛けた。そして二人揃って部屋を出る――直前、「あぁ」と何かを思い出したかのように呟くと、くるりと振り返ってベルに言った。
「そういえば君の【ファミリア】を聞いていなかったな。差し支えなければ教えてもらえないか？　明日、そちらの方に今回の件を伝えにいかねばならない」

「あ……えっと、【ヘスティア・ファミリア】です」

ベルが答えた瞬間、リヴェリアとアイズの動きがピタリと止まった。

▽△▽△

「……まさか彼が噂の駆け出しだったとはな」

ベルの部屋を後にし、廊下を静かに歩いていたリヴェリアの口から不意にそんな言葉が溢れた。それに同意するように頷くアイズ。彼女もまた、ベルがヴィンセント率いる【ヘスティア・ファミリア】に入った例の新人だと知り、驚きを隠せないでいるのだ。なんという偶然だろう。

しかし、心のどこかではその事実に納得していたりもした。ヴィンセントの【ファミリア】に所属しているのなら、新人であってもミノタウロスに一撃を加えられる程強くてもおかしくはない、そんな風に思えたからである。

「リヴェリア、明日どうするの？」

「私は【ヘスティア・ファミリア】の本拠地（ホーム）に行くつもりだ。恐らくあちらはベル・クラネルの安否を知らない筈、早急に連絡する必要があるだろうからな」

「……私も一緒に行っていい？」

いつも通りの無表情でそう尋ねたアイズにリヴェリアは眉をひそめる。
「それは別に構わないが……珍しいな。ダンジョン以外でお前がそこまで積極的に動くなど」
「ヴィンセントのところなら、少し行ってみたい」
「……まぁいい。出発は明日の早朝だ。準備が出来次第私の部屋に来てくれ」
そう言ったリヴェリアにアイズはこくりと頷いた。

▽△▽△

翌日、予定通り早朝から出掛けたリヴェリアとアイズは、まだ人気の少ない通りを並んで進んでいた。【ロキ・ファミリア】の本拠地（ホーム）である『黄昏の館』は、オラリオでも最北端に位置しており、一方の【ヘスティア・ファミリア】の本拠地（ホーム）である『竈火の夢』は、オラリオを走る八本のメインストリートの内、北西と西の通りに挟まれた区画に存在している。遠くはないが近い訳でもない、二つの本拠地（ホーム）の間にはなんとも微妙な距離があった。
やがて『竈火の夢』に到着した二人は本邸の前にある教会の扉を開ける。『黄昏の館』とは違って門番は誰一人としておらず、リヴェリアからすれば少々心許ない気もする

が、この【ヘスティア・ファミリア】の団長は迷宮都市オラリオで最も関わってはいけないと言われるヴィンセントだ。下手に手を出そうものならどんな目に遭うか分からないと巷ではもっぱらの噂であり、そのせいか【ヘスティア・ファミリア】に近付く者はほとんどいないのである。勿論、入団希望者も含めて。

「綺麗……」

「そうだな」

教会の内装を見ていたアイズがポツリと呟き、またリヴェリアもそれに首を縦に振る。だがそれを悠長に見ている暇はなく、二人は教会を抜けて本邸に続く石畳の通路を進む。庭には咲き誇る名前も知らない白い花々、それを撫でるようにふっと風が通り過ぎ――リヴェリアの鼻腔に『月の香り』を運んだ。

「(――いるのか、あいつが)」

歩く足を止めないまま、リヴェリアは庭の方に目を向ける。ゆらゆらと風に揺れる草花と風情を感じさせる石段。おかしな所は何もなく、庭の真ん中で冒涜的かつ珍妙な何かが舞うようにウネウネと動いているだけである。気のせいかとリヴェリアは息をつき、視線を前に戻した。そして二度見する。

「……は?」

「え……?」

　リヴェリアとアイズ、二人の口から同時に困惑の声が上がる。その視線は庭の真ん中、そこに佇む白い装束を着た形容しがたい頭部を持つ謎の物体に向けられている。なんだあれは？　ごく当然の疑問が頭を回る中、その物体は彼女達の存在に気付いたのか、やけにしっかりとした足取りで二人の下にやって来た。それが動く度、何故か腕の辺りからヌチャ、ヌチャと湿ったような音が聞こえる。
「こんな朝からなんの用だ？」
「!?　喋った……」
「その声……まさか……ヴィンセントか？」
　リヴェリアの疑問にその謎の物体――ヴィンセントは触手の巻き付いた腕を組みつつ肯定の意を示す。半信半疑だったリヴェリアはその変わり果てた姿に天を仰ぎ、アイズは見たこともないヴィンセントの様子をまじまじと見つめた。
「それで、一体なんの用だ？」
「あぁ……。詳細は神へスティアを交えて話すが、ベル・クラネルの無事を伝えに来た。彼は今、我々の本拠地（ホーム）にいる」
　その言葉を聞いた途端、ヴィンセントの纏っていた雰囲気が弛緩した。妙な頭のせいで表情は伺えないが、恐らくは安堵しているのだろう。そんな彼の様子に二人も肩の力を抜いた。

「そうか、感謝する。神へスティアもこれで少しは落ち着いてくれるだろう。ベルが帰ってこないと昨日は一晩中愚図っていたものでな」
「いや、こうなった原因は我々にある。償いとして当たり前のことをしただけだ」
ところで、とリヴェリアは一旦区切り、チラリとヴィンセントの全身を一瞥する。
今の彼は白を基調とした服こそ着ているものの、その外見は最早人というよりモンスターに近い。白い樹か、またはとある野菜のような頭部と蠢く蒼白の触手。一体何をしたらこんなことになるのか想像もつかない。何か必要ないものが増えたような、そんな感覚がリヴェリアの頭を襲い、彼女は頭を押さえた。
「……それはどういう状況だ？　ついでに何をしていた？」
「前者の方は返答に困るな。後者については訓練……という程のものでもないか。ただ腕が錆びぬように振るっていただけだ。この武器はとてもダンジョンでは使えたものではないのでな」
「それが……武器？」
不気味な触手にアイズが信じられないとばかりに呟く。その視線を受けてヴィンセントは――表情が分からないのでおよその雰囲気から察するに――ニヤリと笑った。そして彼はこう言う。
――試してみるか？

その一言にアイズに流れる冒険者としての血が疼いた。Ｌｖ．７というオラリオ最強の冒険者からの誘いに、アイズは自身の得物である剣――《デスペレート》に手を掛ける。

「……いいのか、ヴィンセント？　お前から誘うなど、どういう風の吹き回しだ？」

「興が乗ったに過ぎんよ。ベルの無事も分かったことだしな。だが全力で暴れられては我々の本拠地（ホーム）が耐えられん。となると……魔法の使用禁止くらいがちょうどいいか」

魔法の使用禁止、それはつまり純粋な腕のぶつかり合いを意味している。神々より【剣姫】の二つ名を授かり、剣の扱いならオラリオ随一とも言われるアイズを前にしても、ヴィンセントの自信は揺らぐことはない。例え彼の得物が武器とも呼べない《ゴースの寄生虫》であっても、己が勝つと確信しているのだ。

「……いいよ、それで」

「決まりだな。リヴェリア、開始は任せる」

鋭い、まるで剣そのもののような空気を纏うアイズを、ヴィンセントは庭の中央に連れ出した。そして対峙、両者の間は約一五Ｍ（メドル）といったところだろう。

静寂が響く『竈火の夢』。そこにリヴェリアの合図が木霊し――アイズが風のように駆けた。

「ふっー！」

突き出された刃はかの【勇者（プレイヤー）】の一突きにも伍する速度を有していた。だがヴィンセントはそれを紙一重で躱し、アイズへと右腕の触手を伸ばす。それらを斬り払い後退するアイズ、顔を上げた彼女が見たのは凄まじい速度で接近する異形の姿だった。両の腕の触手がうねる。

「（動きが……読めないっ……！）」

右と左で三本ずつ、合計六本の触手による攻撃を捌きながら、アイズはその表情を歪ませた。緩急をつけたその挙動は独特かつ複雑で、更に変則的に迫る触手は斬れども斬れども再生する。それだけならまだ対処のしようもあっただろう。

しかし相手はあのヴィンセント、オラリオの頂点に立つ【猛者（おうじゃ）】を真っ正面から戦って下す正真正銘の怪物だ。莫大な戦闘経験によって培われた直感と技術はアイズの遥か上をいき、研ぎ澄まされた観察眼は晒された隙を決して見逃さない。絡め取るように牙を向いた触手をアイズは斬り、避けて――瞬間、ヴィンセントの蹴りが腹に入った。

「がっ……!?」

見切ることさえ出来ず吹き飛ばされたアイズ。彼女はそのまま体勢を立て直す暇すらなく、伸びてきた触手に捕まった。首と両手の三ヶ所をヴィンセントの左手で押さえ

られたアイズは、反撃するどころか満足に動くことすら儘ならない。
　ここで彼女の魔法である【エアリアル】を使うことが出来れば打開も容易なのだが、首を絞められたことで声は出せず、何よりもこの場では魔法の使用は禁止されている。アイズがなんとかしようともがく中、ヴィンセントは右手の触手をまとめて一本の槍のように尖らせた。
　あれを受ければアイズは――死ぬ。
「っ……！」
「……勝負有りだな」
「あぁ。ヴィンセントの勝ちだ」
　濃厚な死の気配に体を強張らせたアイズに対し、ヴィンセントは勝ち誇るでも訳でもなく淡々と事実を告げ、リヴェリアもまたそれを認めた。同時にしゅるりとアイズを拘束していた触手がほどかれ、彼女はごほごほと咳き込んだ。
「さて……一先ずは神へスティアも交えて貴公らの話を聞くとしようか」
「分かった。アイズ、行くぞ。立てるか？」
「……うん」
　リヴェリアの手を借りて立ち上がるアイズ。その金色の瞳は先行して歩き始めたヴィンセントに向けられていた。彼が本気ではないことは明らかであり、その背はあま

りに遠く、追い付くどころか触れることすら出来ない。
実力の差を痛感した。
「(もっと……強くならなきゃ)」
少女、アイズ・ヴァレンシュタインは一人目を伏せ、見えないところで拳を強く握り締めた。

第９話

　窓から差し込む柔らかな朝日に、ベルは眉をひそめながらゆっくりと瞼を上げた。寝起き特有の気怠さと眠気に欠伸を一つ溢し、まだ完全に開いていない目で部屋を見渡す。『竈火の夢』にある自室とは違う部屋、しかしベルは眠る直前に聞いたリヴェリアの言葉をしっかりと覚えていた。

「(『黄昏の館』……【ロキ・ファミリア】の本拠地(ホーム)……)」

　迷宮都市オラリオの誇る二大派閥の一方、それが【ロキ・ファミリア】だ。冒険者の数と質、どちらも数ある【ファミリア】の中で随一と言われており、総合的な力はあの【猛者(おうじゃ)】率いる【フレイヤ・ファミリア】にも劣らない。ベルはエイナよりそう教わっていたが、何よりもあのヴィンセントが【ロキ・ファミリア】の実力を認めていたことが、彼としては印象的であった。

　そして、そんな【ファミリア】の本拠地(ホーム)に自分がいる理由は？

「(……勝てなかったんだ、僕は)」

　ミノタウロスと戦い、敗北したから。ベルは込み上げる悔しさに布団をぎゅっと握り締めた。逃げることの出来ない戦わざるを得ない状況で、その相手がＬｖ．２だったの

だから仕方ない、などと言い訳するつもりはない。あれは間違いなく自分の実力と経験の不足が原因だった。今回は奇跡的に助けられたものの、恐らく二度と同じようなことは起こらないだろう。

「……強く、なるんだ」

なりたい、ではない。

強くなるのだ、と。

冒険者として生きていく以上、格上の相手と戦うことは避けて通れない。ならばベルが出来ることは一つ、負けぬように強くなることだけだ。ミノタウロスに蹴り飛ばされ、満身創痍となった際に感じたあの惨めさ、あんな思いをするのはもうごめんだった。

ベッドで横になりながらぼんやりと虚空を見つめるベル。そんな彼だったが、不意に扉の外から聞こえ始めた話し声に、ビクッと体を強張らせた。壁に遮られた声は小さく、その内容を聞き取ることは出来ないが、声の高さからおおよその性別くらいは分かる。若年と中年の男性二人と、そして女性が一人だ。そこまでベルが判断したところで、数度のノックが部屋に木霊した。

「えっと、どうぞ」

ベルが答えると僅かな間の後、扉が開いて三人の男女が入ってきた。金髪の小人族（パルゥム）に立派な髭を蓄えたドワーフ、そして朱色の髪を一つにまとめた糸目の女性だ。彼女の纏

う雰囲気、それは神々が放つ『神威』と呼ばれるものであり、ベルは彼女がこの【ファミリア】の主神――ロキなのだとすぐに察した。
「良かった、もう起きていたんだね？」
「はい。なんか、色々お世話になったみたいで……ありがとうございます」
「いや、気にすることはない。お前さんが怪我を負ったのも、元を辿れば儂らが原因じゃからのう」
　ガハハッ、と豪快に笑うドワーフにつられてベルも笑みを浮かべた。そんなベルにロキは首を傾げ、まじまじと彼を観察する。
「なんや、ドチビの眷族や言うからどんな奴やねんと思ったら、めっちゃ普通の子やんか。ヴィンセントみたいなんやと思っとったけど、これはちょっと拍子抜けやな～」
「ロキ。すまない、こちらの主神が失礼なことを……」
「あ、いえ、大丈夫ですよ」
　頭を下げた小人族（パルゥム）にベルは気にしていないと苦笑する。それにロキは機嫌を良くしたのか、「ええ子やなぁ～」と笑顔のまま彼の頭を撫で始めた。
「とりあえず自己紹介しとこか。ウチはロキ！　見ての通りここの主神や！　宜しくな～」
「【ヘスティア・ファミリア】、ベル・クラネルです。宜しくお願いします」

「僕はフィン・ディムナ。【ロキ・ファミリア】の団長をさせてもらっているよ。宜しく、クラネル君」
「儂はガレス・ランドロックじゃ。宜しく頼むぞ、若造よ」
ベッドで横になったままロキを初めとして、フィン、そしてガレスと握手を交わすベル。簡単な挨拶を済ませた三人と一柱だったが、最初にフィンが真面目な雰囲気を作り始めたことで、緩んでいた表情を引き締めた。
「さて……ベル・クラネル君、昨日もリヴェリアから言われただろうが、改めて僕達は君に謝罪をしたい。無関係の君を巻き込んで危険に晒し、そして怪我まで負わせてしまって本当にすまなかった。壊れた装備は全て我々が弁償する。他にも何かあれば遠慮せず言ってほしい」
フィンは頭を下げた。その様子をロキとガレスは何も言わず、口を結んで見守っている。ベルもまた彼女らと同様にフィンを見つめ――やがて、静かに首を横に振った。
「ディムナさん、僕がボロボロになったのは貴方達のせいじゃない。僕が弱かったからです。僕がミノタウロスを倒すことが出来ていれば、こんなことにはならなかった。ですから、謝るのは僕の方です。色々ご迷惑をお掛けして、本当にすみませんでした」
「ンー……倒せていたら、か。しかし君はまだ駆け出しのＬｖ．１だろう？　ミノタウロスを相手するには少し無理があるんじゃないかな」

そんなフィンの言葉にベルは頭を上げた。そして彼の目を見据え、告げる。
「ディムナさんが僕と同じ立場なら、きっと負けても仕方なかったなんて言いませんよね？」
瞬間フィンと、そしてガレスがはっとなってベルを見つめた。自分が格上の相手と戦い、仮に敗北したとして、それを「相手が格上だったから仕方ない」などという言葉で片付けるだろうか？　答えは当然否だ。そんなことは冒険者としてのプライドが断じて許さない。
フィンは内心で無意識のうちにベルを軽んじていたことを恥じた。彼は確かにまだ駆け出しの新米だが、それ以前に自分と同じ冒険者なのだ。そこにレベルは関係ない。
「ぷっ……あっはっはっ！　これは一本取られたなぁフィン！　自分、誇ってええで！　ウチの【勇者（ブレイバー）】を口で負かした子なんて、このオラリオにも数える程しかおらんからなぁ！」
「うむ……すまんなぁクラネル。小僧と思って侮っておったわ」
「あっ、いえ……！　こっちこそ生意気なこと言ってすみません！」
「謝る必要はないよ、クラネル君。悪かったのはこちらの方だ。重ね重ね、申し訳ない」
かの有名な【ロキ・ファミリア】の幹部に口を利いたことに、今更ながら顔を真っ赤にさせたベル。フィンを正面から納得させた少年がそんな風になっているのを見たロ

キは、目尻に涙を浮かべながら腹を抱えて笑い、フィンとガレスの二人はふっと優しく微笑んだ。

「さて……クラネル君の考えは分かったし、理解も出来る。ただ、やはり事の原因は僕達【ロキ・ファミリア】の方にあるからね、せめて装備品の弁償くらいはさせてもらえないかな？　何もしないままでは流石に立つ背がないんだ」

「えっと……じゃあ、お願いします」

【ロキ・ファミリア】の【勇者（ブレイバー）】にここまで言われては断ることも出来ず、ベルは彼の言葉にこくりと頷いた。ミノタウロスとの戦いにおいてベルの装備品――特に防具――はもう使い物にならない程に潰れてしまっている。全てを補うとなれば二〇〇〇〇ヴァリス以上の出費となるだろう。まだ駆け出しのベルにとってその金額は決して安いものではなく、故に彼はフィンの厚意に甘えることにしたのだ。

妥協点を見出だしたことで決着した二人の会話。そのタイミングを見計らい、ロキはニヤリといたずらっぽく笑いながらベルにそっと近付いた。他の三人は何事かと彼女へ視線を向ける。

「なぁ、ちょっと聞きたいことがあんねんけど――」

口を開いたロキだが、その台詞が最後まで言われることはなかった。突如部屋の扉がノックもなしに開かれ、血相を変えたアマゾネスの少女が飛び込んで来たからだ。

「フィン！　大変大変！」
「ティオナ、一体どうしたんだい？」
「今ヴィンセントとヘスティア様がここに来たんだけど……ベートがいきなり喧嘩売って中庭で暴れ始めちゃったの！」

△▽△▽

ベート・ローガにとってヴィンセント・ローズという男は――本人は頑なに認めようとはしないが――ある種の目標とも呼べる存在だ。
Ｌｖ．７という全冒険者の頂点に座し、他の有象無象を歯牙にも掛けない圧倒的な力の持ち主。その姿は実力主義者であるベートにとって、理想の体現であると言っても間違いではないだろう。
だが、だからこそベートは、ベルが【ヘスティア・ファミリア】の冒険者と聞いた時、どうしても納得出来なかった。
ミノタウロスに敗北し、満身創痍まで追い詰められていた弱者（ベル）が、絶対強者（ヴィンセント）の下にいるということが。
自分勝手な言い分であるということはベートも理解している。これは他所の【ファミ

リア】のことであり、【ロキ・ファミリア】に所属するベートが口出しすることではないのだと。しかし頭では分かっていても、それを認めることが出来るかは別の問題だ。

故に、ベートは『黄昏の館』を訪れたヴィンセントに問うた。その隣には彼の主たる女神やリヴェリア、そしてアイズの姿があったことからベートらしからぬ遠回りな言い方で。

――お前はあの新米をどう思ってるんだ？

その言葉にヴィンセントは答えた。素質を持つ稀有な存在であると。今はまだ脆弱な取るに足らない少年ではあるが、彼の意志次第では大きく飛躍するやもしれぬと語ったのだ。

それは、ベートが望んだ答えではなかった。

「（ふざけんな……）」

認めない。認められる訳がない。素質を持つ稀有な存在だと？　その素質とやらが何かを意味するかは分からないが、それではまるで己には素質がないかのような言い方ではないか。

「（俺があのガキに劣るだと……？）」

そんなことは絶対にあり得ない。あってはならないのだとベートは心の内で叫んだ。リヴェリアと、そして通りかかったティオネ・ヒリュテの制止を振り切り、普段の彼な

らば絶対に言わないであろう安っぽい挑発でヴィンセントを中庭にまで引き摺り込むと、持てる力の全てで以て彼に襲い掛かる。

素質の有無など関係ない。

ベート・ローガは強者なのだと証明するために。

自覚せぬ嫉妬に駆られ、ベートは自身の最大の武器である蹴りを何度もヴィンセントに放った。身体能力に優れた狼人（ウェアウルフ）であるが故に、単純な速度ならば【ロキ・ファミリア】最速とも言われる彼の蹴りは、大抵の者ならば視認することすら出来ない程のスピードを有している。荒々しくも強烈な蹴りを何度も繰り出すその様子はさながら小さな嵐。巻き込まれれば最後、無傷で逃れることは不可能である。

目の前の例外を除けば。

「くっ……！」

攻め立てているにも関わらず一向に当たらない攻撃に、ベートの口からは苦しげな声が溢れる。どれだけ攻めようがヴィンセントの無表情のまま、反撃するでもなく淡々と避け続けるだけだ。届かない、浮かび上がったそんな気持ちを振り払うように、ベートは蹴撃の乱舞を更に加速させた。今の彼から放たれる覇気は凄まじく、二人を見ていたリヴェリアとアイズをして、その体に震えを覚えさせる程であった。

しかし、ベートの放った渾身の一撃がヴィンセントの左手で受け止められたその瞬間

から、状況は一転する。

「……この程度か？」

その言葉にベートは怒りを覚える暇もなく、頭を過った最悪の事態を回避すべく全力で後ろに跳んだ。チラリと確認した右足はキチンと繋がっている。そのことに彼は安堵した。あと僅かでも遅れていれば間違いなく右足と体が離れればなれになっていたことだろう。そう考えた途端にゾクリとベートの背に悪寒が走った。

「さて、今度は私からいかせてもらおうか。あれだけの啖呵を切ったのだ、簡単に沈んでくれるな【凶狼(ヴァナルガンド)】」

「……はっ、やれるもんなら――」

やってみろ、と。ベートがその台詞を最後まで言い終えることは出来なかった。先程まで二〇M(メドル)はあった距離を、ヴィンセントが一瞬で詰めてきたからだ。警鐘を鳴らす本能に従い、ベートはすぐさま体を後方に反らした。その刹那、彼のいた場所をヴィンセントの《仕込み杖》が通り過ぎる。

体を反らした勢いを使用したバク転で距離を稼ぐベート。しかしヴィンセントから逃れることは出来ない。単純なスピードでは向こうの方がベートを上回っているからだ。仕切り直しの暇も与えぬ連続攻撃が、少しずつベートに傷を追わせていく。

「くっ……ぉおおおおおおおおおおおおお!!」

ベートは吼える。このままでは終われない。一方的になぶられ、成す術なく敗北などしてたまるかと。せめて一撃、その一撃を確実にヴィンセントに当てるために、ベートはただ迫る猛攻を耐え続けた。そして――、

「っ！　食らいやがれぇ！」

一瞬。それは仕込み杖を振るった際にほんの一瞬だけヴィンセントが見せた、隙とも呼べない隙だった。しかしベートの優れた目はその一瞬を見逃ず、またそこに全てを賭けた。持てる力を全て使ったその蹴りは文字通り必殺。ベートはヴィンセントに一矢報いることが出来たと、内心でニヤリと笑った。

それが罠であるとも気付かずに。

「なっ……!?」

当たると確信していた蹴撃が空を切ったことで、ベートの表情が驚愕に染まった。彼は同時に悟る、この迷宮都市オラリオ最強の男が、自分程度に分かるような隙を晒す訳がないのだということを。つまり先の隙はただの餌に過ぎず、ベートはまんまとそれに食いついてしまったのだ。

そして全力の一撃を外したことにより、今度はベートがヴィンセントの前に隙を晒す

こととなる。ベートがヴィンセントの隙を見逃すことはあれど、その逆は万が一にもあり得ない。振るわれた銀の杖は寸分違わずベートの下顎を的確に打ち抜き、これにより脳震盪を起こしたベートは体を支えられずにガクリと膝を折った。そしてそのまま前に倒れ始める。

「が……ぁ……！」

崩れ落ちるベートが最後に見たのは、仕込み杖を片手に翡翠色の冷たい瞳を向けるヴィンセントの姿。やがて歪む視界ではそれさえも捉えることが出来なくなる。徐々に暗転していく意識の中で、彼はただ己の無力を噛み締めた。

「畜……生……」

呻くようにベートは悪態を残し、バタリと地に伏せて意識を失った。

第１０話

『竈火の夢』本邸にある自室にて、ヘスティアは珍しく眉間に皺を寄せ、手元にある羊皮紙に目をやっていた。そこに書かれているのは彼女の【ファミリア】にほんの半月前に加わった少年、そして現在は【ロキ・ファミリア】から受け取った賠償金を片手に、バベルへ装備の新調をしに行っているベル・クラネルの【ステイタス】である。

ベル・クラネル

Ｌｖ．１

力　：Ｈ　１２７→１３５

耐久：Ｈ　１４１→１７０

器用：Ｈ　１２５→１３４

敏捷：Ｈ　１３２→１５１

魔力：Ｉ　０

《魔法》

【】

《スキル》

【憧憬切望(リアリス・フレーゼ)】
・早熟する。
・懸想(おもい)が続く限り効果持続。
・懸想(おもい)の丈に応じて効果上昇。
「【憧憬切望(リアリス・フレーゼ)】……早熟するなんて効果は聞いたことがない。これは間違いなく『レアスキル』だ。こんなのをベル君が発現させるなんて……」

ヘスティアはポツリと呟き、頭の中にベルの姿を思い浮かべた。深紅(ルベライト)の瞳と処女雪のように白い髪の組み合わせは、まだ幼さの残る容姿も相まって兎を彷彿させる。一見するとやや頼りなさそうな印象を受けるが、それはあくまでも外見の話だ。ヴィンセントという先達による指導の影響もあってか、内面に関しては冒険者となって僅か半月で驚く程たくましくなっていた。

しかし、普通に成長しているだけでは『スキル』というものは発現しない。『スキル』とは人という器に刻まれた証のようなものであり、その人物や遺伝子に染み付いた在り方、また抱く強い願いが形を得たものである。ヴィンセントの持つ【狩人之業(ハンテッド・ナイトスア)】がいい例だろう。あれは彼の”狩人”としての在り方が生んだ、彼のみが有する『レアスキル』だ。そして、ベルの【憧憬切望(リアリス・フレーゼ)】は紛れもなく後者に該当する。

閑話休題。

そんな『スキル』をどうしてベルが発現したのかと考えれば、その原因は恐らくたった一つしかない。数日前に起きた例のミノタウロス騒動だ。ミノタウロスに敗北して満身創痍となっていたベルは、駆けつけたアイズ・ヴァレンシュタインに助けられた。その時に見た彼女の姿に強烈な憧れを抱き、『スキル』を発現させたに至ったのだろう。その憧憬は彼の師であるヴィンセントにも向けられているに違いない。

――神様、ヴィンセントさん

――僕、強くなりたいです

不意に、【ロキ・ファミリア】の本拠地（ホーム）からの帰り道にベルが口にした、決意の言葉がヘスティアの頭を過る。あの時のベルは今までにないくらいに真っ直ぐな目をしていた。ミノタウロスに打ち負かされた悔しさを乗り越え、彼は本気でヴィンセント・ローズとアイズ・ヴァレンシュタインに追い付くのだと決めたのだろう。

「……うん。僕も決めたよ、ベル君」

ヘスティアは決心した。大切な眷族が強くなろうとしている。彼はとてつもなく険しい道を進むと決めたのだ。ならば主神たる自分はそれを全力で支え、そして力になってあげようと。

腰掛けていたベッドから勢いよく立ち上がったヘスティアは、羊皮紙を握り締めたままとある場所を目指し始める。彼女が辿り着いたのは『竈火の夢』の地下、そこに設け

られたヴィンセントの工房だ。
「ヴィンセント君、入っていいかな？」
「あぁ」
　その言葉に分厚い扉を開け、中に入るヘスティア。彼女は広々とした工房をぐるりと見回し、その中の一角にある作業台を前に座るヴィンセントを見つけた。その隣には人形の姿もある。
　ヴィンセントの手元をヘスティアが覗き込むと、そこでは炎のような紅蓮の宝石が丁寧に削られ、磨かれていた。これまでの経験からかその作業に淀みはなく、程なくして彼の手の中で一つの指輪が完成する。紅蓮の宝石が真ん中に嵌まり、その周りを金色の縁で囲ったシンプルな作りである。
　しかしこの指輪はただの指輪ではない。迷宮都市オラリオでも数える程しか存在しない『発展アビリティ』、『神秘』を持つヴィンセントが作った正真正銘の魔道具（マジックアイテム）だ。具体的な価値は不明だが、仮に市場に出たとすれば何千万ヴァリスは下らない値段になるだろう。
「お疲れ様です、狩人様」
「お疲れ様。それ、どんな指輪なんだい？」
「装備した者に炎への耐性を与える予定で作ったが……それだけでは少々つまらんので

な。炎を吸収する力も追加しておいた。どの程度の炎までなら吸えるかは分からんが、『ヘルハウンド』程度なら問題なかろう」

ふぅと息をつきながらヴィンセントは脱力し、椅子の背凭れに体を預ける。

「ほ、炎を吸収しちゃうんだ……。相変わらず凄い物を作るね、君は。で、これは誰にあげるの？　まさか君が使うんじゃないよね？」

「誰にも渡さんよ。ダンジョンで偶然素材を見つけたから加工したに過ぎん。精々、新作としてアスフィに見せてやるくらいだ」

それで、と。作業台の上で輝く指輪を眺めていたヴィンセントだったが、ふと思い出したようにヘスティアを見上げた。

「わざわざここまで来たのは何か用があったのだろう？」

「うん。これを見てほしいんだ」

そう言ってヘスティアはヴィンセントにベルの【ステイタス】の書かれた羊皮紙を渡した。それを受け取ったヴィンセントは後ろから覗き見る人形と共に目を通していく。そして『スキル』欄に記された【憧憬切望（リアリス・フレーゼ）】に気付いた瞬間、「ほぉ……」と感心したかのような声がその口から溢れた。

「狩人様……これは……」

「早熟する、か。まさかこのような『スキル』を発現させるとは予想外だが……面白い。

全く、ベル(あれ)は私の想像以上の存在だな」

愉快で仕方がないとばかりにヴィンセントはくつくつと笑う。そんな彼にヘスティアはいつにもまして真剣な表情を作り、深く頭を下げた。

「ヴィンセント君。ボクは、ベル君の力になってあげたい。あの子は強くなろうとしてる。だから、ボクはそんなベル君を応援してあげたいんだ。でも、『神の力(アルカナム)』の使えないボクに出来ることなんてほとんどない。だから――」

頭を下げたまま、ヘスティアは言葉を紡ぐ。それを聞くヴィンセントは無言のまま、ただその言葉に耳を傾けている。

「どうか、ボクの我が儘に力を貸してくれないか……？」

今にも消えてしまいそうなか細い声で、ヘスティアはそう懇願した。

本来ならば万能な神という存在だが、しかしこの下界では『神の力(アルカナム)』の行使が一部――人に恩恵を与える、【ステイタス】の更新等――を除いて禁止されている。それはヘスティアだけでなく、ロキやフレイヤといった者達も例外ではない。様々な制限によって普通の人間程度の力しか持たない彼、彼女達は、言ってしまえば一柱(ひとり)では何も出来ないのである。

故に神は【ファミリア】を創設し、眷族に頼るのだ。

「――クッ、ハハハハ……！　畏まって何を言い出すかと思えばそんなこととはな。力

を貸せ、か。そんなことは言われるまでもない」
「っ……そ、それじゃあ……！」
「あぁ。私は貴公の眷族、ならば主神たる貴公に従うなど当然のことだ」
　ニヤリと不敵な笑みを見せるヴィンセントに、ヘスティアの目頭には涙が浮かんだ。自分の我が儘に彼を付き合わせてしまうことに罪悪感はある。だが、何よりも彼が自分に協力してくれることが彼女は嬉しかったのだ。
「くずっ……ありがとう、ヴィンセント君！　君のような子がいてくれて、ボクは幸せ者だよ！」
「大袈裟だな。それで、私は何をすればいい？」
　歓喜の気持ちを全面に出して跳び跳ねていたヘスティアは、ヴィンセントのその一言に動きを止め、こほんと一度咳払いをする。そして再び真剣な面持ちに切り替えると、ヴィンセントの翡翠色の瞳を正面から見据えた。
「武器を作ってほしいんだ。どんな窮地でも絶対に砕けない、ベル君を助けてくれる最高の相棒を」
「武器、か……。いいだろう、神匠と謳われる貴公の友には及ばんが、我が血の業、その一端をお見せするとしよう」
　だが、とヴィンセントは言葉を区切った。その口から小さな溜め息が溢れる。

「すまんな。ベルの武器を打つとなると、それに相応しいだけの素材が今この工房には足りん。取りに行くのは容易いが一日……いや、二日は必要になるか」
「謝らなくてもいいよ。今日は君が協力してくれると分かっただけで十分さ」
そう言ってヘスティアは微笑んだ。そんな彼女にヴィンセントもまたつられるように口元を緩め、作り上げた赤い宝石の指輪を錠付きの小箱に納めた。それと同時に新しく七色の宝石の指輪を手に取ると、首を傾げるヘスティアの掌の上にポトリと落とした。
「？　……これは、なんだい？」
「厄除けの指輪だ。私の記憶が正しければ、貴公は今晩の『神の宴』に参加するのだろう？　不要とは思うが念のためにな」
「ん……あぁ!?　そうだっ、忘れてた！　マリー君、今何時だい!?」
「十六時過ぎです、ヘスティア様」
こうしちゃいられない！　そう叫んだヘスティアはバタバタと工房を後にした。相変わらずどこか抜けている、敬愛する主神の様子にヴィンセントは思わず苦笑し、すぐさま人形に彼女を追うよう指示を出した。それに人形も従い、一度頭を下げてから工房を出ていく。
そうして一人残ったヴィンセントだが、不意に放置されたままの羊皮紙に気付き、そ

れを回収した。【ステイタス】とは秘匿すべきものであり、ましてやベルには【憧憬切望（リアリス・フレーゼ）】という前代未聞の『レアスキル』がある。これを知った本人が天狗にでもなったとしたら、今まで訓練に付き合ってきたヴィンセントからすれば目も当てられないことだ。

「……まだ教えるべきではないか」

【憧憬切望（リアリス・フレーゼ）】の存在を今のベルに知らせるメリットとデメリット。両者を天秤に掛け、デメリットが勝ると結論付けたヴィンセントは、棚より手にした『発火ヤスリ』で羊皮紙を擦り、一瞬で真っ黒な燃え滓と灰に変えた。それらを踏みにじり、彼は黒のコートを翻す。

ベルの武器を打つと決めた、ならば早急にその素材を取りに行くべきだと判断して。

「ベル、見せてみろ。お前の可能性を――」

▽△▽△

その夜、ヘスティアが『神の宴』に出席し、ヴィンセントがダンジョンの深層を目指して進んでいる頃、ベル・クラネルはある店の前で立ち往生していた。そこは迷宮都市オラリオを八等分するように走るメインストリート、その中の西通り沿いに立つ大きな酒場だ。酒場は周りにある建物と比べても大きく、また中からは客である冒険者達の笑

い声が響いてくる。

そんな酒場の名前は――『豊饒の女主人』という。

「結局、断れず来ちゃったなぁ……」

そう呟くベルが思い出すのは今から四時間程前のこと。ミノタウロスに壊された装備を新調すべく、彼は【ヘファイストス・ファミリア】のテナントに向かったのだが、ちょうどこの『豊饒の女主人』に通り掛かった際に、とある少女に呼び止められしまった。薄鈍色の髪を後ろでまとめた、見た目麗しい可憐な少女である。

そこで足を止め、彼女の言葉に耳を傾けてしまったのが運の尽きだ。巧みな話術と乞うような態度にあれよあれよという間にベルは誘導され、気付けば今晩の食事をここで戴くという約束をさせられていたのだ。断るタイミングを完全に逃した彼は、少女の満面の笑顔にただ曖昧に笑うことしか出来なかった。

「一応幾らか稼いできたから大丈夫だとは思うけど……」

ベルが手をやった腰の巾着には現在、約一四〇〇〇ヴァリスが入っている。これは防具代に使った【ロキ・ファミリア】からの謝礼金の余りに加え、金を使うなら稼げばいいと考えたベルが、ダンジョンの4階層までの敵を倒して得たものだ。

ちなみにこの攻略には、新しく購入した純白のライトアーマーの使い心地を確かめる意味も含まれており、そちらの結果の方も上々であった。体の要所を守るライトアー

マーは動きを阻害せず、４階層までのモンスターの攻撃では傷一つ付かないと耐久性も優れている。ベル自身もこの防具のことはかなり気に入っており、いつか製作者である『ヴェルフ・クロッゾ』なる人物に会えたらと思う程だった。

「……あっ、ベルさん！　来てくれたんですね！」

「こ、こんばんは」

店の前で佇むベルに気付いたのか、嬉々として飛び出してきたのは件の少女――シル・フローヴァだ。彼女に連れられて『豊饒の女主人』に入った彼は、そのままカウンター席へと案内される。

「やぁ坊や、アンタがシルの言ってたお客さんかい？　なんでもアタシ達を仰天させる程の大食いなんだってねぇ！」

「はぁ!?　なんですかそれ!?」

そんなミアの言葉にベルはぎょっと目を見開き、慌ててシルの方へと視線を向けた。それを受けた彼女はベルから目を逸らしながら「えへへ……」と苦笑する。

「すみません、どうも色々と尾鰭が付いちゃったみたいで……」

「勘弁してくださいよ……。確かにお腹は空いてますけど、そんなたくさんは食べられませんからね？」

「はい！　でもミアお母さんの料理は本当に美味しいので、お腹いっぱいになるまで食

べてくださいね？」

ニコニコと笑みを浮かべながらこてんと首を傾げたシルに、ベルは小さく溜め息をつきながら差し出されたメニューを開いた。そこに並ぶ料理の値段はどれもこれも数百ヴァリスと――一度の食事は五〇ヴァリスもあれば十分足りることを考えれば――かなり高額だ。幸いにも今のベルの懐は暖かいが、それでもあまりに高い料理を頼むのは無駄遣いというものだろう。

そうして悩むこと数十秒、彼が選んだのは無難にパスタとスープ、それとサラダだった。値段の合計は一〇〇〇ヴァリス、まだ金銭に余裕のないベルは思わず、他所で頼めばこの一割程度で済むのにと内心で溢した。ちなみに本拠地（ホーム）で食べればただであることは言うまでもない。

「ほら、アンタは細いんだからしっかり食べて大きくなるんだよ！」

「あ、ありがとうございます……」

ミアのそんな言葉と共にドンと勢いよくカウンターに料理が並べられる。その中には注文していない筈の醸造酒（エール）までもが一緒に出されているが、ベルは深く考えるのをやめて大人しく料理へと手を伸ばした。

「（あ、美味しい）」

パスタを一口噛み締めたベルはその味に素直に感心した。なるほど、伊達に高い値段

をしていない。これならば三〇〇ヴァリスを払ってでも食べる価値はあるだろう。彼は口に出さず一人納得した。

そうしているうちにだんだんと余裕が出来てきたのか、ベルはチラリチラリと他の客達に目をやり始める。豪快に酒を飲むドワーフ、丁寧に料理を口に運ぶエルフ、仲間と笑い合うヒューマン、年も生まれも違う彼等に共通しているものがあるとすれば、皆が幸せそうな笑顔であるということだろうか。

――凄いな

ポツリと、ベルの口から感嘆の声が溢れた。

「ベルさん、どうですか？　楽しんで頂けてます？」

「はい。いい店ですね、ここは」

でしょう、とシルは笑った。それは先程までとは違う、本心からの笑顔だった。

「私、人とお話をしたり、触れ合ったりするのが好きなんです。十人十色、なんて言葉がありますけど本当にその通りで……色んな人と関われば、それだけ色んな発見があるんですよ」

だから、と。シルは運んできた椅子をベルの隣に置くと、そこに座って彼の目をじっと見つめた。

「ベルさんのお話も、色々聞かせてください」

身長の差もあってか、自然と上目遣いになったシルのお願いに、ベルは照れる感情を誤魔化すように頬を掻く。異性への耐性はないが興味は十分にあり、加えて祖父からの熱心な教育を受けて育ったベルに、シル程の美少女からのお願い――しかも上目遣いでの――を断ることなどとても出来なかった。ベルの脳裏に一瞬、魔性という言葉が浮かんだ。

そして、楽しげに話し合うそんなベルとシルの様子を、給仕に勤めていたエルフの麗人が優しく見守っていた。

第１１話

ベル・クラネルの扱う武器はショートソードとナイフの二本である。

オーソドックスで使い勝手の良いこれらの武器は、冒険者となってまだ一ヶ月と経たないベルにはピッタリであり、また一撃の威力ではなく手数を求めた彼の戦闘スタイルとも上手く噛み合っていた。元々ナイフだけでは心許ないというヴィンセントのアドバイスに従い、実践し始めた二本の得物を使うやり方ではあるが、今ではすっかり本人が気に入り、この道を極めたいとまで言っていたのは記憶に新しいことである。

これらのことから、ヘスティアからの頼みとしてベルの武器を依頼されたヴィンセントが、この二つの武器を選んだのも当然のことと言えよう。

武器の作製を任されたヴィンセントは、これら二本を作るためにとある金属の使用を決めた。星に由来する希少な隕鉄――に非常に近い性質を持つ特殊な金属を含んだ合金である。ヘスティアからの要望は『どんな窮地でも絶対に砕けない、ベルを助けてくれる最高の相棒』。それを裏切らぬよう、ヴィンセントもまた用意出来る最高の素材を、厳重にロックされた金庫から取り出してきたのだ。

しかしこの合金のインゴットの加工は並みの鍛治師（スミス）ではまず不可能、一流の鍛治師（スミス）で

すら相応の集中力と技術、そして設備の求められる程である。普通の炉の炎では鍛造が出来るようになるまでインゴットの温度が上がらず、更に生半可なハンマーでは伸ばそうと叩いた方が砕ける始末なのだ。この二つの問題で、特に前者によって躓く者は多い。

しかしそれを可能にするものがヴィンセントにはあった。

そう、ヘスティアの存在である。

ヘスティアは竈と炉を司る神だ。ヘファイストスにとっての鍛治のように、ことその分野において彼女の右に出る者は人々の住む下界どころか、神の住む神界にも存在しない。彼女の灯した炎は例外なく聖火となり、その熱はインゴットの鍛錬を容易にする。元々ヘスティアから頼み込んだことだっただけに、彼女はヴィンセントへの協力を惜しまなかった。

隕鉄の合金。

聖火。

この数日でヴィンセントが集めた大小様々な血石。

そして――ヘスティアの髪と『神血（イコル）』、彼女自身の【神聖文字（ヒエログリフ）】。

それらの要素を全て内包し、作り上げられた仕掛け武器は、主神（ヘスティア）から眷族（ベル）に与えられた祝福――《寵愛の刃》と名付けられた。

△▽△▽

「それじゃ、行ってきます！」
「あぁ」
「お気を付けて、ヘスティア様」
　布に包まれた寵愛の刃を背負い、疲れなど知らぬとほくほく顔で出掛けていくヘスティアを、ヴィンセントは人形と共に見送った。彼女曰く、これから一足先に『怪物祭（モンスターフェイリア）』――毎年【ガネーシャ・ファミリア】が主催して行われる催し。闘技場を一日貸し切ってダンジョンから運んできたモンスターを調教する――に向かったベルと合流して祭りを楽しみ、その最後に武器をプレゼントするつもりとのことだ。
　それを聞いた時には回りくどいと感じたヴィンセントだったが、「この方が絶対いいよ！」と依頼主に熱弁されては大人しく頷く他になかった。完成した際には何度も何度も頭を下げ、感謝の言葉を残していった主神の背中を、ヴィンセントと人形は見えなくなるまで見つめ続ける。
「狩人様は、今日はどうされるおつもりですか？」
　不意に投げ掛けられた人形の問いにヴィンセントは「ふむ……」と唸った。先程ヘス

ティアが、そして今朝からベルが向かった『怪物祭(モンスターフィリア)』だが、彼にとっては特に魅力を感じるイベントではなかったのである。調教する様子を見るより、実際にモンスターと殺し合う方が愉しいからだ。

「……出掛ける出掛けないに関わらず、まずはシャワーと腹ごしらえだな。簡単なものでいい、何か食える物を用意してくれ」

「分かりました」

鍛治という神経を著しく研ぎ澄ます作業を長時間続けたせいか、流石のヴィンセントも今は体が休息を求めていた。汚れた服を脱ぎ捨ててシャワーを浴びた彼は、ズボンに白シャツというラフな格好のまま、人形が用意したトーストとスープ、そしてジャガ丸くんを貪るように胃に収める。

腹が満たされれば次に来るのは眠気である。椅子の背凭れに寄り掛かり、ヴィンセントはふぅとゆっくり息をついた。このまま微睡みに身を委ねようか、そう考えた彼だったが、しかし前触れなく鳴り響いた呼び鈴の音にすっと目を開ける。

【ヘスティア・ファミリア】の本拠地(ホーム)、『竈火の夢』には基本的に客が訪れることは滅多にない。誰も彼もがヴィンセントという人間と関わりたくないからだ。従って、本拠地(ホーム)の呼び鈴を鳴らす者というだけで、誰が来たのかはある程度分かるのである。更に今日は『怪物祭(モンスターフィリア)』が行われているということを考慮すれば、該当する人物はヴィン

セントの知る限り二人しかいない。
「おはようございます、ヴィンス」
「……やはり貴公らか」
　ガチャリと玄関の扉を開けた先で佇んでいたのは案の定、ヴィンセントの想像していた通りの人物だった。空のような蒼色の瞳と薄緑色の髪を持つエルフの麗人――リュー・リオン。そして細工のような銀髪を風に靡かせるヒューマンの女性――アミッド・テアサナーレである。いつもの若葉色の給仕服とも、清潔さを象徴する白の制服とも違う、可憐な私服を今の二人は纏っていた。
「……何の用だ、と聞くのは無粋というものだろうな」
「察しが良くて助かります。さぁ、一緒に行きましょう?」
「残念ながらヴィンスは私が既に予約済みです。今日の彼は私と共に過ごしますので」
　するりと自然な動きでヴィンセントの腕を取ったアミッドは、ふっと勝ち誇ったような笑みをリューへと向けた。すると先程までの雰囲気はどこへやら、一転して不穏な空気が二人の間に流れ始める。その中でヴィンセントは一人で、アミッドの言った予約とはなんだと首を傾げていた。
「……【戦場の聖女（デアーセイント）】、いい加減なことを言わないでもらいたい。そもそも、貴方の仕事はどうしたのです？　ここで現を抜かしている暇などない筈だ。今すぐ自分の【ファミ

リア】に戻りなさい」
「それは貴方にも当てはまると思うのですが？　そちらこそ、ここで油を売っている余裕があるのでしょうか？」
「質問を質問で返すのはやめた方がいい。それと『豊饒の女主人』のことは問題ありません。私はミアお母さんから有給を貰いましたので。お店の方は今頃、アーニャやルノア達が私とシルが抜けた分、馬車馬のごとく働いている筈です」
　至って真面目な表情で語るリューに、ヴィンセントは内心で今『豊饒の女主人』で働いて者達の身を案じた。リューとシルの二人が抜けた穴を補うために、相当な苦労を強いられるであろうことは想像するに難くない。恐らく、今日はろくに休む暇さえも与えられないだろう。
「なるほど。ですが休みを頂いたのは私も同じですよ。仕事の方はディアンケヒト様や他の者達に押し付けて来ましたので心配は無用です」
　そう言ってニコリと微笑むアミッドだが、しかしリューにとって安心出来る要素など一つもない。二人して互いに睨み合う様子はまさに一発触発、加えて彼女達は冒険者としても確かな実力の持ち主だ。そんな両者の間に割って入れる者がいるとすれば――やはり、この男くらいなものである。
「リュー、アミッド」

「「？」」
「今日は貴公らの気が済むまで付き合う。不毛な言い争いはやめろ」
「……分かりました」
「……ヴィンスがそう言うのなら」
　渋々ながら二人を静まらせたヴィンセントは、「少し待っていろ」と言い残して本邸に戻っていく。数分後、再び現れた彼は黒衣に帽子といういつも通りの格好となっていた。
「では行くか」
　そう声を掛けたヴィンセントだが、何故か二人からの返事はない。どうしたと彼が問おうとした瞬間、その両腕を左右からリューとアミッドがガッチリと固定した。
「ヴィンス、貴方はもう少し自分の格好を気にした方がいいと思います。少なくともそれはない」
「同感ですね。せめてこういう時は普段とは違う服を着てほしいものです」
　じっと訴えるような視線をヴィンセントに向けるリューとアミッド。三人がまず初めに行く場所が決まった瞬間だった。

△▽△▽

迷宮都市オラリオには様々な人々が暮らしている。ヒューマンを筆頭に亜人（デミ・ヒューマン）のエルフやドワーフ、小人族（パルゥム）や獣人にアマゾネスなど。普段は種族に関わらず助け合って暮らしている彼らだが、しかし衣装に関することで衝突することは少なくない。エルフにはエルフの、アマゾネスにはアマゾネスのといったように、それぞれの種族が好む毛色というものがあるからだ。

三人がやって来たオラリオの北のメインストリート周辺には、数多の服飾店が所狭しと軒を連ねている。ここら一帯には種族に応じた衣装の専門店が構えられており、先の問題の解決に大きく貢献しているのである。いくつかの商業系【ファミリア】が関わっていることで規模も大きく、服を探すなら北のメインストリート周辺という共通認識すら生まれている程なのだ。

「どうでしょうか？　ヴィンスの髪の色とも合うと思いますが……」

「それでは目立ちすぎるのでは？　もっと落ち着いた色の……こっちの方が彼の雰囲気に合っているかと」

ヒューマン用の衣装を扱う店の一つにて、ああでもないこうでもないと言いながら服を選ぶリューとアミッド。そんな二人の後ろ姿を、ヴィンセントはぼんやりと見つめている。ファッション、コーディネートといったことには門外漢な彼は、どこか居心地が

悪そうに帽子を深く被り直した。
「ヴィンスは何か良さそうな物がありましたか？」
「いや。正直、着飾った自分というものがどうにも想像出来んよ。服装などいつもの狩装束があれば事足りるからな」
　それより、とヴィンセントはリューに目をやる。
「少し意外だな。貴公もこういったこととは無縁だと思っていたが……」
「時々シルの買い物に付き合うことがありますから、きっとそのせいでしょうね。それ以前でも、この手の店にはよくアリーゼ達に連れていかれました」
　リューの口から溢れた今は亡き彼女の知己の名前に、ヴィンセントはただ「……そうか」と答える。二人の間に漂う沈黙、それを破ったのは両手の塞がったアミッドだった。
「？　どうかしましたか？」
「なんでもない。それよりどうした？」
「どう考えてもコート以外の服を着たヴィンスが思い浮かばなかったので、少し妥協して選んでみました。どうでしょう？」
　そう言ってアミッドが差し出したのはロングコートとつばの広い黒のハットである。そのどちらもが戦闘を考慮していない、日常生活で使うための代物だ。試着してみれば似合うのは勿論、普段の尖った雰囲気と血の匂いが幾分か息を潜めたように思われた。

少なくとも今の彼をヴィンセントだと初見で見破ることは難しいだろう。
「動きを阻害しないか、悪くない」
「ええ。似合っていますよ、ヴィンス」
「なるほど。なら……これも合うかもしれませんね」
そんな言葉と共にリューが持ってきたのはシンプルなスカーフだ。それを首元に巻き、姿見の前に立ったヴィンセントは、これが自分かと鏡の中の己を見て思う。
しかし、彼が次に抱いたのはどこか懐かしい既視感だった。つばの広い帽子とスカーフ、そして”狩り”のため調整されたものでないごく普通のコート。彼の脳裏を車椅子の老人と、大鎌による無慈悲な一撃が過る。
「……道理で、思い出す訳だ」
リューとアミッドが不思議そうに見つめるのも気にせず、くつくつとヴィンセントは笑い声を漏らす。
最初の狩人、ゲールマン。
かつて自身が手に掛けた助言者の姿を、今の自分は彷彿させるのだ。
「……どうしたのですか、ヴィンス?」
「いや、ただこれを気に入っただけだ。感謝する」
ヴィンセントは二人に向かってふっと笑った。最初に感じていた居心地の悪さは、も

うどこかに消えていた。

その頃、オラリオの地下にて、
「ふふふっ……さぁ、行きなさい」
ガチャリと錠の解かれた檻から、モンスター達が這い出始める。
「本当はまだ見守るつもりだったけれど……うふっ、バレたらヴィンセントに殺されてしまいそうね」
使ったばかりの鍵束を弄りながら彼女は――『美』の女神は妖艶に笑った。
白と黒。決して混ざり合うことのない二つを孕みながら、それでいて眩しい程の輝きを放つ魂の少年を想って。
「貴方の勇姿で、この私を魅せてちょうだい？」
咆哮が、轟いた。

第12話

外の空気を吸い、大きく咆哮する『バグベアー』。突如街にモンスターが出現したという事態に、市民達は一斉にパニックとなった。逃げ出す者、叫ぶ者、助けを求める者、様々な反応を示す人々にバグベアーは一度唸ると、足音を立てながらゆっくり歩き始める。

バグベアーの出現階層は19階層と深く、Lv.2の冒険者なら三人か四人、Lv.3の冒険者なら二人はいなければ危険な相手だ。今この場にはそれに該当する者はおらず、また『怪物祭（モンスター・フェリア）』という催し物の最中であるせいか、武装している者さえごく少数である。故にバグベアーは悠々と人々の逃げまどう通りを進んでいく。そしてある角を曲がった瞬間――その頭の上半分を一本の矢が吹き飛ばした。

『グ……オオ……！』

ズゥウンと重い音と共にバグベアーは沈み、やがて絶命してピクリとも動かなくなった。それを確認したヴィンセントは手にした《シモンの弓剣》を下ろし、その胸から魔石を抜き取る。

「ヴィンス！」

自分の名前を呼ぶ声にヴィンセントが振り返ると、パタパタと駆け寄ってくるリューとアミッドの姿が目に映った。履いているものが走ることを考慮していない作りのせいか、その動きは僅かにぎこちなく走りにくそうだ。

「いきなり飛び出してどこに行くかと思えば……モンスターですか」

「恐らく『怪物祭（モンスターフェイリア）』で調教するためのものだ。それをどこの誰だかが街に放ったらしい」

「……ヴィンスは、これからどうする気ですか？」

リューの問いにヴィンセントは僅かに考えるような素振りを見せた。帽子の向きを調整し、翡翠色の瞳で彼女と、そして隣のアミッドを見据える。

「……私が動かずともすぐに【ガネーシャ・ファミリア】の者が動くだろう。ならば別に放置しても良かったのだが……神ヘスティアとベルが出掛けている以上、彼女らが狙われる可能性もある」

ヴィンセントの懸念は一つ、先程のバグベアーのようなモンスター――それこそ『ミノタウロス』などよりも強い相手――にヘスティア達が襲われることである。【憧憬切望（リアリズ・フレーゼ）】の影響で急成長を続けるベルだが、明らかに格上のモンスターと、尚且つヘスティアを守りながら戦うことは不可能だ。一番は彼らがモンスターと出会わないことだが、しかしそう上手くはいかないと彼の直感は告げていた。

「リュー、アミッド、この埋め合わせは後日しよう。私は敵を狩る。共に来るも引き返すも、これからどうするかは貴公らの自由だ」
「愚問ですね、ヴィンス。街にモンスターが野放しになっている今、それを私が黙って見ているだけだと思いますか？」
「私は【ディアンケヒト・ファミリア】の一員として、ヴィンスについていきます。どこで誰が負傷しているか分からないなら、治療師（ヒーラー）が必要となる場面もあるでしょう」
　即答した二人の眼差しがヴィンセントに向けられる。そんな彼女達にヴィンセントはただ一言、「感謝する」とだけ言い残すと、すぐさま近くの屋根へと跳躍した。彼に続いてリューとアミッドもまたその背中を追いかける。
「っ、十時の方向に『トロール』、その近くに『バトルボア』です」
　アミッドの言葉にヴィンセントは素早く反応した。虚空より掴んだ矢をシモンの弓剣に番え、弦を引き絞りながら跳ぶ。そうして放たれた一矢は的確にバトルボアの魔石を射抜いた。そして彼の落下地点にいたトロールは、空中で変形を終えていた湾曲した刃によって両断される。
「ヴィンス、得物を！」
　そう叫ぶリューにヴィンセントは《落葉》を取り出し、投げ捨てるように宙へと放った。間髪入れずにそれはリューの手に渡り、落葉を手にした彼女は鮮やかなステップと

共に、『ソードスタッグ』を撫でるように斬り裂いた。長刀と短刀から成る高い技術が要求されるそれを、リューは見事に使いこなしている。

　ヴィンセントは剣から滴る血糊を払い、ぐるりと辺りを見回した。屋台や道の部分部分は破損しているが、人的な被害は出ていないようである。だが、その事実に彼が抱いたのは安堵ではなく疑問だ。

「解せんな。何故人を狙っていなかった……？」

「ええ。まるで誰かを探していたかのような……そんな印象を受けました」

　三人は揃って首を傾げる。これまで数多のモンスターと戦ってきた彼らだが、人を襲わないモンスターなど調教（テイム）された個体以外では見たことがない。底知れない違和感がヴィンセント達を襲った。

「……ともかく、今はモンスターを倒すことを優先しましょう。考え事は後でも出来ます」

「……そうですね。行きまし――」

　行きましょう、と。アミッドに同意したリューがそう言い終わる前に突如地面が揺れ始める。それはだんだんと大きくなっていき、やがて轟音と共に何かが地面の下から現れた。砂ぼこりが巻き起こり、それが晴れると同時にその正体が明らかになる。

　それを表すならば、頭のない蛇であった。細長い体躯をした黄緑色の鱗のような外殻

に覆われたモンスターは、体色が異なることを除けば13階層に出現する『ダンジョン・ワーム』とよく似ていた。

しかしよく似ているということは同じである訳ではない。アミッドやリュー、そしてこの中で一番長く冒険者をしているヴィンセントですら、目の前のモンスターは初見だったのだ。突然地面から飛び出した未知の相手に、彼らは警戒の度合いをぐっと引き上げる。

最初に動いたのはヴィンセントだ。Ｌｖ．７の持つ規格外の『敏捷』で以て一気に接近し、シモンの弓剣を全力で振り抜いた。ただの攻撃ですら並みのモンスターからすれば必殺となる彼の一撃、しかしそれは外殻に防がれガキンと音を立てるに終わった。リューとアミッドからは驚きの声が上がり、モンスターが誇るかのように『キシャアアアアア』と鳴く。そして――咲いた。

「あれは！」

「花、ですか……！」

ミミズのような外見から一転して花となったモンスターは、地面から無数の触手を生やしてヴィンセントへと襲い掛かる。前後左右のあらゆる角度から迫る攻撃、しかしヴィンセントは左手に《レイテルパラッシュ》を呼び出すと、増えた手数で触手を次々に捌いていく。

「ふっ……！」

斬れども斬れども再生する触手。だが、ヴィンセントの処理に再生が追いつかなくなり始めると、所々に綻びが生まれ始めた。

それをヴィンセントが見逃す筈もない。一瞬で変形したレイテルパラッシュが火を吹き、僅かな間を通ってモンスターの顔面を撃ち抜く。思いもよらぬ反撃に怯んだモンスターはヴィンセントの前に決定的な隙を晒し、彼は悠々と触手の包囲網から脱出に成功した。

「大丈夫ですか、ヴィンス？」

「問題ない。外殻は堅牢だが斬れない程でもなし。触手は数こそ多いがそれだけだ。そして何よりも弱点が知れた。恐れることはない」

静かに告げるヴィンセントは両手の仕掛け武器を消し、代わりとして右手に抜き身の《千景》を握った。呼吸を整え、ゆらゆらと触手を揺らすモンスターを、翡翠色の瞳ですっと見つめる。

「――【我は血族。穢れた血を啜り、異端として教会に仇なす者也】」

高まる彼の魔力に、触手が一斉に反応した。

△▽△▽

それを見た時、ベルの脳裏を過去の敗北が過った。
暴力の具現化。自分などでは到底敵わないそれが、今目の前にいる。記憶の奥底からフラッシュバックされる恐怖に、ベルの体は凍りついたかのように動かなくなってしまった。はぁ、はぁと荒い自分の息遣いがやけに大きく感じる。
しかし、ベルはすぐに正気に戻った。それはあることに気付いたからに他ならない。
モンスター、『シルバーバック』は自分を見ていないのだ。拘束具の付けられた顔と目をこちらに向けているものの、その視線は自分には向けられていない。
ではあれは誰を見ているのか？
それは――、
「神様っ!!」
ベルは隣にいたヘスティアを抱き締めると、そのまま勢いに任せて地面に転がった。
刹那、彼らのいた場所がシルバーバックの掌に叩きつけられる。地震とも間違う衝撃がベル達を、そして周辺にいた人々を襲った。
『オオオオオオオオオオオオ!!』
「きゃあああああああ!?」
「に、逃げろぉおおお!!」

通りは一瞬にしてパニックに陥った。我先にと蜘蛛の子を散らすように逃げる人々、しかしシルバーバックはそんな彼らには目もくれず、ベルの腕の中にいるヘスティアだけを見つめていた。

『グルルルル……！』

「神様っ！　逃げてください！」

「ベル君!?　何を言って――」

「早くっ！」

ベルは腰のホルスターから護身用のナイフを引き抜き、ヘスティアとシルバーバックの間に素早く割り込むと、迫るシルバーバックの指を斬り払った。薄く裂かれた指から鮮血が飛び散る。

それはシルバーバックにとって虫に刺されたようなものだ。ベルの攻撃はダメージにもならない。だが、塵のように小さな少年に傷をつけられたという事実に、シルバーバックは癇癪を起こしてベルに拳を振りかぶった。

「そうだ……！　お前の相手は、僕だっ！」

血走ったシルバーバックの眼に睨まれながら、ベルは精一杯の勇気で以て囮に徹した。神経を研ぎ澄まし、降り掛かる剛腕の一撃を紙一重で躱わしていく。

シルバーバックの攻撃はその巨体故かほとんどが大振りで、スピードで勝るベルは何

とかついていくことが出来ていた。しかし彼は油断しない。どんなに優位でもそれは一瞬で覆される可能性があることを、かつてのミノタウロス戦で身を以て学んだからだ。

『グゥゥ……グァァァァァァ!!』

「っ!?」

咄嗟に身を屈めたベルの頭上を、凄まじい速度で何かが通過する。冷や汗を流しながら顔を上げた彼が見たのは、腕から垂れ下がった鎖を鞭のように使おうとするシルバーバックの姿だ。あれはまずい、と。ベルの直感がそう囁いた。

「……でも、僕は――」

引けない。もし自分が逃げればシルバーバックはヘスティアを狙う。『神の力(アルカナム)』の使えない神は普通の人と同等の力しか持たないのだ。モンスターに追い掛けられでもすればひとたまりもないのは明らかである。

振り回される鉄鎖にベルはナイフを納めた。今はただ避けることだけに専念し、駆ける。荒い風圧が肌を撫で、鎖が炸裂して地面が砕ける音に耳が痛くなるが、怯まず彼は動き続けた。そして、僅かな隙に懐へと一直線に飛び込んだ。

「(ここなら……無闇に攻撃出来ないだろっ!)」

ベルを踏み潰さんと繰り出されるストンプ。しかし先程までの嵐のような猛攻に比

べれば、避けることなど造作もないことである。

「食らええええええええ!!」

ベルは跳んだ。納刀していたナイフを握り、シルバーバックの胸目掛けて全力で突き出す。

突撃槍（ペネトレイション）。

無防備なシルバーバックの胸へと放たれたベル渾身の一撃は――、

キィンという非情な現実の前に敗れた。

『ガァァァァァァァァ!!』

「がふっ!?」

丸太よりも太く硬い腕に薙ぎ払われ、ベルは近くにあった屋台に突っ込んだ。ベキベキという音は果たして屋台の木材が折れる音か、はたまた自分の骨が折れる音か。飛びそうになる意識をギリギリのところで繋ぎ止め、ベルは朦朧としながらもゆっくりと立ち上がった。そして、血反吐を吐き出す。

「ごふっ……！　がはっ……！　がぁぁぁ……」

掠れる視界に映ったのはベルにとどめを刺そうと近付いてくるシルバーバックと、半

ばで刀身がなくなったナイフだ。シルバーバックの肌を、このナイフでは貫けなかったのである。

これでベルは持ちうる唯一の武器を失った。元々『怪物祭（モンスターフィリア）』を楽しむだけだった彼は、本当に必要最低限の装備しか身に付けていなかったのである。

「（……それがどうした？）」

ベルは回復薬（ポーション）の入ったポーチに手を突っ込むと、その中から割れていない試験管を引っ張り出し、勢いよく煽った。

腕も動く。

足も動く。

頭も回る。

心臓も止まっていない。

ならばまだ――負けてはいない。

回復薬（ポーション）の効果で熱を帯びる体を起こし、ベルはシルバーバックを睨み付けた。その気迫に、格上の筈であるシルバーバックが僅かに動きを止めた。

「――行かせない。お前を神様のところには、絶対に……！」

『ウゥ……ガァァァァァ!!』

シルバーバックが吼え、その拳がベルへと唸る。ドォォン、と屋台が吹き飛び、土埃

の中からベルは飛び出して息を吐いた。額から流れる血を拭い、深紅（ルベライト）の瞳を光らせる。
相手は満身創痍、にも関わらず攻撃を躱わされたことに、シルバーバックは激昂して咆哮した。大気を震わす程のプレッシャーに、しかしベルは動じない。今の彼は自分でも驚く程に冷静で、ただ淡々とシルバーバックの一挙一動を観察していた。
やがて、痺れを切らしたシルバーバックが身構え、突進を繰り出さんと全身に力を込めた。それを察したベルもまたゆっくりと身を低くし、咄嗟に動くことの出来るよう警戒を最大限まで高める。
そして――、

「ベル君っ!!」

時が、止まった。

第13話

「――【我は血族。穢れた血を啜り、異端として教会に仇なす者也】」

《千景》を構えるヴィンセントが詠唱を始めた瞬間、高まる魔力に触手達が一斉に反応し、彼を串刺しにせんと襲い掛かった。しかしそれが彼に届くことはない。

「邪魔はさせません」

触手の前に立ちはだかるは両手に《落葉》を握るリュー・リオン。かつて神々より【疾風】の二つ名を賜った気高きエルフの戦士である。斬り裂かれ、バラバラになった触手が、彼女の足元に積み重なっていく。

「――【凡百の俗物よ、カインハーストの業を知れ】」

ゆっくりと目を開き、ヴィンセントは駆け出した。得物である千景を左の掌に躊躇いなく突き立て、それが発動のトリガーとなる。

「――【ヴィラ・ブラッド】」

穢れた血（ヴィラ・ブラッド）。

カインハーストの業を再現せし付与呪詛（エンチャントカーズ）。その発動に自傷を強いるという特徴を持ち、また発動中はあらゆる傷も癒せないというデメリットもある。しかしその力はそれ

らの要素を孕んで尚、余りある効果を発揮する。ヴィンセントの奥の手の一つだ。
左手から引き抜かれた千景の刀身はベットリと赤い鮮血に塗られていた。血の刃と呼ぶべき状態となったその長さは元々の二倍近くに伸びている。ヴィンセントはそれを横に一閃、それだけで迫る触手がズタズタに引き裂かれた。
【ヴィラ・ブラッド】の発動中はヴィンセントの血そのものが武器となる。飛び散る雫の一つ一つさえ、彼の手に掛かれば鋭利な刃となるのだ。その斬れ味は語らずとも、引き裂かれた触手が物語っていた。
『ギャアアアアアアアア!!』
「黙れ」
淡々とした口調と共に振るわれる血の刃。それは先程《シモンの弓剣》を弾いたモンスターの外殻を、熱したナイフでバターを切るようにあっさりと両断した。
支えを失ったモンスターは悲鳴を上げながらもがき、触手を伸ばして崩れる体を立て直そうと図る。が、それらは地面に届く前にヴィンセントとリューによって断たれ、結果盛大な音を立てながら通りに突っ込んでいった。
「……終わりですね」
「とどめを刺す。死に際に何をされるか分からん、下がっていろ」
短くリューに告げ、ヴィンセントはモンスターへと近付いていく。向けられる触手を

例外なく斬り捨てながらやって来るその姿は、モンスターからすれば悪夢以外の何物でもない。

『アアアア……！　ギィイイイ……！』

「新種故に少しは楽しめるかと思ったが……存外に呆気ないものだな」

だが安心するといい、と。

ヴィンセントは安らかな声色で言う。

「私には獲物を徒になぶる趣味はない。苦しまぬようすぐに殺してやる」

千景を中段に構え、真っ直ぐモンスターを見据えるヴィンセント。殺られる、そう本能で悟ったのか、モンスターは最後の抵抗とばかりに体を起こし、ヴィンセントを頭から食い千切らんと飛び掛かった。瞬間、その顔面に一筋の斬撃が走る。

「さらばだ。死を恐れたまえよ」

頭から真っ二つにされたモンスターは鮮血を撒き散らしながら倒れ、やがて灰となって跡形もなく消滅した。残されたのは【ヴィラ・ブラッド】を解除し息をつくヴィンセントと、そして通常の物とは明らかに異なる極彩色の魔石だけである。

「……」

ヴィンセントは極彩色の魔石を拾うと、それを駆け寄ってくるリューとアミッドに見つからぬよう、さっとポケットに突っ込んだ。この魔石は間違いなくイレギュラー、な

らば関わるのは自分だけでいいと判断したからである。
「お疲れ様です、ヴィンス」
「あの程度のモンスターならまだまだ弱い。一体だけなら尚更だ」
「そう言えるのはオラリオでも一握りの実力者だけだと思いますが……。ともかく、手を出してください。すぐに治します」
【ヴィラ・ブラッド】発動のトリガーとした左手の傷にアミッドは手を重ねる。直後、彼女とヴィンセントの手が淡い光に包まれた。掌に刻まれた貫通する程の傷が、治癒魔法によってたちまち癒されていく。
「……流石、オラリオ最高の治癒師(ヒーラー)だな」
「オラリオ最強の冒険者にそう言って頂けるなら、私も日々鍛練をしてきた甲斐があったというものです」
そう言って微笑むアミッドにヴィンセントは感謝を述べると、モンスターの気配を辿って歩を進める。近くで花のモンスターがいるようだが、そちらは既に戦い始めている【ロキ・ファミリア】の冒険者に任せ、彼らは『ダイダロス通り』と呼ばれる住宅地の方へと向かった。

△▽△▽

「どうして戻ってきたんですか、神様！」

ヘスティアを所謂お姫様だっこの形で抱えながら、ベルは彼女に向かって声を張り上げた。

ヘスティアがベルと『シルバーバック』の対峙するあの場に現れた時、ベルが迷わず選んだのは逃走であった。シルバーバックの突進を紙一重で躱した彼は一目散にヘスティアの元へ走り、彼女を抱き抱えると同時に細い路地へと飛び込んだ。そして現在、ベル達は鬼ごっこの真っ最中なのである。

「どうして、じゃないよ！　ベル君を置いてボクだけが逃げる訳にはいかないじゃないか！」

負けじと大きな声で反論するヘスティアにベルは面食らうが、すぐに「そんな理由で……」と溜め息をついた。敬愛する主神が心配してくれたことは嬉しいが、少なくとも命を懸けた囮の役目が無駄となったのだから、彼としてはなんともやるせない気分となる。

「ベル君、君はボクの大切な眷族なんだ。ボクを守ろうとしてくれたことは本当に嬉しいけど、それで君が怪我をしたら意味がないよ。自分の身を犠牲にするなんて無茶な真似は、もうやめておくれ……」

「神様……」

泣きそうな顔をして俯くヘスティアに、ふとベルの脳裏を今は亡き祖父の姿が過る。ベルにとって彼は大切な家族で、また憧れの存在であった。

そんな祖父が亡くなったと聞いた時、ベルは深い悲しみに包まれた。この世に独り取り残されたような、どうしようもない孤独感に苛まれたのだ。

もしシルバーバックに敗北してベルが命を落とせば、ヘスティアは彼と同じ悲しみを抱くことになるだろう。家族に先立たれるということは、残された者の心に浅くない傷を刻む。ヴィンセントや人形といった他の家族がいようとも、彼女の感じる”ベルを失ったという悲しみ”が軽くなることはない。

それだけは、駄目だ。

女の子を悲しませるなんてことを、ベル・クラネルは決して犯してはならない。

「――すみません、神様。もう、馬鹿な真似はしません」

ベルはヘスティアを抱える腕に力を込めた。絶対に離さない、守ってみせると言わんばかりに。

その時、彼らの耳にシルバーバックの咆哮が届いた。具体的にシルバーバックがどこにいるのかは分からないが、少しずつ近付かれているのは間違いない。

「くそっ……どうすれば……！」

ベルは苦々しげに呟いた。武器はなし、ヘスティアという守るべき対象がいる今の状態で、彼が打てる手などほとんどない。来るかも分からない援軍に頼るなど論外だ。まさに万事休す、流れる冷や汗が頬を伝う。

「――ねぇ、ベル君」

ポツリと、ヘスティアがベルの名を呼んだ。

「？　……神様？」

「君は、あのモンスターに勝てるかい？」

ベルはその質問の意図が理解出来なかった。だがヘスティアは無言のまま、ただその深紅（ルベライト）の瞳をじっと見つめ、答えを待っている。

「……駄目です。僕じゃ、シルバーバックを倒せません」

「それはどうしてだい？」

ヘスティアが再びベルに問う。そしてベルもまたそれに答えた。

「武器がないんですよ。僕のナイフは……あいつに歯が立ちませんでした。武器がなくっちゃ、そもそも話になりません」

ベルはそう言いながら腰にあるホルスターを一瞥した。そこに納まるナイフは砕け、刀身が半ば程でなくなっている。最早武器として機能しない得物では、シルバーバックを倒すことなど到底出来ない。

この場合での勝利とは、相手を殺すことだけでのみ達成されることである。例えベルにシルバーバックの攻撃を避け得るだけの速さと反射神経があろうとも、こちらが刃を持たなければ限りなく困難だ。逃げるだけではやがて力尽き、叩き潰されるだろう。

しかし、ヘスティアの一言はそれらの理屈を根本から覆した。

「もし、武器があるとしたら？」

え、とベルが困惑する中、ヘスティアは彼の腕からひょいとすり抜けると、今まで背負っていた布をほどいた。「本当はもっとちゃんと渡したかったんだけど……」と、小さな声で前置きをして。

「ベル君、ボクは知ってるよ。君がどれだけ頑張ってきたかを、君がどれだけ一生懸命だったかを」

布の中身が晒され、内側から光が溢れた。薄暗い路地で、まるでそこだけ明かりが灯っているかのような錯覚を覚える。

「君は負けないよ。絶対に負けやしない。ボクの大切な眷族が、ヴィンセント君が認めた冒険者が、あんなモンスターなんかに倒されるもんか」

ベルの視線が布の中身と、微笑を浮かべたヘスティアとを往復した。

「か、神様……」

「これは《寵愛の刃》。ボクとヴィンセント君から、ベル君への贈り物さ」

さぁ、とヘスティアは寵愛の刃を呆然とするベルの胸元に押し付けた。そしていつもの天真爛漫な笑みを浮かべ、彼女は発破を掛ける。

白髪紅眼の、まるで兎のような英雄（しょうねん）に。

「ボク達三人で、あのモンスターをやっつけようぜ！」

「――はいっ！」

△▽△▽

シルバーバックの姿はすぐに見つかった。元々追い付かれ気味で距離的にも近かったこともあるが、やはり一番の要因はその巨体だ。広場で彷徨く相手がまだ自分に気付いていないことを確認したベルは、一度深呼吸をしてから握り締めた得物に目を向ける。

ヘスティアから寵愛の刃と告げられたそれは、見た目だけ言えば幅広く分厚い刀身のショートソードとナイフである。【神聖文字（ヒエログリフ）】が刻まれていることを覗けば装飾などは一切なく、ベルが以前まで使っていた物と比べても遜色がない。これを見た者の大半は安っぽい、貧弱そうといった感想を抱くだろう。

だが、それはあくまで外見だけの話だ。

「うぉおおおおおおおお!!」

背中の【ステイタス】が帯びる熱を感じながら、ベルは路地の陰から身を踊らせ、持ち味であるスピードで一気にシルバーバックへ接近した。シルバーバックもまたそんな彼に気付き、振り向き様にその大きな左手を突き出す。そして――シルバーバックの指が三本、宙を舞った。

『グァァァァァァァァァ!?』

薬指、中指、人差し指の三本が斬り落とされ、シルバーバックは悲鳴を上げた。その目には困惑の色がありありと浮かんでいる。それも当然だ。先程までベルはシルバーバックの指に傷を付ける程度の抵抗しか出来なかったのだから。

「(いける――)」

傷を負って苦しむシルバーバックに、そして血の滴る寵愛の刃に、ベルは確信した。

「(僕ならこいつを――狩れるっ!)」

ベルは地を蹴る。最早雑魚でなく自らを脅かす存在となった彼に、シルバーバックは両腕から垂れる鎖を滅茶苦茶に振るった。地面が抉れ、噴水が弾け飛ぶ。だが、その鎖がベルを捉えることはない。

「……終わらせてやる」

懐に飛び込んだベルはショートソードを構えた。一度目は失敗した突撃槍(ペネトレイション)、しかし

二度目は決めると神経を研ぎ澄ませる。

『ガルルァアアアアアアア!!』

「――ふっ」

　短く息を吐き、ベルは足を踏み出す。振り下ろされたシルバーバックの拳を足場とし、跳躍。その胸へとショートソードを全力で突き刺した。それを受けて、シルバーバックの動きがピタリと止まる。

『オ……ォオオオ!!』

　だが、それもほんの数秒のことだった。ベルの一撃はシルバーバックの魔石を僅かに逸れ、故に即死させることが出来なかったのだ。動き始めたシルバーバックはベルを掴もうと無傷の右手を伸ばす。

　そんなシルバーバックに、ベルはニヤリと笑う。左手に握る細身のナイフをショートソードの柄頭へ差し込み、これによりショートソードの内側に仕込まれていた二枚目の刃が、シルバーバックの背中から飛び出した。

『ガッ!?』

「終わりだぁああああああああああああ!!」

　ナイフを柄に納刀し、ショートソード元々の刀身に新たな刃が加わったことで、一本のロングソードへと変形した寵愛の刃。ベルはそれを強引に振り抜き、シルバーバック

の体を魔石ごと斬り裂いた。魔石を失った体はやがて、大量の灰となって消えていく。
「はぁ……はぁ……」
目の前に積もる大量の灰に、ベルはふっと力を抜いてその場に座り込んだ。上がった息をゆっくりと整え、徐々に沸き上がる勝利の実感にその頬が緩んでいく。
「ベル君っ！」
「わっ!?　か、神様！」
「凄いよ！　凄かったよ！　やったぜベル君！　流石ボクの眷族だ！」
背中からヘスティアに抱き付かれて前のめりになるベル。しかしその表情は彼女同様、歓喜に満ちていた。ベルがシルバーバックを倒す姿を見ていた人々も次々に彼の勇気を讃え、歓声を送る。
広場は瞬く間に騒ぎに包まれた。新たな英雄の誕生を祝福するように。

第１４話

『ウォーシャドウ』

ダンジョンの６階層から出現し始めるこのモンスターは、影の名の通り実体らしい実体を持たない、のらりくらりとした独特の動きをするモンスターである。これまでの階層に出現する相手とは明らかに気色の異なるこのモンスターは、『コボルト』や『ゴブリン』などの動きに慣れ始めた頃の新米達に、新たな驚異となって襲い掛かってくる。６階層が上層においてある種の区切りとなるのはこのためだ。

そんな６階層のとあるルームにて、ベルは複数のウォーシャドウに囲まれていた。

「……ふぅ」

ゆらゆらと揺らめく漆黒の影にベルは小さく息を吐いた。両の手に握り締めたショートソードとナイフ――寵愛の刃をゆっくりと構え、深紅（ルベライト）の瞳を細めてウォーシャドウを睨み付ける。

先に動いたのはウォーシャドウだった。三本のナイフのごとき鋭い爪が音もなく、まるで暗殺者のようにベルへと振るわれる。先程までの緩慢な動きからは考えられない機敏さ、これが数々の新米冒険者の不意をついてきたウォーシャドウの特徴だ。

しかしあらかじめその驚異を知っている者や、初見であれど優れた反射神経と動体視力を持つ者には、その不意討ちは通用しない。完全にウォーシャドウの攻撃を見切ったベルは身を翻すことで躱わし、カウンターとして左手に逆手で握っていたナイフを、ウォーシャドウの顔面に突き立てた。そのまま動きを止めることなく別の個体に肉薄、刃が煌めくと同時に灰となったウォーシャドウが宙を舞った。

複数のウォーシャドウ相手にベルが選んだのは、高い『敏捷』を生かした速攻である。受け身に回るからこそウォーシャドウの動きに翻弄され、やがて追い詰められて命を落とすのだ。先手必勝と言わんばかりに攻め続けるベルを、ウォーシャドウ達は止めることが出来なかった。

「でぁあああ!」

遠心力を利用したショートソードの縦斬りがウォーシャドウを両断する。剣を振り抜いたベルはそのまま身を屈め、接近してくるウォーシャドウの足を斬り裂いた。斬られた相手は当然体勢を崩し、そしてそこへ迫るは刃の切っ先だ。曇りなき銀の刀身に貫かれ、ウォーシャドウは灰となって消えた。

「……やっぱり使いやすいなぁ」

両手の得物を交互に見つめながら、ベルはポツリと感想を漏らす。しっかりとした重量がありながらも重いとは感じない金属の塊は、まだ使い始めて一週間程度であるにも

関わらず、既に長きを共にした相棒のごとく手に馴染んでいる。加えて武器としての性能も高いとなれば、もう文句の付けようがなかった。

ベルは内心でヘスティアと、そしてヴィンセントに礼を言いながら、辺りに転がる魔石を回収していく。回収中も何体かモンスターが生まれてきたが、それらも問題なく処理する。巾着に貯まった魔石にベルは破顔しつつナイフを腰の後ろに、ショートソードを左腰の鞘にそれぞれ納刀した。

「６階層はもう大丈夫かな。でもこれ以上下に行くとエイナさんに怒られるし……」

腰に手を当ててしかめっ面を作るハーフエルフの美人アドバイザーが容易に浮かび、ベルは思わずぷっと吹き出した。この第６層に挑むことすら、ベルがソロだということを理由に散々渋られたのだ。第７層まで行きましたなどと言った日には、彼女の雷が落ちるのは想像するに難くない。

結局ベルはもう暫くの間、この６階層を探索することにした。懐に余裕が出来たらエイナに何かを送ろう、そんなことを考えながら彼は再度現れたウォーシャドウに対し、寵愛の刃を抜き放った。

△▽△▽

地下迷宮１８階層。そこは安全階層（セーフティーポイント）と呼ばれるモンスターが生まれない階層だ。草原や湖、森などの豊かな自然に加え、光を乱反射させる青結晶が点在しており、『迷宮の楽園（アンダーリゾート）』の名に相応しい幻想的な風景が広がっている。

そんな１８階層の片隅には小さな墓がある。装備を墓石の代わりとした簡素な作りのそれの前で膝を折り、祈りを捧げるは、緑色のマントに身を包んだ一人のエルフだ。その傍らには黒衣を纏う紅髪の男が無言のまま佇んでいる。

「……アリーゼ」

エルフ――リュー・リオンはポツリと、僅かに震える声で知己の名前を呟く。

アリーゼ・ローヴェル。かつてオラリオに存在した正義の【ファミリア】、【アストレア・ファミリア】の団長だ。オラリオを訪れたばかりのリューの手を取り、自らの【ファミリア】へと入団させた彼女は、リューにとって恩人にも等しい存在だった。

しかしアリーゼは、【アストレア・ファミリア】のメンバーはリューを残して死亡した。悪を是とする邪神に魅せられた者達――『闇派閥（イヴィルズ）』の手に掛かって。

迷宮都市オラリオにはかつて暗黒期と言われる時代があった。他者を顧みず、己の欲望のままに行動する『闇派閥（イヴィルズ）』が街に蔓延り、治安が著しく低下。派閥同士の抗争で善悪を問わず多くの人々が毎日、これまでの比でない程に命を落としたのだ。

【アストレア・ファミリア】はそんな暗黒期の中、自らの掲げる正義に従って第一線で

『闇派閥』と戦った。しかし、その目を見張る程の活躍ぶり故に彼女らは『闇派閥』の標的とされ、結果【ルドラ・ファミリア】の仕掛けた『怪物進呈』によって全滅したのである。ただ一人、リューを残して。

「もう五年か。早いものだな」

「……そうですね。本当に早いものです」

黒衣の男――ヴィンセントの言葉にリューは頷いた。祈りを終えた彼女はすっと立ち上がると、今度はヴィンセントの方へ向き直る。

「ヴィンス。今一度、貴方に感謝を。シルと、そして貴方がいなければ今の私はありません。復讐を果たしたあの日に力尽き、孤独のうちに朽ちていたでしょう」

「私はただ生きる意味がないなどと愚図る貴公を、ミアとシルの二人に丸投げしただけだ。まぁ、貴公がそう言うのなら大人しく受け取っておくがな」

胸に手を当てて頭を垂れたリューにヴィンセントは小さく笑い、くるりと踵を返して歩き出す。その背中を追い掛けたリューはすぐに彼の隣に並ぶと、フードに隠れたその表情をふっと綻ばせた。

自身を除いて【ファミリア】が全滅したその後、リューはすぐさま主神であるアストレアをオラリオの外に逃亡させると、自身は復讐のために動き始めた。『闇派閥』の者やそれに与する者を次々に襲撃し、血祭りに上げたのである。復讐の鬼となり激情に駆ら

れたリューはとどまる所を知らず、やがて彼女は『闇派閥（イヴィルズ）』最大勢力であった【ルドラ・ファミリア】すらも滅ぼした。

しかし、いくら【ルドラ・ファミリア】を滅ぼしたとはいえ、リュー自身もただでは済まなかった。全身に傷を負い満身創痍となった彼女は、人気のない薄汚れた路地で雨に打たれながらついに倒れてしまう。冷たい雨と地面に熱を奪われながら、最後にリューは自嘲した。外道に落ちた身には相応しい最後だ、と。

だが偶然か、はたまた必然か、彼女はヴィンセントに拾われることで一命を取り止め、『豊饒の女主人』に住み込みで働くこととなる。失意に沈み、生きる気力さえなくしていたリューも、慣れないながらも穏やかな日々に癒され、今ではこうして立ち直るまでに至っていた。

「ヴィンスはこれからどうしますか？　中層へ行くなら付き合いますが」

「いや、今日はもう地上に戻る。……と、その前にリヴィラでドロップアイテムの換金をしなくてはな」

肩から下げられていた袋を軽く持ち上げるようにしてリューへと見せるヴィンセント。そこに入っているのは、この１８階層に来るまでに二人が倒したモンスターのドロップアイテムである。リューはそれに一つ頷きを返すと、そのまま『リヴィラの街』へと足を向けた。

▽△▽△

１８階層の湖に面した島の東部にある『リヴィラの街』は、高さ二〇〇Ｍ（メドル）はある断崖の上に存在する。水晶と石の地形を利用して造られた外壁によって取り囲まれたそこは、しかし過去に三百回以上も壊滅したことがあり、その度に再築されてきた。まるで冒険者のしぶとさを象徴するかのようなこの街を、一部の者は『世界で最も美しいならず者の街（ローグ・タウン）』と、侮蔑と呆れ混じりの賞賛を込めて呼んでいる。

「……妙だな」

「ええ、人の数も少ないですし、街の雰囲気もおかしい」

天幕や木造の小屋など、簡素な造りの建築物が並ぶ通りを歩きながら、ヴィンセントとリューは口々にそう溢す。普段から賑やか、とまではいかないまでも、人々のざわめきと笑い声の絶えない街が、やけにしんと静まり返っているのだ。これまで幾度となくこの『リヴィラの街』を訪れたことのある二人は、その違和感をすぐに察知していた。

「何かあったのでしょうか……？」

「……誰かに尋ねるか。少し待っていろ」

そう言うや否や、ヴィンセントはコートを翻して近くにあった屋台の店主の元に向

かった。その数分後、戻ってきた彼はリューに告げる。
「ヴィリーの宿というところで殺しがあったそうだ」
「……殺し、ですか？」
「あぁ。この街に漂う死と血の匂いは、どうやらそれが原因だったらしい」
　予想外のことに眉をひそめるリューに対し、ヴィンセントは顔を上げつつ淡々と語る。自分に分からない匂いを辿り、やがて歩き始めたヴィンセントの背を追いながら、リューは解せないとばかりに息をついた。
「……何故、犯人はわざわざこの街で殺人を起こしたのでしょうか？」
「さてな、何か理由があるのだろうよ。そうでなければ、証拠の残る上に人目の多いこの街で殺しなどしない。ダンジョンで殺す方がずっと分かりにくいのだからな」
　そんな会話をしながら二人は丸太の階段を上がっていく。そうして辿り着いた街の中心をやや過ぎた辺りでは、これまで姿の見えなかった冒険者達が広くない路地に密集するように存在していた。彼等の集まる先には、共通語（コイネー）で『ヴィリーの宿』と書かれた看板が下がっている。
「ここか」
「随分と人が多いですね。これでは……」
「ふむ、どうしたものか」

首を傾げ、人だかりを眺めるヴィンセントとリュー。しかし、突如としてその人だかりが真っ二つに割れ、やがてその間を通って数人の冒険者が出てきた。

まず先頭を歩くは長槍を携えた金髪の小人族（パルウム）だ。続いて緑髪のエルフが現れ、アマゾネスの姉妹に山吹色の長髪をしたエルフ、最後に金髪金眼のヒューマンと続く。明らかに見覚えのあるその一団に、ヴィンセントは小さく溜め息をついた。そしてそれを気付かれたのか、金髪の小人族（パルウム）がが彼の元に近付いてくる。

「やぁヴィンセント、こんなところで奇遇だね。実は……少し手伝ってほしいことがあるんだ」

そう言って彼は――【ロキ・ファミリア】団長、フィン・ディムナは微笑を浮かべた。

第15話

「殺されたのは【ガネーシャ・ファミリア】のＬｖ．４、ハシャーナ・ドルリア。見ての通り、首を折られた後で頭を潰されている。ヴィリーの話だと彼は昨日、ローブを被った女を連れていたらしい。その女がいないことから、犯人であることに間違いはないと思っている」

『ヴィリーの宿』の一室、フィンの話に耳を傾けながら案内されたその先で、ヴィンセントとリューはベッドに横たわる頭の潰された死体を見下ろした。

Ｌｖ．４、すなわちリューと同じ第二級冒険者だ。それが部屋の状態からほぼ無抵抗で殺されたという事実に、ヴィンセントは翡翠色の双眸をすっと細め、リューは悲痛そうな表情と共に跪いて目を閉じた。せめて安らかに、そんな想いが届くよう彼女は目の前の骸に祈る。

「……ふむ、なるほど。Ｌｖ．４程の実力者を不意討ちとはいえ殺せる相手、それを放ってはおけんということか」

「あぁ。現場にあった依頼書から、ハシャーナは冒険者依頼（クエスト）で何かを探すよう頼まれていたようでね、犯人はそれを狙ってハシャーナに近付いたんだろう。そしてこれはあく

まで僕の勘だけど……犯人はその何かを確保出来ておらず、まだこの街のどこかにいる」

　それは確証のない予想。しかしフィンはペロリと右手の親指を舐め、断言した。

「今、ボールスに頼んで街中の冒険者を集めてもらっている。Ｌｖ．４を殺す程の相手だ、恐らくその実力はＬｖ．４、もしくはそれ以上になる。ヴィンセント、君がいてくれると犯人を楽に捕まえられると思うんだけど……」

「私としては貴公を手伝う義理はない、と言いたいところなのだがな……」

　そう言ったヴィンセントはチラリとリューを一瞥した。祈りを終え、立ち上がった彼女の瞳には確固たる意志が見える。その背に刻まれた正義の剣と翼、【アストレア・ファミリア】のエンブレムは、今確かな熱を帯びていた。

「残念ながら、連れがこれでは手を貸さん訳にもいくまい」

「感謝するよ。その礼と言ってはなんだけど、君の連れの正体に関しては黙っておくとしよう」

　その一言にリューはギロリとフィンを睨むが、彼はどこ吹く風とばかりに苦笑して部屋を出ていった。

　彼は気付いていたのだ。リューがかつて、オラリオに蔓延る悪人を初めとする多くの人々を惨殺し、ギルドのブラックリストに登録されるまでに至った、かの【疾風】であ

るということに。髪の色を金から薄緑に変え、口元をマスクで隠してなお、その正体を見破るフィンの観察眼に、ヴィンセントは内心で賞賛を送った。
「……仇は取ります、ハシャーナ」
「知り合いだったのか？」
「ええ。【アストレア・ファミリア】と【ガネーシャ・ファミリア】は、よくオラリオの見回りを共にしていましたから、その時に彼とは何度か。まさかこんなことになるなんて……」
　オラリオの秩序を守る者同士、深くはなくともそれなりに交流はあったのだろう。ハシャーナの過去を知るリューは、彼の死を重く受け止めていた。
「行きましょうヴィンス。例え相手が第一級冒険者であろうと、遅れは取るつもりはありません」
「あまり動きすぎるなよ、リュー。自分がブラックリストに載せられているということを忘れるな」
　静かに激情を燃やすリューをヴィンセントは小さく諌める。その後二人は、冒険者達の集められる街の中心へと向かった。

▽△▽△

　ヴィンセント達が街の中心たる水晶の広場に到着する頃には、既に数多くの冒険者達が集まっていた。その数はざっと見ただけでも五百人はいる。この中から特定の一人を探すとなれば、相当な労力を要することになるだろう。
「やぁヴィンセント、待っていたよ」
「げっ!?　てめぇは……！」
　歩み寄ってくるヴィンセントへ声を掛けるフィン。そしてその隣にいた『リヴィラの街』を統括するＬｖ．３――ボールス・エルダーは、ヴィンセントの姿を見るなり、ぎょっとなって目を見開いた。眼帯で片目が隠れたその顔には、恐怖の感情がありありと浮かんでいる。
「これだけの人数が集まれば壮観だな」
「全く。ただ、ここから犯人の特徴を挙げていけば、疑いのある人物はどんどん減っていくと思うけどね」
「そっか！　犯人は女の冒険者だもんね！」
　そう言って合点がいったとばかりに笑うのは、【ロキ・ファミリア】の誇るアマゾネス姉妹の妹、ティオナだ。そんな彼女に姉であるティオネは呆れを隠そうとせず、はぁと大きく溜め息をついた。それを見た山吹色の長髪のエルフ――レフィーヤ・ウィリディ

スも思わず苦笑する。

フィン達の見守る前で冒険者達は、リヴェリアの指示により男女に別れた。分けられた内、女性冒険者はおよそ二百人。途中、その人気のあまり多くの女性冒険者がフィンに殺到し、それを見たティオネが大いに暴れ回るというハプニングがあれど、特徴という名の振るいが掛けられることで、その数はどんどんと減っていく。にも関わらず、未だ容疑者らしき人物を特定することは叶わなかった。

「……見つかりませんね。やはり犯人はもうこの場にいないのでしょうか？」

「……」

「……ヴィンス？」

目の前で行われる取り調べを眺めていたリューだったが、ヴィンセントからの返事がないことに怪訝そうな表情を浮かべる。何かあったのか、そんな言葉と共にふとヴィンセントの様子を伺い、彼があらぬ方向――男性冒険者達の方へと目を向けていることに、思わず困惑の声を漏らした。

「……匂い立つな」

「……？」

リューが首を傾げる一方、ポツリと呟いたヴィンセントは早足で男性冒険者達に近付いていく。そんな彼に気付くや否や、誰もが冷や汗を流しながら身を引いた。「ブ、

【血の申し子（ブラッドボーン）】……！」、と。誰かが溢した言葉が伝染するように人混みに広がっていく。

そんな冒険者達を気に留めることもせず、ヴィンセントは黙々と微かに残る匂いを辿った。血の狩人たる彼にしか分からない、血の匂いである。

ハシャーナの死体と同じ匂い。

それがこの男性冒険者の中から漂っているのを、彼の鼻ははっきりと捕らえていた。

「死体の皮を被り己を偽るか。確かにそれなら多くの者を騙せよう。だが――」

視界の端に映るこの場から立ち去ろうとする大柄な男、ヴィンセントはそれを見逃さない。跳躍し、男の目前に着地したヴィンセントは、腰のホルスターよりエヴェリンを抜き、その銃口を男へ突きつけた。何事かと周囲がざわめく中、男はゆっくりと口を開く。

「何故、私だと分かった?」

男が喋った途端に、周囲のざわめきは一層大きくなる。それもその筈、男の口から発せられた声は外見通りのものでなく、女性のそれだったからだ。フィンやリヴェリアといった第一級冒険者すら驚きを隠せない状況でただ一人、ヴィンセントだけがいつもの無表情で、エヴェリンの引き金に指を掛けた。

「血の匂いだ。殺されたハシャーナと同じ匂い、それが貴公から漂っている」

「匂い、か。それは盲点だった。以後は気を付けるとしよう」

「次があるとでも思ったか？」
「ふん、正体を見破った程度で追い詰めたつもりとは、随分と甘いな」
そう吐き捨て、ハシャーナの皮を被った女はヴィンセントのエヴェリン目掛けて蹴りを放つ。恐ろしい程の速さで迫るそれをヴィンセントは紙一重で躱し、再びエヴェリンを構え直した時には、女は懐から取り出した草笛を吹いていた。
高らかに響き渡る笛の音、それが鳴り終わると同時に地面が揺れ――轟音と共に無数の食人花が飛び出した。

▽△▽△

「なっ、なんだ!?」
「モ、モンスターだぁ!?」
突然沸いた大量のモンスターに、冒険者達は訳も分からず狼狽えた。その中で即座に動けたのはヴィンセントやフィンを筆頭とした第一級冒険者、そしてリューだけだ。現れた食人花を見たヴィンセントの脳裏に、『怪物祭（モンスター・フェリア）』での出来事が過る。
「ちぃ……！」
自分へと群がるように集まってくる食人花に舌打ちをし、ヴィンセントは虚空より

《獣狩りの斧》を掴み、その柄を引き伸ばした。さながらハルバードのようになった斧を振り回し、寄せ来る敵を次々に蹴散らしていく。しかし、彼にはこれが自身を足止めするための肉壁であることに気付いていた。

「貴様には『ヴィオラス』の相手でもしておいてもらおう。私にはまだやるべきことがあるのでな」

押し寄せる食人花――ヴィオラスを相手に無双するヴィンセントを最後に一瞥し、女はその姿を消した。目の前にいた敵の頭を逃がした、その事実にヴィンセントは苛立ちのあまり、最寄りのヴィオラスを全力で叩き斬ると、すぐさまその死体の上に飛び乗った。

四方八方をヴィオラスに囲まれる中、ヴィンセントは組んだ両手を天へと高く掲げる。

「――消し飛べ」

短く呟いた刹那、彼の手から放たれた蒼白の閃光が雨のように降り注ぎ、ヴィオラス達に炸裂してはその頭部を弾き飛ばした。

彼方への呼びかけ。

かつて「聖歌隊」の生み出した秘儀の一つであり、精霊を媒介に遥かな彼方の星界への交信を試みた結果、生まれた失敗作。儀式自体は失敗したものの、しかし生まれたこ

の秘儀は星の小爆発を伴い、「聖歌隊」の特別な力となったという。
　ヴィオラスを一掃したヴィンセントは再び獣狩りの斧を手に取り、阿鼻叫喚となっている広場を疾走した。ここにきてある程度は持ち直しつつある冒険者達だが、耳障りな咆哮を上げながら暴れ回るヴィオラスを前に、怪我を負う者や犠牲になる者が後を絶たない。ヴィオラスの外殻はＬｖ．５のティオナとティオネの拳すら通さない程の堅牢さで、並みの冒険者では文字通り歯が立たないのである。
「リヴェリア、敵は魔力に反応する。出来る限り大規模な魔法で付近のモンスターを集めるんだ！」
「あぁ、分かった！」
「ボールス、君は冒険者達に五人一組のパーティを作らせろ。一体ずつ当たれば抑えられる！」
「お、おう！」
　滅茶苦茶になった戦場に的確なフィンの指示が飛び、それに合わせてリヴェリアとボールスが動いた。魔方円（マジックサークル）を描き、詠唱を開始したリヴェリアにヴィオラス達は一斉に反応し、彼女を呑み込まんと大口を開けて襲い掛かる。
「させないよっ！」
「そりゃー！」

「はぁあああ！」
「ふっ……！」
「はっ……！」
　だが、当然リヴェリアの周りにはそれを良しとしない者がいる。フィン、ティオナ、ティオネ、ヴィンセント、そしてリューの五人は、口腔の奥にある魔石を晒したヴィオラスにあえて突っ込み、一撃の下に次々とそれらを砕いていった。その鮮やかな動きに冒険者達はどっと歓声を上げ、花ごときに負けるものかと奮起して武器を振るい始める。
「ていうか、なんでアイズとレフィーヤはいないのさー!?　こんな時にどこ行ってるのー!?」
「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ！　今はこのモンスター達に集中しなさい！」
「ティオネの言う通りだよ。でも……どこに行ったんだろうね、アイズ達は」
　貴重な戦力であるアイズとレフィーヤの不在に、【ロキ・ファミリア】の面々の心中は穏やかではないが、それでも誰一人として手を休めることはなかった。繰り広げられるリヴェリアを囮とした誘い出しからの各個撃破、更には落ち着きを取り戻した冒険者パーティによる反撃で、ヴィオラス達は徐々にその数を減らしていく。

このまま一気に。この場で戦う全ての者がそう思った瞬間だった。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

突如として辺り一帯に轟く絶叫。ビリビリと震える大気に振り返った冒険者達の目に映ったのは、同種のモンスターを食らい、膨れ上がっていくヴィオラスの姿だった。血肉を撒き散らし、グシャグシャと不快な音が響かせるそれは、やがて羽化のように己の体皮を内側から破り――女体にも似た極彩色の上半身を現した。

「な、なんですか……あれは……!?」

「……花の次は蛸か、随分と気色悪いモンスターだ」

蛸。驚愕を露にするリューにヴィンセントがそう称したように、先程までヴィオラスだったモンスターの下半身は、まさしく蛸であった。上半身は人型、下半身は蛸の足のようにヴィオラスが蠢く様は、誰がどう見ても異形と断言するだろう。

『オオオオオオオ――――――!!』

つんざくような産声を上げた巨躯の異形は、リヴィラの中心へと侵攻を開始した。

第１６話

『アアアアアアアアアア――――!!』

「さて……どうしたものか」

　絶叫と共に動き出した異形を眺めながら、ヴィンセントはポツリと呟く。

　突如として現れた目の前の異形は、高さがおよそ六M（メドル）、横幅に至っては食人花の足を折り畳んでも一〇M（メドル）は優にある。仕掛け武器による攻撃程度では急所にでも当てない限り、満足にダメージを与えることすら出来ないだろう。あれを完全に屠るとなれば相応の一撃――大規模な『魔法』などが必要だ。

「ふむ……まぁ、あれこれ考えるよりも実際に試してみるか」

「試す……？」

　そう言ってヴィンセントが取り出した二つの銃器は、彼の持つ物の中でも特に扱いの難しい代物である。右手に《大砲》、左手に《教会砲》という、馬鹿げたサイズの得物を携えたヴィンセントは、固まってしまったリューを尻目に、短く息を吐いてから跳躍した。異形の側面へ回り込むように跳んだ彼は、移動しながらすっと構えを取り――、

　雷鳴にも似た凄まじい発砲音が立て続けに二つ。その直後、女型の上半身と蛸の下半

身でそれぞれ轟音を伴った爆発が起こり、右腕の一部と足の数本をまとめて吹き飛ばした。
「はぁ!?」
「ええ!?　ちょ、何が起きたの!?」
　その光景にティオネとティオナが困惑するのも無理はない。今すぐ飛び掛かって一撃を与えてやろうとしていたところに、あろうことか大砲による砲撃が飛来し、大爆発を引き起こしたのだ。あんぐりと口を開け、思わず動きを止めてしまった冒険者もいる。
「……相変わらず規格外だな、あの男は」
「全くだよ。でも、これであのモンスターの動きは止まった」
　冷や汗を流すリヴェリアの言葉にフィンは苦笑し、しかしすぐに真剣な表情で答える。フィンの言う通り、大砲と教会砲により大きなダメージを受けた異形は、その注意をヴィンセントの方へと向けた。そして、執拗に襲い掛かる触手をヴィンセントは二つの得物を握ったまま、器用にステップを踏んで避け続けている。
「リヴェリア様！　団長！」
「レフィーヤ、今までどこに……いや、それよりアイズは？」
「アイズさんは、ハシャーナさんを殺した犯人に襲われて……今、向こうに……！」

その腕に気絶した黒髪の犬人（シアンスロープ）の少女を抱え、息も絶え絶えな状態で戻ってきたレフィーヤは、顔だけを動かしてアイズの消えた方向を示した。

「……アイズなら大丈夫だ。そう簡単にやられない。それよりリヴェリア――」

「分かっている。レフィーヤ、以前行った連携は覚えているな？　あれをやるぞ」

「はっ、はい！」

その言葉に大きく頷いたレフィーヤは抱えた少女を一旦降ろし、リヴェリアとは別方向に走り出した。二人の魔導士はそれぞれ、広場の東端と西端を目指す。

一方、前衛冒険者達は暴走する異形の前に成す術がなく、被害が及ばぬように逃げることしか出来なかった。その逃げた冒険者ですら伸ばされた足に捕まる者もいる。その様子はまさに嵐、天災の類いであり、故に対抗出来る冒険者もこの場には数人しか存在しない。

「あーもー！　これじゃあキリがない！」

「足一本取ったくらいじゃ駄目ね。大して効いてないわ……」

大双刃（ウルガ）を振り回し、豪快に異形の足であるヴィオラスを切断するティオナと、湾短刀（ククリナイフ）を自在に操り、敵をズタズタに斬り裂いていくティオネ。しかし二人の健闘も虚しく、異形に確固たるダメージを与えるには至らない。長槍を手に異形の懐に潜り込んだフィンもまた、上半身から来る無数の触手の前にその動きを阻まれてしまう。仕方なく

バックステップをして距離を取ったフィンだが、そんな彼の耳に再びあの砲声が轟いた。

『グギャアアアアアア――――!?』

「……これだけでは殺し切れんか」

被弾したことで苦しげに喚く異形を眺めながら、煙の上がる大砲と教会砲を手に嘆息するヴィンセント。二発ずつ撃ったことで手持ちの水銀弾は底を尽き、ただの重りと化した銃器を消した彼は、新たに《パイルハンマー》と《ガトリング銃》をその手に掴んだ。

「……あの、ヴィンス、それは？」

「パイルハンマーとガトリング銃。頭のイカれた阿呆共が調子に乗って生み出した産物よ。連中曰く、『つまらないものは、それだけでよい武器ではあり得ない』そうだ。作っておいた手前、まさか役に立つ日が来るとは思わなかったが……」

それより、とヴィンセントは言葉を区切り、その視線を広場の両端に辿り着いたリヴェリアとレフィーヤに向けた。直後、二人を『魔法』を唱え始め、魔力の流れを感じ取った異形がピクリと反応を示した。

「あえてリヴェリアに大量の魔力を使わせ囮とすることで、そのリヴェリアより魔力消費の少ない【千の妖精（サウザント・エルフ）】を隠すとは。……リュー、貴公もあれに乗れるか？」

「……ええ、任せてください！」

力強く頷いたリューにヴィンセントはニィと笑みを返し、自身はいずれ訪れる好機に備え息を潜めた。ガキン、と重厚な音を立て、右手のパイルハンマーがその変形を終える。

「【――今は遠き森の空。無窮の夜空に鏤(ちりば)む無限の星々。愚かな我が声に応じ、今一度星火の加護を】」

小さく息を吸い込んで目を閉じ、歌うように言葉を紡ぎ始めたリュー。彼女を中心に小さな魔方円(マジックサークル)が形成され、キラキラと光が瞬いた。

「【汝を見捨てし者に光の慈悲を。来たれ、さすらう風、流浪の旅人(ともがら)】」

詠唱が進むにつれ、リューの魔力は徐々にその量を増していく。逆巻く奔流が彼女を包み、来るべき解放の時を待つ。

しかし、その魔力に敵が気付くことはない。異形には広場の東端で馬鹿げた量の魔力を垂れ流すリヴェリアしか眼中にないからだ。まさに計画通り、リヴェリア目掛けて進撃する異形に何人かの冒険者がふっと笑った。

「【空を渡り荒野を駆け、何物よりも疾く走れ――】」

カッとリューの目が開かれると同時に、異形を十分に引き付けたリヴェリアが詠唱を止め、さっと横に跳んだ。それまで練り上げられていた魔力が呆気なく霧散したこと

に、異形は腑に落ちないとばかりに顔を上げる。しかし、次の瞬間に感じた莫大な量の魔力に、ビクリとその巨躯を震わせた。

すぐさま振り返った異形が捉えたのは、広場の西端とそれよりやや手前で、間もなく詠唱を終えようとするレフィーヤとリューの姿だった。

「――【雨の如く降りそそぎ、蛮族どもを焼き払え】」

「――【星屑の光を宿し敵を討て】」

抑える必要がなくなり、二人のエルフから溢れる魔力が爆発的に膨れ上がる。リヴェリアによって街の東端に誘き寄せられた異形に、彼女達を止める術はない。

「逃げろぉ！　でけぇのが来るぞぉ！」

ボールスの怒声が木霊し、それに合わせて冒険者達が一斉に退避する。この一瞬だけ、レフィーヤとリュー、二人と異形を結ぶ直線上からあらゆる人影が消えた。

そして――二つの『魔法』が完成する。

「【ヒュゼレイド・ファラーリカ】！」

「【ルミノス・ウィンド】！」

炎矢の豪雨と閃光を放つ風の砲弾、それぞれが凄まじい速度で異形へと迫る。夥しい紅蓮の魔力弾は異形の触手を、極彩色の体皮を容赦なく削り、暴風の塊とも言える一撃が異形の腹を突き破った。絶え間なく続く『魔法』に異形が絶叫するが、尚もレフィー

ヤの猛攻は止まらない。
　時間にしておよそ十秒以上、その数およそ万にも届くかとばかりの火の雨を浴び、腹にも大穴を開けた異形は全身を焼け焦がし、黒煙を上げながらゆっくりと崩れ落ちる。しかしその息はかろうじて残っている。異形は最早原型すら留めぬ程ボロボロになった体を引き摺り、すぐ傍らにある断崖から逃亡を試みようとした。
　それを彼、彼女達は見逃さない。
「一気に片を付けるよ」
「了解です団長！」
「おりゃー！」
「……」
　フィン、ティオネとティオナ、そしてヴィンセント。異形が崩れ落ちてから間髪を入れずに駆け出したのが、この四人である。各々の武器を構えた第一級冒険者達は、瀕死の獲物へ一斉に飛び掛かり――、
　ティオネの湾短刀（ククリナイフ）が、最後の抵抗として伸ばされた触手を斬り飛ばし、
　フィンの投擲した長槍がその頭部を穿ち、
　ガトリング銃の連射で蜂の巣にされた胴体が、ヴィンセントのパイルハンマーによる渾身の一撃で弾け、

最後に、ティオナの大双刃（ウルガ）が僅かに残った胴体を真っ二つに切断した。

『――……！　――……』

ピクピクと痙攣し、灰となって跡形もなく消え失せる異形。惨状となった広場にしんと静寂が訪れ、やがて割れんばかりの喝采が巻き起こった。誰もが強大なモンスターが打ち倒されたことに歓喜し、大騒ぎする中、しかし撃破の立役者たる面々の一部は浮かぬ表情となっていた。

「魔石は砕いてしまったか……。新種のモンスターに関する貴重なサンプルになると思ったのだがな」

「……ヴィンス、流石にあれはやりすぎたのでは？」

「私はただあのデカブツを狩っただけだ。魔石云々など知ったことではない」

「ンー……まぁ、済んだことにとやかく言っても仕方ないよ。ここには僕達以外の冒険者もいて、あんまり悠長にしている暇もなかったことだしね」

ガトリング銃でズタズタになっていたとはいえ、たった一発で異形の上半身の七割程を吹き飛ばしたパイルハンマーに、リヴェリアとリューの視線が注がれる。それに対しヴィンセントは小さく肩をすくめ、フィンがふっと苦笑を溢した。

「そ、それよりアイズさんを助けに行きませんか？　大丈夫だとは思うんですけど……私、心配で……」

「あっ！　アイズのこと忘れてた！　皆、早く行こうよ！」
「ちょっ、ティオナ！　待ちなさい！」
　レフィーヤの言葉に走り出したティオナをティオネが諌めるが、しかしその動きを止めるには至らない。あっという間に遠くまで行き、すっかり小さくなった背中を眺めながら、不意にフィンがポツリと呟いた。
「……あの方角、多分アイズがいる方とは正反対だね」
「すぐ呼び戻してきます、団長！」

▽△▽△

　リヴィラの西側。ヴィオラスの出現により建物が破壊され、更地のようになったその場所で、アイズは【エアリアル】による風を纏い、赤髪の女と相対していた。
「はぁっ！」
「ふん」
　付与魔法（エンチャント）の乗ったアイズのサーベル――《デスペレート》。切れ味、速度共に上昇したそれを、赤髪の女はそれをモンスターの牙をそのまま武器にしたような無骨な長刀で、真っ正面から打ち払った。刹那のうちに無数の剣撃の応酬がなされ、幾度となく二つの

刃がぶつかり合う。火花が飛び散り、衝撃に地が割れた。
「『アリア』、どこでその名を!?」
「さぁな」
感情を爆発させるアイズの滅多にない言動に、女は素っ気なく答える。問答を行いつつも、二人が戦闘の手を緩めることはない。女の長刀がアイズの手甲を浅く傷付け、アイズの剣が女の前髪を何本か斬り裂いた。
一見すると互角に見えるこの戦い、しかし押されているのは――アイズだった。
「っ!」
【エアリアル】を発動していて尚、力負けする。『魔法』を使用しているアイズとは違い、女は純粋な膂力だけでアイズを上回っていた。その事実が、ただでさえ動揺している彼女を更に揺さぶる。
『アリア』。
その名前を、何故か目の前の女は知っている。
「見えたぞ」
「しまっ……!」
焦りからか、僅かにぶれた剣先。凄まじい速度の中で晒した隙などごく小さなものであったが、そこを女は的確に見抜いた。頬の肌を軽く斬られながらも一気に距離を詰

め、硬く握り締めた拳をアイズへと叩き込んだ。腹部に突き刺さったそれは纏っていた風を容易に引きちぎり、アイズの細身の体を後方へと殴り飛ばす。

この戦闘が始まって初めて無視出来ないダメージを受けたアイズは痛みに表情を歪ませ、しかし冷静に風を操って素早く体勢を整えた。ザリザリと音を立てながら地面を滑りながら、前のめりになっていた体を起こし――、

自身の目前で長刀を高く構える女を見た。

ゾクリ、と。これまでにない悪寒が全身を走る。アイズは反射的に剣に風をかき集め、持てる限りの力で振り上げた。幸運にもそれは、振り下ろされた必殺の袈裟斬りに寸前で剣を潜り込ませる形となり、辛うじて防御することに成功する。

直後、空気が爆せた。

「がぁっ……!?」

押し寄せる衝撃にアイズの体は容易く持ち上げられ、そのまま倒壊していた建物の瓦礫へと叩き付けられた。肺から全ての空気が吐き出され、視界が一瞬だけ真っ白に染まる。全身を走る痺れにアイズはどうすることも出来ず、とうとうその手からデスペレートを離してしまった。カラン、と乾いた音が響く。

「やっと終わりだ」

刀身が粉々に砕け散り、最早役に立たなくなった得物を投げ捨て、女は身動きの取れ

ないアイズへと疾駆する。大きく振りかぶられた右腕、尋常でない力を有する女から放たれるそれをまともに食らえば、いくらアイズでも命の保証などどこにもない。そして、今の彼女にその一撃を避ける術はなかった。

殺られる、繰り出された掌底にアイズが覚悟を決めた瞬間――、

突如、女の足元にあった土を抉られた。

「ちぃ！」

「え……？」

突然の出来事に女が苛立ちの声を溢しながら後ろに跳躍し、アイズが困惑の声を漏らす。一体何が起きたのかと呆然とする中、そんな彼女の前に彼等は現れた。

「やれやれ、なんとか間に合ったか」

長槍を携えた金髪の小人族（パルゥム）、【勇者（ブレイバー）】フィン・ディムナ。

「あぁ、無事のようだな、アイズ」

一つに結ばれた深緑の髪を揺らすハイ・エルフの麗人、【九魔姫（ナイン・ヘル）】リヴェリア・リヨス・アールヴ。

「大丈夫ですか、アイズさん!?」

山吹色の長髪を束ねたエルフの少女、【千の妖精（サウザンド・エルフ）】レフィーヤ・ウィリディス。

「……」

緑色の戦装束を纏い、覆面で素顔を隠したエルフ、【疾風】リュー・リオン。
そして、弾切れになったガトリング銃を消し、黒衣の狩装束をはためかせながら一歩を踏み出す、特徴的な尖った帽子から紅蓮の髪に翡翠色の瞳を覗かせる男。
「見つけたぞ。次は逃がさん」
【狩人】ヴィンセント・ローズ。
迷宮都市オラリオの頂点に立つＬｖ．７は、捉えた獲物にニタァと獰猛な笑みを浮かべた。

第17話

「フィン、あれは私が一人で狩らせてもらおう」
「出来ることなら殺さないでくれると助かるよ。彼女には聞きたいことがあるからね」
全身から殺意を滲ませ、両手に《ノコギリ槍》と変形前の《回転ノコギリ》を掴んだヴィンセント。一歩ずつ地面を踏み締め、ゆらりゆらりと歩み寄ってくる彼の姿に、しかし女ははっと嗤った。
「わざわざ数の有利を捨てるとはな。馬鹿か、貴様？」
「私の”狩り”は私だけのもの、余計な手出しなど必要ない。邪魔になるだけだ」
「大層な自信だな。だが、それもすぐに剥がしてやる」
そう吐き捨てるなり飛び出した女は、再び大きく腕を振りかぶり、ヴィンセントへと殴り掛かった。唸り、ブゥンと豪快に風を切った拳は、しかしヴィンセントには当たらず空振りに終わる。そのまま二度、三度と同様に拳が放たれるが、その結果は変わらない。
「速いな。Ｌｖ．５……いや、６と同等といったところか」
「お喋りとは随分と余裕だな……！」

「なら黙らせてみろ。私の口を止めたくば、その程度の鈍(のろ)い腕では到底足りんぞ」
「ほざいたな。ならば死ね」
　ギリリと歯を食い縛り、緑色の瞳でヴィンセントを睨み付ける女。次の瞬間、そのしなやかな右脚がヴィンセントへと迫った。武器を持たない女が現状で繰り出せる、最強かつ最速の一撃。純粋な力だけでアイズを圧倒せしめた彼女の蹴りは当たれば最後、受けた部位は砕けるか破裂するか、どちらかの末路を辿ることとなるだろう。
　故に――ヴィンセントは躱す。
　外野にいたフィンやリヴェリアの目にも残像すら見せる超高速の襲脚を、顔色一つ変えぬまま紙一重で見切ってみせた。
「っ……!?」
　女はここにきて初めて動揺を晒した。あれだけの技を向けられた場合、普通ならば反応する間もなく直撃して死ぬ。仮に相手が反応したとしても、必死の形相を浮かべて全力で回避行動に移る筈なのだ。それは、女の一撃が必殺であるからに他ならない。
　渾身の一撃が難なく、至極あっさりと躱された。己の力がまるで通用しない。その事実に緑色の瞳が見開かれた時、ヴィンセントの右腕が軽く動いた。そして――、
「ぐぅ……!?」
　脇腹に走る激痛。剣で斬られるものとも、槍で突かれるものとも違う、ノコギリで肉

を強引に引きちぎられるという痛みに、女の表情が苦悶に染まった。傷口から鮮血が飛散し、ポタポタと落ちては溜まりを作る。

「どうした？」

「っ……！　舐める――なっ!?」

余裕を崩さないヴィンセントに女は激昂した直後、今度はヴィンセントの方から攻撃を仕掛けた。血の付着したノコギリ槍のギザギザの刃と、回転ノコギリの持ち手部分に当たる槌鉾。軽やかなステップで開かれていた距離を一気に詰め、彼は二つの仕掛け武器を駆使して女を攻める。

ノコギリ槍を躱せば槌鉾が振るわれ、槌鉾を防げばノコギリ槍が牙を向く。尋常でないスピードで襲い来る連撃は女に反撃の期を与えず、そして確実に傷を負わせていった。

「ぐっ……！　ちぃ、この……！」

「ククッ、さぁ避けろよ。細切れの肉になりたくなければな」

「何――っ!?」

ヴィンセントがそう告げると同時にギュィィン、と耳障りな金属音が鳴り響いた。その音に対して反射的に頭を引いた女の目前を、円盤部分を連結させた回転ノコギリが通過する。斬られた前髪が何本か宙を舞い、はらはらと地面に落ちていった。

「っ……背負っていた円盤が、槌と一つになっているのか」
「ご名答。「火薬庫」の生み出した回転ノコギリ、見た目は珍妙だが仕掛け武器としては一級品だ。回転する刃に敵を巻き込み、ズタズタに引き裂く。あぁ、実に悪くない」
左右の仕掛け武器を持ち変え右手一本で掴んだ回転ノコギリを、ヴィンセントはペロリと唇を舐めながら肩に担いで支える。重量のあるが故に両手での使用が想定されている仕掛け武器なのだが、片手で扱うことも不可能ではない。大振りになる隙を左手のノコギリ槍で補えば、相手である女には十分な驚異となりうるだろう。女自身もそれを察したのか、ギリリと奥歯を噛み締めた。
「（宝玉（たね）の回収も失敗。『アリア』も手慣れの冒険者に守られている、か。名残惜しいがここは一旦退くしか――）」
「考え事か。悠長なことだな」
はっとなって顔を上げた瞬間、女の目に回転ノコギリを振り上げたヴィンセントが映った。重ねられた無数の刃が一斉に回転し、ギャリギャリという金属音と火花を撒き散らしながら振り下ろされる。
女はその一撃を避けた。己から見て左側、すなわちヴィンセントにとっての右側に向かって跳ぶ。左手に握られたノコギリ槍による追撃を考慮しての判断は、この場における最適解に等しかった。

「調子に――乗るなぁ！」

女が吼え、握り締めた拳をヴィンセント目掛けて放つ。確かな怒りを孕んだそれは、先に振るわれたものよりずっと速い。

迫る剛拳を視界の端に収めたヴィンセントは、焦るでも慌てるでもなく、地面に叩き付けた回転ノコギリから手を離した。そして、その掌を女に向けながらポツリと呟く。

「――星の娘よ」

刹那、怪しく蠢いた掌から無数の触手が顕現し、女の体を容赦なく貫いた。

「がっ――!?」

詠唱も何もない、息をするように繰り出された予想外の一手に、女は吐血しながら目を見開き、その動きを強制的に停止させられて膝を付く。一体何が起きたのか、それすらも分からない女だったが、そんな彼女にも一つだけ確信出来ることがあった。

このままでは――死ぬ。

ガンガンと警鐘を鳴らす本能に従い、女は硬直する上半身を全力で横に逸らす。その判断は結果として正しく、胸を穿つ筈だったヴィンセントの手刀は女の左肩を抉る程度に留まった。それでも受けた傷は存外に深く、少なくない量の血が宙を舞う。

「うっ……ぐぅ!?　あぁぁ……！」

「ほぉ、上手く逃れたか。先の一撃、確実に決まるものだと思っていたが……クククッ、

少し驚いたぞ」

　その言葉の内容に反して愉快だと言わんばかりに、ヴィンセントは血に濡れた右手を見てくつくつと笑う。一方の女は傷を負った左肩を押さえつつ、だらりと垂れ下がった左腕を一瞥し、忌々しげに舌打ちを鳴らした。僅かに動かすだけで苦痛が伴うようになったそれは、最早この戦闘では使い物にならない。

「貴様は……一体なんだ?」

　絶え間なくやって来る痛みに表情を歪めながら、女はゆっくりと口を開く。

「貴様の戦い方や在り方は、そこな冒険者共とは全く別のものだ。いや、そもそも貴様は冒険者か?　貴様はまるで――」

「モンスター……獣だとでも言いたいのか?」

　女の台詞を遮るように言い放ったヴィンセントは、手放した回転ノコギリを拾い直し、再び肩に担いだ。鋭い翡翠色の瞳から覗く眼光に射抜かれ、女は無意識のうちに後退る。

「私が何者かなどと、そんなことは至極どうでもいい。人間でも、冒険者でも、モンスターでも、獣でも、それこそナメクジでも。ただ、一つだけ言っておいてやる」

　ヴィンセントは一旦言葉を区切った。そして、

「私は狩人だ。〝狩り〟に優れ、無慈悲で、血に酔った狩人。獣を狩り、上位者を潰し、

モンスターを殺す存在だ。私以外の全ては等しく獲物に過ぎん。当然、貴様もな」

そう告げるや否や、ヴィンセントは地を蹴って加速した。Ｌｖ．７の持つ規格外の『敏捷』を生かした俊足は、音すら置き去りにして女の死角へ回り込むことを可能にする。その姿を目視することは不可能、女が気付いた時には既に遅く――、

血に餓えたノコギリの円盤が女の脇腹に喰らい付き、その肉を盛大に引き裂いては周囲に鮮血を撒き散らした。

「ガァッ……!?」

「……あぁ、そういえば殺すなと言われていたか」

戦闘前にフィンから言われた言葉をここにきて思い出したヴィンセントは、押し込もうとしていた回転ノコギリをすっと引いた。これにより女の体は、両断という結末を辛うじて免れることとなる。しかし、大きく抉られたその傷は決して軽いものではなかった。

「殺すなと言われた以上、命だけは残しておいてやろう。だが、再び面倒事を起こされるのはごめんだ。その四肢はもらっていくぞ」

ぐらりと上体を揺らして崩れ落ちる女の右腕を掴み、あらぬ方向へと強引にねじ曲げる。ゴキリともメキリとも取れる、およそ人体から発せられるものではない音に、女からは絶叫が上がり、その場に居合わせていた何人かは思わず目を背けた。そして、それ

は無慈悲にも三回繰り返される。
　目を背けた面々が再び視線を戻すと、そこには両手両足を砕かれて虫の息になりながら、腹部より流れる夥しい量の血に沈む女と、その傍らに立ち、どこか満足げな表情を浮かべるヴィンセントがあった。迷宮都市オラリオの誇るＬｖ．７の冒険者、【狩人】。その力と狂気の一端に触れ、誰もが絶句して動けなくなる中でただ一人、リューだけはいつものように彼へ近付くと、懐から取り出した回復薬（ポーション）を女の傷口に垂らした。
「……やりすぎです、ヴィンス。いつもの貴方ならもっと上手くやれていた筈だ」
「その女は人ではない、多少痛め付けたところで簡単には死なんさ。とはいえ貴公の言う通り、どうやら柄にもなく昂ってしまっていたらしい」
　女の止血を進めながら呆れるように呟いたリューに悪びれもなく言い放ち、込み上げる笑いを噛み殺すヴィンセント。彼は女の傷口が塞がったこと、そして女が完全に気絶していることを確認すると、その首根っこを掴み、ゴミを捨てるようにフィン達の前へ放り投げた。その際、顔面蒼白になっていたレフィーヤから「ひっ……！」と、短い悲鳴が漏れる。
「約束通り、その女はくれてやる。後の面倒事は貴公等に任せるぞ。精々、上手く情報を吐かせることだな」
「……あぁ、分かっているさ。感謝するよ、ヴィンセント。何か聞き出せたなら後日、君

にも伝えさせてもらうとしよう」

「吉報を期待しておく」

努めて冷静であろうとするフィンを最後に一瞥し、ヴィンセントはリューと共にスタスタと去っていった。殺人事件の犯人である女を叩きのめし、捕らえるという目的を達した以上、彼等がここに留まる理由もなくなったのだ。残された【ロキ・ファミリア】の冒険者達はその背中を見送る他なく、やがて二人が見えなくなったところで深い溜め息をついた。

「……相変わらず凄まじい男だったな、あれは」

「虚空より好きな武器を瞬時に取り出す能力、詠唱なしの魔法、莫大な戦闘経験によって培われた腕と直感、そして何より『敵を殺す』という行為に一切の躊躇がない。例えそれが人であってもだ。本当に彼とは敵対したくないよ。命がいくつあったって足りやしない」

そう言って小さく苦笑したフィンは、その後すぐに意識を切り替え、倒れ伏して動かない女へと目をやった。一人の冒険者としてでなく【ロキ・ファミリア】の団長として、今回の一件を含めた今後の対応について考えを張り巡らせていく。

「……ひとまず、今回の襲撃で壊滅した街の復興や怪我人の治療が落ち着くまではここに留まろう。本当ならもっと深層まで潜りたかったけれど、こうなった以上は一旦地上

に戻ろうと思う。リヴェリア、アイズ、レフィーヤ、それでいいかい？」
「異存はない。女の監視だけは複数人で当たるよう、注意しておこう」
「……うん」
「は、はい……」
　団長たるフィンの決定には頷いたものの、リヴェリアを除く二人の表情は決して晴れていない。己の弱さをあらためて思い知らされ、力なく項垂れるアイズは人知れず強くなる決意を新たに固め、そんな彼女をレフィーヤはただ、未だに青ざめた顔で見つめることしか出来なかった。

△▽△▽

　１８階層での一件から数日。地上に戻ってきたヴィンセントが真っ先に取り掛かったことといえば、此度の戦闘で使い果たした水銀弾を補充することであった。本拠地（ホーム）に貯蔵していた材料一式をかき集めた彼は、そのまま工房に籠り、およそ数日の間、食事や睡眠を除いて部屋から出てこなかったという。
　そんなヴィンセントの行動に、【ヘスティア・ファミリア】の一員となって日の浅いベルは最初こそ心配していたが、「別に珍しいことじゃないから大丈夫だよ」というヘス

ティアの言葉を受けて納得し、二日が経過する頃にはすっかりいつもの様子に戻っていた。

「ふぅ……すっかり遅くなっちゃったなぁ」

自身の専属アドバイザーであるエイナと一日を過ごし、彼女を自宅まで送り届けたベルは、すっかり茜色に染まった空を見上げた。彼が左手から下げる紙袋、その中身はエイナからのプレゼントである緑玉石（エメラルド）色のプロテクターだ。手首から肘の辺りまでの長さで、盾と同じ機能を有するその防具は存外に軽量であり、両手に武器を握って戦うベルの動きを阻害することもなければ、薄くなりがちな防御面もカバー出来る、まさに彼のためにあるかのような性能をしていた。

そんな素敵な贈り物を受け取ったベルは、お返しとばかりに途中で立ち寄った店で深紅（ルベライト）の宝石の嵌められた指輪を購入し、別れる際にエイナへと贈った。およそ三〇〇〇〇ヴァリスにもなる出費は痛いが、最後に見たエイナの嬉しそうな表情と「ありがとう！」という言葉に比べれば端金にも等しい。そのことを思い出したベルは一人笑みを漏らした。

そして、人混みを避けるように小さな路地に足を踏み入れた瞬間、それは起きた。

「うわっ!?」

「きゃっ!?」

ドン、と強い衝撃にふらつくベル。僅かに痛む腰の辺りを押さえながらベルが視線を下に向けると、すぐ近くに倒れ込む一人の少女の姿が映った。
彼の主神たるヘスティアよりも更に低い身長に、うなじを隠す程の長さをした栗色の髪。小人族（パルゥム）だと気付くのにそう時間は掛からなかった。
「あの、大丈夫ですか……？」
「見つけたぞ！　この糞餓鬼が！」
うつ伏せになって倒れる少女へ掛けたベルの声を遮るように、路地の暗がりから一人の男が怒声と共に現れた。それに反応してか、少女の小さな体がビクッと跳ねる。
「もう逃がさねぇからな……！」
背負った大剣に手を伸ばしつつ、男はゆっくりと少女に近付いていく。
そんな男の前に、ベルは一歩を踏み出した。
「あ？　なんだテメェ？　邪魔なんだよ、どけ」
「……彼女に、何をするつもりですか？」
「関係ねぇだろ!?　いいからさっさとどきやがれ！　叩き斬るぞ！」
唾を飛ばしながら叫ぶ男を、しかしベルは動じることなく静かに見据える。やがて、彼は首を横に振った。
「駄目だ、やっぱりあなたを通す訳にはいかない」

「餓鬼がっ……！　調子に乗りやがって！」
「っ、逃げて！　早く！」
いよいよ剣を抜いて襲い掛かってきた男に、ベルは後ろの少女目掛けてそう告げると、プロテクターの入った袋を置き、腰の鞘から《寵愛の刃》の片割れたるナイフを抜く。相手は格上であると見抜いていたベルではあるが、その内心は驚く程に落ち着いており、迫る刃に対して冷静な対処を可能とした。自分の後ろには守るべき女の子がいる、それだけを考えて。
防ぐのではなく、流す。
握り締めたナイフで振り下ろされた剣を滑らせ、あっさりと受け流したベルは、ステップを踏んで懐に潜り込む。そして鉄拳を一発、男が怯んだ隙に剣を持つ右腕を左手で掴むと、そのまま喉元へナイフの切っ先を押し当てた。
「はっ……!?」
「退いてください。でないとどうなるか、言わなくても分かりますよね？」
ベルの冷たい宣言に、ごくりと男は唾を飲む。
得物を急所に突き付けられ、自分の武器は押さえられている。
反撃は絶望的、それを悟った男は震える声で降参を告げ、ベルが拘束を解いた瞬間に脱兎のごとく逃げ出した。

「……はぁ」

男が完全に逃げ去ったことを確認してから、ベルは大きく息をついてその場に座り込んだ。額からは滝のような汗が流れており、今までにない程の速度で脈を打つ心臓に思わず胸を押さえる。張り詰めていた緊張がここにきて緩み、その反動が一気にやってきたのである。

「（さっきのはあの人が僕を侮っていたからこそ通じた技……二回目は警戒してくるだろうし、もう使えないだろうなぁ……）」

なんにせよ、運が良かった。

少女の逃走、及び男の撃退に成功したベルは、誰もいない路地で一人安堵した。